

# HP SiteScope

Windows, Solaris, および Linux オペレーティング・システム用

ソフトウェア・バージョン: 11.10

---

## デプロイメント・ガイド

ドキュメント・リリース日: 2011 年 2 月 (英語版)

ソフトウェア・リリース日: 2011 年 2 月 (英語版)



## 法的通知

### 保証

HP の製品およびサービスの保証は、かかる製品およびサービスに付属する明示的な保証の声明において定められている保証に限ります。本書の内容は、追加の保証を構成するものではありません。HP は、本書に技術的な間違いまたは編集上の間違い、あるいは欠落があった場合でも責任を負わないものとします。

本書に含まれる情報は、事前の予告なく変更されることがあります。

### 制限事項

本コンピュータ・ソフトウェアは、機密性があります。所有、使用、コピーには、HP による有効なライセンスが必要です。FAR 12.211 および 12.212 に従って、商用コンピュータ・ソフトウェア、コンピュータ・ソフトウェアのドキュメント、および商用アイテムの技術データは、HP の標準商用ライセンス条件に基づいて米国政府にライセンスされています。

### 著作権

© Copyright 2005 - 2011 Hewlett-Packard Development Company, L.P.

### 商標

Adobe® および Acrobat®は、Adobe Systems Incorporated の商標です。

Intel®, ®Pentium®, および Intel® Xeon® は、米国およびその他の国における Intel Corporation の商標です。

Java は、Oracle またはその子会社、あるいはその両方の登録商標です。

Microsoft®, Windows®, Windows NT®, および Windows® XP® は、Microsoft Corporation の米国登録商標です。

Oracle は、Oracle Corporation またはその子会社、あるいはその両方の登録商標です。

UNIX® は The Open Group の登録商標です。

### 謝辞

本製品には、Apache Software Foundation (<http://www.apache.org>) (英語サイト) が開発したソフトウェアが含まれています。

本製品には、JDOM Project (<http://www.jdom.org>) (英語サイト) が開発したソフトウェアが含まれています。

## 文書の更新

本書のタイトル・ページには、次の識別情報が含まれています。

- ソフトウェアのバージョンを示すソフトウェア・バージョン番号
- ドキュメントが更新されるたびに更新されるドキュメント・リリース日
- 本バージョンのソフトウェアをリリースした日付を示す、ソフトウェア・リリース日

最新のアップデートまたはドキュメントの最新版を使用するには、次の URL にアクセスしてください。

**<http://support.openview.hp.com/selfsolve/manuals>**

このサイトでは、HP Passport に登録してサインインする必要があります。HP Passport ID の登録は、次の URL にアクセスしてください。

**<http://h20229.www2.hp.com/passport-registration.html>** (英語サイト)

または、HP Passport のログイン・ページの [**New users - please register**] リンクをクリックしてください。

適切な製品サポート・サービスに登録すると、更新情報や最新情報も入手できます。詳細については HP の営業担当にお問い合わせください。

## サポート

HP ソフトウェアのサポート Web サイトは、次の場所にあります。

**<http://support.openview.hp.com>**

この Web サイトでは、連絡先に関する情報や、HP ソフトウェアが提供する製品、サービス、およびサポートの詳細情報を提供します。

HP ソフトウェア・サポート・オンラインでは、お客様にセルフ・ソルブ機能を提供しています。ビジネスの管理に必要なインタラクティブな技術サポート・ツールにアクセスするための効率的な手段を提供します。有償サポートをご利用のお客様は、サポート・サイトの次の機能をご利用いただけます。

- 関心のある情報や文書の検索
- サポート相談や改善依頼の送信および追跡
- ソフトウェア・パッチのダウンロード
- サポート契約の管理
- HP サポート連絡先の検索
- 使用可能なサービスに関する情報の閲覧
- ほかのソフトウェア・カスタマとの意見交換
- ソフトウェア・トレーニングの検索と申し込み

ほとんどのサポート・エリアでは、HP Passport ユーザとして登録し、ログインする必要があります。また、多くの場合、サポート契約も必要です。HP Passport ID の登録は、次の URL にアクセスしてください。

**<http://h20229.www2.hp.com/passport-registration.html>** (英語サイト)

アクセス・レベルの詳細情報については、次の URL を参照してください。

**[http://support.openview.hp.com/access\\_level.jsp](http://support.openview.hp.com/access_level.jsp)**

---

# 目次

はじめに.....	9
本書の構成.....	9
対象読者.....	10
必要な情報の見つけ方.....	11
HP SiteScope ドキュメント.....	11
その他のオンライン・リソース.....	12
文書の更新.....	13

## 第 I 部 : SITESCOPE の紹介

第 1 章 : SiteScope の紹介.....	17
第 2 章 : スタートアップ・ロードマップ.....	19
第 3 章 : デプロイメントの方法と計画.....	21
エンタープライズ・システム監視の方法.....	21
ビジネス・システム・インフラストラクチャの評価.....	23
SiteScope サーバのサイズ設定.....	24
ネットワークの場所と環境.....	25
Windows 環境の場合に考慮する事項.....	26
UNIX 環境の場合に考慮する事項.....	27
第 4 章 : エージェントレス監視について.....	29
SiteScope 監視機能について.....	29
エージェントレス監視環境について.....	31
第 5 章 : SiteScope のライセンス.....	35
SiteScope のライセンスの概要.....	35
SiteScope ライセンスのタイプについて.....	36
モニタ・ライセンスの概要.....	40
ライセンス・ポイント数の見積もり.....	57
SiteScope ライセンスの追加.....	61

**第 II 部 : SITESCOPE をインストールする前に**

<b>第 6 章 : SiteScope をインストールする前に</b> .....	<b>65</b>
インストールの概要.....	66
システム要件.....	68
認定されている構成.....	74
SiteScope キャパシティに関する制限事項.....	75
SiteScope サポート・マトリックス.....	75
<b>第 7 章 : SiteScope のアップグレード</b> .....	<b>77</b>
アップグレードを実行する前に.....	78
既存の SiteScope インストールのアップグレード.....	79
End Of Life Monitor Viewer の使用.....	80
SiteScope ディレクトリの命名.....	83
SiteScope 構成データのバックアップ.....	83
設定データのインポート.....	84
カスタム・プロパティの検索 / フィルタ・タグへの変換.....	85
注意事項と制限事項.....	87

**第 III 部 : SITESCOPE のインストール**

<b>第 8 章 : SiteScope のインストール</b> .....	<b>93</b>
インストールの流れ.....	93
Solaris または Linux にインストールする場合の準備.....	95
64 ビットのインストール準備.....	96
インストール・ウィザードを使用してインストール.....	97
コンソール・モードを使用した Solaris または Linux へのインス トール.....	121
トラブルシューティングおよび制限事項.....	129
<b>第 9 章 : サイレント・モードでの SiteScope のインストール</b> .....	<b>133</b>
サイレント・モードでの SiteScope のインストールについて.....	133
サイレント・インストールの実行.....	134
<b>第 10 章 : SiteScope 設定ツールの使用</b> .....	<b>135</b>
Windows プラットフォームでの設定ツールの実行.....	135
Solaris または Linux プラットフォームでの設定ツールの実行.....	143
コンソール・モードでの Solaris または Linux での設定ツール の実行.....	150
<b>第 11 章 : SiteScope のサイズ設定</b> .....	<b>157</b>
SiteScope のサイズ設定について.....	157
SiteScope キャパシティ・カリキュレータ.....	158
Windows プラットフォーム上での SiteScope のサイズ設定.....	160
Solaris および Linux プラットフォーム上での SiteScope の サイズ設定.....	164
注意事項と制限事項.....	169

<b>第 12 章 : SiteScope のアンインストール</b> .....	171
Windows プラットフォームの SiteScope のアンインストール.....	171
Solaris または Linux プラットフォームの SiteScope のアンインストール.....	176

#### **第 IV 部 : SITESCOPE の安全な稼働**

<b>第 13 章 : SiteScope プラットフォームのセキュリティ強化</b> .....	179
SiteScope プラットフォームのセキュリティ強化.....	179
SiteScope ユーザ設定の設定.....	180
パスワードの暗号化.....	180
SSL (Secure Socket Layer) を使用した SiteScope へのアクセス.....	180
Run-time Service Model にバルク・データを送信するための SiteScope の設定.....	181
<b>第 14 章 : 権限と資格情報</b> .....	183
<b>第 15 章 : SSL を使用するための SiteScope の設定</b> .....	205
SiteScope での SSL の使用について.....	205
SSL を使用するための SiteScope の準備.....	206
SSL 用の SiteScope の設定.....	210
クライアント証明書を要求する BSM サーバに接続するための SiteScope の設定.....	212
BSM サーバがクライアント証明書を必要とする時 SiteScope でトポロジ・ディスカバリ・エージェントの設定方法.....	216

#### **第 V 部 : 作業の開始と SITESCOPE へのアクセス**

<b>第 16 章 : インストール後の管理</b> .....	223
インストール後の管理チェックリスト.....	223
<b>第 17 章 : SiteScope を使った作業の開始</b> .....	227
SiteScope サービスの開始.....	227
Windows プラットフォームでの SiteScope サービスの開始と停止.....	228
Solaris および Linux プラットフォームでの SiteScope プロセスの開始と停止.....	229
SiteScope への接続.....	229
SiteScope クラシック・インタフェース.....	231
注意事項と制限事項.....	231

**第 VI 部：付録**

<b>付録 A: IIS と SiteScope の Tomcat サーバとの統合</b> .....	<b>241</b>
Apache Tomcat サーバ・ファイルの設定 .....	241
IIS の設定 .....	245
<b>付録 B: SiteScope と SiteMinder との統合</b> .....	<b>249</b>
SiteMinder との統合について .....	250
統合の要件.....	251
統合のプロセス.....	251
SiteMinder ポリシー・サーバの設定 .....	252
SiteMinder を使用するための SiteScope の設定.....	254
IIS の設定 .....	254
さまざまな SiteScope ロールの権限の定義 .....	255
SiteScope へのログオン .....	255
注意事項とガイドライン.....	256
<b>索引</b> .....	<b>257</b>



---

# はじめに

本書では, HP SiteScope のデプロイおよび設定方法について詳しく説明します。

## 本章の内容

- ▶ 本書の構成 (ページ 9)
- ▶ 対象読者 (ページ 10)
- ▶ 必要な情報の見つけ方 (ページ 11)
- ▶ HP SiteScope ドキュメント (ページ 11)
- ▶ その他のオンライン・リソース (ページ 12)

## 本書の構成

本書は, 次の部で構成されています。

### 第 I 部 SiteScope の紹介

SiteScope について紹介し, スタートアップ・ロードマップを示します。また, デプロイメント計画, エージェントレス監視, および SiteScope ライセンスに関する情報も提供します。

### 第 II 部 SiteScope をインストールする前に

インストールの概要と, システム要件, 推奨サーバ設定について説明します。既存の SiteScope のアップグレード方法についても説明します。

### 第 III 部 SiteScope のインストール

Windows, Linux, および Solaris の各プラットフォームでの SiteScope のインストールとアンインストールの方法について説明します。また、設定ツールを使用した SiteScope の設定方法、オペレーティング・システムと SiteScope のサイズ設定方法、および多くのインスタンスを監視する場合に最適なパフォーマンスを得る方法についても説明します。

### 第 IV 部 SiteScope の安全な稼働

SiteScope プラットフォームを強化するためのオプションの設定方法、モニタにアクセスするのに必要なユーザ権限と資格情報の設定方法、および Secure Sockets Layer (SSL) を使用するための SiteScope の設定方法について説明します。

### 第 V 部 作業の開始と SiteScope へのアクセス

SiteScope サービスの開始と停止方法と、初めて SiteScope にログインする方法について説明します。また、SiteScope のインストールの後に実行しなければならない推奨管理手順についても説明します。

### 第 VI 部 付録

IIS の設定方法と SiteScope と SiteMinder ポリシー・ベース認証の統合方法について説明します。

## 対象読者

本書は以下を対象読者としています。

- ▶ SiteScope 管理者
- ▶ Business Service Management 管理者

本書の読者は、エンタープライズ・システムの管理および HP Business Service Management データ・コレクタに精通しているものとします。

## 必要な情報の見つけ方

本書は、SiteScope ヘルプに含まれています。SiteScope ヘルプは、すべての SiteScope ドキュメントへの単一のアクセス・ポイントを提供します。

SiteScope ヘルプ にアクセスするには、SiteScope サーバ上で **[ヘルプ]** > **[SiteScope ヘルプ]** を選択します。

## HP SiteScope ドキュメント

SiteScope ヘルプ は、SiteScope のデプロイメント、管理、および使用に関する包括的な情報を提供します。

SiteScope ヘルプ には、次のドキュメントが付属しています。

**リリース・ノート (新機能紹介を含む)** : 新機能、バージョンの制限事項、最新アップデートのリストが収められています。SiteScope で、**[ヘルプ]** > **[新機能]** を選択します。

**オンライン・ヘルプ** : SiteScope ヘルプには、SiteScope で**[ヘルプ]** > **[SiteScope ヘルプ]** を選択してアクセスできます。コンテキスト・センシティブ・ヘルプ は、特定の SiteScope ページから **[ヘルプ]** > **[このページのヘルプ]** を選択するか、特定のウィンドウで **[ヘルプ]** ボタンをクリックします。

SiteScope ヘルプには、以下のオンライン・リソースがあります。

- ▶ 『Documentation Updates』 (英語版) : SiteScope ヘルプに対する更新の詳細の一覧を示します。
- ▶ 『Glossary』 (英語版) : SiteScope で使用される主要な用語を定義します。
- ▶ 『SiteScope の使用』 : SiteScope アプリケーションの管理方法と操作方法について説明しています。
- ▶ 『Monitor Reference』 (英語版) : 監視環境を設定する方法および SiteScope および統合モニタを設定するについて説明します。
- ▶ 『Best Practices for the SiteScope-Business Service Management/ Operations Manager Integration』 (英語版) : SiteScope と Business Service Management および Operations Manager 製品との統合を使用および設定するうえでのベスト・プラクティスについて説明します。

**オンライン・ドキュメントと印刷用ドキュメント** : すべての SiteScope ドキュメントは、PDF またはほかの印刷形式で入手できます。これらのファイルにアクセスするには、SiteScope で **[ヘルプ]** > **[SiteScope ヘルプ]** を選択します。

次の文書は、PDF/Word 形式のみで利用可能です。

- ▶ 『**HP SiteScope Failover Manager Guide**』 (英語版) : PDF 形式で利用可能な本書は、インフラストラクチャ監視にフェイルオーバー機能を実装できる SiteScope の特別なバージョンである SiteScope Failover Manager のインストール方法と作業方法について説明します。
- ▶ 『**SiteScope Monitor Metrics and Measurements**』 (英語版) : このドキュメントは、Word 形式で利用可能であり、すべての SiteScope モニタと関連カウンタまたはメトリックスに関する情報を集めたものです。このドキュメントには、モニタごとに設定可能なすべてのメトリックスと、サポートされるアプリケーションやオペレーティング・システムのバージョンが一覧表示されています。このドキュメントの最新版は、HP ソフトウェア・サポート担当者にお問い合わせください。

## その他のオンライン・リソース

**トラブルシューティングと技術情報** : ソフトウェア・サポート Web サイトのトラブルシューティング・ページでセルフ・ソルブ技術情報を検索できます。**[ヘルプ]** > **[トラブルシューティング&ナレッジ ベース]** を選択します。この Web サイトの URL は、<http://support.openview.hp.com/troubleshooting.jsp> です。

**HP Software サポート** : HP Software サポート Web サイトにアクセスします。このサイトで、セルフ・ソルブ技術情報を参照できます。また、ユーザ・ディスカッション・フォーラムへの投稿や検索、サポート依頼の送信、パッチや更新されたドキュメントのダウンロードなども行えます。**[ヘルプ]** > **[HP Software サポート]** を選択します。この Web サイトの URL は、<http://support.openview.hp.com> です。

ほとんどのサポート・エリアでは、HP Passport ユーザとして登録し、ログインする必要があります。また、多くの場合、サポート契約も必要です。

アクセス・レベルの詳細情報については、次の URL を参照してください。

[http://support.openview.hp.com/access\\_level.jsp](http://support.openview.hp.com/access_level.jsp)

HP Passport ユーザ ID の登録は、次の場所で行います。

<http://h20229.www2.hp.com/passport-registration.html>（英語サイト）

**HP ソフトウェア Web サイト** : HP ソフトウェア Web サイトにアクセスします。このサイトでは、HP ソフトウェアの製品に関する最新情報を提供します。新しいソフトウェアのリリース、セミナー、展示会、カスタマ・サポートなどの情報も含まれています。[ヘルプ] > [HP ソフトウェア Web サイト] を選択します。この Web サイトの URL は、

<http://welcome.hp.com/country/jp/ja/prodserve/software.html> です。

## 文書の更新

HP ソフトウェアは製品のドキュメントを新しい情報で継続的に更新しています。

最新のアップデートまたはドキュメントの最新版を使用していることを確認するには、HP ソフトウェア製品マニュアル Web サイト

(<http://support.openview.hp.com/selfsolve/manuals>) にアクセスしてください。

はじめに

# 第 I 部

---

## SiteScope の紹介





# 1

---

## SiteScope の紹介

SiteScope は、サーバ、オペレーティング・システム、ネットワーク・デバイス、ネットワーク・サービス、アプリケーション、アプリケーション・コンポーネントなどから構成される、分散 IT インフラストラクチャの可用性とパフォーマンスの確認を目的とする、エージェントレス監視ソリューションです。

SiteScope は Web ベースでインフラストラクチャを監視し、軽量で柔軟にカスタマイズでき、実運用システムにデータ収集エージェントをインストールする必要がありません。SiteScope は、インフラストラクチャの動作を確認するために必要な情報をリアルタイムで提供します。ユーザは常に問題の通知を受け、それらが重大なものになる前にボトルネックを解決できます。

SiteScope は、テンプレート、テンプレート変更適用ウィザード、自動テンプレート・デプロイメントなど、一連の標準化されたモニタ・タイプと設定を 1 つの構造に開発できるさまざまなツールを提供します。SiteScope テンプレートを組織全体に渡り迅速に配備し、監視側のインフラストラクチャがテンプレートの標準セットに準拠するように素早く更新できます。

SiteScope にはまた、さまざまなメディアでイベント情報の通信と記録に使用できる警告タイプも用意されています。警告テンプレートは、組織のニーズに合わせてカスタマイズできます。

SiteScope は、SiteScope が実行されるサーバの数ではなく、監視される測定値の数に基づいてライセンスされます。測定値とは、システム・リソースの値、パフォーマンス・パラメータ、URL、または同様のシステム応答のことです。つまり、SiteScope のデプロイメントは、組織のニーズおよびインフラストラクチャの要件に合わせて柔軟に規模を変更できます。SiteScope は、HP から提供される永続ライセンス、または新しい SiteScope に含まれる評価ライセンスのどちらかを使用してインストールできます。必要に応じてライセンスをアップグレードして、初期デプロイメントの監視機能を拡張したり、インフラストラクチャ内でデプロイメントを拡張したりできます。

また、SiteScope は、HP Business Service Management (BSM)、HP Software-as-a-Service、および HP LoadRunner/Performance Center など、ほかの HP 製品の監視の基盤としても機能します。SiteScope を配備し、BSM の サービス・レベル管理 などのその他の HP のソリューションを追加することで、確実なインフラストラクチャ監視システムを作成し、ビジネスの視点から IT インフラストラクチャやサービス・レベルを管理できます。

また、SiteScope は HP Operations Manager 製品と連動して、エージェントレスとエージェント・ベースのインフラストラクチャ管理の強力な組み合わせも可能にします。Operations Manager のエージェントとして使用すると、SiteScope ターゲットは Operations Manager Service ビュー・マップに自動的に追加されます。これにより、Operations Manager は SiteScope のデータとモニタの状態をシームレスに表示できます。イベント統合では、SiteScope 警告およびモニタ測定値の状態が Operations Manager に直接送信されます。エージェントレスおよびエージェント・ベースの監視の機能を組み合わせることで、強力で徹底した監視ソリューションを使用できます。Operations Manager 製品の使用方法の詳細については、Operations Manager のマニュアルを参照してください。

# 2

---

## スタートアップ・ロードマップ

本章では、SiteScope を起動して実行するまでの、基本的な手順ごとのロードマップを提供します。

### 1 お使いの SiteScope を登録します。

お使いの SiteScope を登録すると、HP の全製品に関するテクニカル・サポートおよび情報へアクセスできるようになります。また、更新とアップグレードも受けられます。SiteScope のユーザ登録は、HP ソフトウェア・サポート Web サイト (<http://support.openview.hp.com>) で行えます。

### 2 ヘルプの入手先について参照します。

HP サービス、HP ソフトウェア・サポート、および SiteScope ヘルプをはじめとするサポートについての情報を得ます。詳細については、11 ページ「HP SiteScope ドキュメント」を参照してください。

### 3 SiteScope のデプロイメント計画を立てます。

SiteScope ソフトウェアをインストールする前に、完全なデプロイメントの計画を作成します。21 ページ「デプロイメントの方法と計画」を参考にしてください。詳細なデプロイメント計画のベスト・プラクティスについては、HP の営業担当者までお問い合わせください。

### 4 SiteScope をインストールします。

SiteScope アプリケーションのデプロイの基本手順を理解するには、66 ページ「インストールの概要」を参照してください。SiteScope に安全にアクセスする方法の詳細については、179 ページ「SiteScope プラットフォームのセキュリティ強化」を参照してください。

**5 SiteScope にログオンし、システムの管理を開始します。**

Web ブラウザを使用して、SiteScope Web インタフェースにログインします。基本的なプラットフォームおよびモニタ管理作業全体について説明している、223 ページ「インストール後の管理」のチェックリストを使用して、SiteScope を実運用に向けてデプロイする準備をします。

**6 SiteScope をビジネス・ユーザおよびシステム・ユーザに公開します。**

SiteScope のユーザが定義され、監視データの受信が可能な状態で運用が開始されたら、ビジネス・ユーザおよびシステム・ユーザに対して、SiteScope の監視機能、レポート機能および警告機能にアクセスして利用する方法を説明するプロセスを開始します。

SiteScope の使用と管理の詳細については、SiteScope のヘルプを参照してください。

# 3

---

## デプロイメントの方法と計画

### 本章の内容

- ▶ エンタープライズ・システム監視の方法 (ページ 21)
- ▶ ビジネス・システム・インフラストラクチャの評価 (ページ 23)
- ▶ SiteScope サーバのサイズ設定 (ページ 24)
- ▶ ネットワークの場所と環境 (ページ 25)
- ▶ Windows 環境の場合に考慮する事項 (ページ 26)
- ▶ UNIX 環境の場合に考慮する事項 (ページ 27)

### エンタープライズ・システム監視の方法

SiteScope をデプロイすることは、リソース計画、システム・アーキテクチャ設計、綿密に計画された高い導入戦略が必要となるプロセスです。本章では、SiteScope のデプロイメントと使用を成功させるための方法と検討する必要のある項目について説明します。

---

**注：** 次の情報を参考にして、インストールを始める前の準備を行ってください。詳細なデプロイメント計画のベスト・プラクティスについては、HP のプロフェッショナル・サービス担当者までお問い合わせください。

---

システム監視を効果的に行うには、一貫した方法が不可欠です。しかし、エンタープライズ監視ソリューションへの取り組み、開発、およびデプロイの方法は、必ずしも明白ではありません。ソリューションでは、IT インフラストラクチャの役割や、それを組織の成功に結びつける方法を検討する必要があります。システム監視は、組織の主要な目的を達成するために組織によって使用されるサービスの可用性や機能を確認するツールです。システム監視を計画するためのガイドとして次の内容を参考にしてください。

### ▶ 監視対象

エンタープライズ・システムを効果的に管理するには、多層的な監視方法を使用します。**SiteScope** には監視を行うツールが実装されています。あるレベルでは、インフラストラクチャ内の個々のハードウェアの要素を監視して、それらが実行され利用可能であることを確認します。監視対象に、システム上の主要なサービスやプロセスを加えます。これには、低レベルのオペレーティング・システムのプロセスや、主要なアプリケーションの動作状況やパフォーマンスを示すプロセスも含まれています。この上のレベルでは、ビジネス・プロセスのトランザクションを監視して、主要なアプリケーションやサービスが利用可能で期待どおりに機能していることを確認します。

### ▶ イベントを表すしきい値レベル

エンタープライズ・ビジネスに成功するには、情報システムの可用性とパフォーマンスが重要です。モニタに設定するしきい値は、監視するシステムまたはビジネス・プロセスの性質によって決定します。

### ▶ システム・チェックの頻度

システムをチェックする頻度はイベントしきい値の設定と同様に重要です。ミッション・クリティカルな情報システムの可用性は、アクセス可能な期間中は定期的にチェックする必要があります。多くの場合、システムは1日24時間、週7日利用できなくてはなりません。各モニタの[頻度]設定を使用して、**SiteScope** がシステムをチェックする頻度を制御します。チェックを行う時間間隔が長すぎると、問題の検出が遅れる可能性があります。頻繁にチェックしすぎると、すでにビジー状態のシステムを不要にロードする可能性があります。

### ▶ イベント検出時のアクション

監視アプリケーションとして、SiteScope には問題を検出するツールが用意されています。イベントしきい値が発行されたら、SiteScope 警告を使用して通知をタイムリーに送信できます。警告アクションとして電子メール通知が一般的に使用されます。SiteScope には、ほかのシステムと統合が可能なその他の警告タイプも用意されています。

異なる警告トリガ条件で複数の警告定義を定義することにより、警告をエスカレーションするためのスキーマを作成できます。検出されたイベントと警告アクション間の関係をカスタマイズするには、警告の [発行条件設定] を使用します。

利用できなくなったシステムに依存するシステムの監視や警告発行を無効にするイベント・アクションが存在することがあります。一連の警告のカスケディングを避けるには、SiteScope グループおよび SiteScope モニタの依存オプションを使用します。

### ▶ 実行可能な自動応答

問題が検出された場合に理想的なのは、問題に自動的に対応して解決することです。すべてのシステムに対してこれは不可能ですが、SiteScope 警告は、さまざまな状況に対応する柔軟かつ強力な自動修正アクションのためのツールを提供します。お使いの環境で発生する可能性のある問題のうち、自動応答で対処できるものを検討する必要があります。

## ビジネス・システム・インフラストラクチャの評価

- 1 アーキテクチャやデプロイメントに関する決定を行う前に、技術的な要件とビジネス要件を収集します。この段階のアクションは次のとおりです。
  - ▶ 監視するすべてのビジネス・アプリケーションのリストを作成します。このとき、注文処理、アカウントのアクセス機能、データ・クエリ、更新、およびレポートニングなど、エンド・ツー・エンドのサービスを検討する必要があります。
  - ▶ ビジネス・アプリケーションをサポートするサーバのリストを作成します。これには、フロントエンド Web インタフェース、バックエンド・データベース、およびアプリケーション・サーバをサポートするサーバを含める必要があります。
  - ▶ ビジネス・アプリケーションをサポートするネットワーク・デバイスのリストを作成します。これには、ネットワーク・アプリケーションおよび認証サービスが含まれます。

### 第3章・デプロイメントの方法と計画

- ▶ 監視するハートビート要素を特定します。ハートビート要素は、特定のビジネス・システムまたはリソースの可用性の基礎的なインジケータとして機能するサービスです。
  - ▶ 各システムのために監視するリソースを表示するモニタのテンプレートの枠組みを設定します。
- 2** 動作状況を監視するビジネス・システムの関係者と主要な成果物を特定します。成果物は次のように特定します。
- ▶ 生成するレポートは何か
  - ▶ イベント検出時に実行する警告アクションは何か
  - ▶ 警告の送信先は誰か
  - ▶ SiteScope を表示して管理を行うためにアクセスが必要なユーザは誰か
  - ▶ どのような SiteScope 要素がどの関係者にアクセス可能である必要があるか
  - ▶ サービス・レベル・アグリーメントに対するしきい値は何か (必要な場合)
- 3** システム監視機能が動作する制約を理解します。これには、使用できるプロトコル、ユーザ認証要件、ビジネスの機密データを含むシステムへのアクセス、およびネットワーク・トラフィックの制限が含まれます。

## SiteScope サーバのサイズ設定

SiteScope が稼動するサーバのサイズを正しく設定することが、監視のデプロイメントに成功する基礎となります。サーバのサイズ設定は、次のいくつかの要因によって決定します。

- ▶ SiteScope 上で実行されるモニタ・インスタンスの数
- ▶ モニタの平均実行頻度
- ▶ プロトコルの種類と監視するアプリケーションの種類
- ▶ レポートのためにサーバ上で保持する必要がある監視データの量

必要なモニタの数を見積るための出発点は、環境内のサーバ数、それぞれのオペレーティング・システム、および監視するアプリケーションを知ることです。



実行されるモニタ数の見積りに基づいた、推奨されるサーバのサイズ設定の表については、160 ページ「Windows プラットフォーム上での SiteScope のサイズ設定」または 164 ページ「Solaris および Linux プラットフォーム上での SiteScope のサイズ設定」を参照してください。

## ネットワークの場所と環境

大半の SiteScope 監視は、ネットワーク環境でサーバやアプリケーションに要求を行う、Web またはネットワーク・クライアントをエミュレートすることにより実行されます。このため、SiteScope はネットワーク全体にわたって、サーバ、システム、およびアプリケーションにアクセスできなければなりません。これは、SiteScope をインストールする場所を決定する目安となります。

システム、サーバ、およびアプリケーションを監視するために SiteScope が使用する方法は、次の 2 つのカテゴリに分類できます。

- ▶ 標準ベースのネットワーク・プロトコル HTTP, HTTPS, SMTP, FTP, および SNMP が含まれます。
- ▶ プラットフォーム固有のネットワーク・サービスおよびネットワーク・コマンド NetBIOS, telnet, rlogin, およびセキュア・シェル (SSH) が含まれます。

インフラストラクチャの監視ではプラットフォーム固有のサービスを利用します。エージェントレス・ソリューションとして監視するには、SiteScope がインフラストラクチャ内の多くのサーバに対して、頻繁にログインと認証を行う必要があります。パフォーマンスおよびセキュリティ上の理由から、SiteScope は同じドメイン内にデプロイし、できるだけ監視するシステム要素に近付けることをお勧めします。また、SiteScope を該当のネットワーク認証サービス（たとえば Active Directory, NIS, または LDAP）と同じサブネット内に置くこともお勧めします。必要に応じて、HTTP または HTTPS を使用して、SiteScope インタフェースをリモートでアクセスおよび管理できます。

---

**注:** 大量の監視アクティビティが WAN (Wide Area Network) 上での通信を必要とする位置に SiteScope をデプロイしないでください。

---

---

**ヒント:** ファイアウォール越しにサーバを監視するには、サーバの可用性の監視に異なるプロトコルとポートが必要となります。そのため、セキュリティ上の理由から、**SiteScope** を使用しないことをお勧めします。**SiteScope** のライセンスは、ファイアウォールの両側にある別々の **SiteScope** をサポートします。**HTTP** または **HTTPS** を使用して、1 台のワークステーションから 2 つ以上の異なる **SiteScope** に同時にアクセスできます。

---

## Windows 環境の場合に考慮する事項

**SiteScope** のインストールには、管理者権限を持つアカウントを使用する必要があります。また、**SiteScope** サービスの実行にも、管理者権限を持つユーザ・アカウントを使用することをお勧めします。ローカル・システム・アカウントも使用できますが、リモート **Windows** サーバへの接続プロファイルの設定に影響します。

**Microsoft Windows** ネットワーク環境で **SiteScope** を使用する場合にさらに考慮する事項を次に示します。

- ▶ **リモート・レジストリ・サービス:** **SiteScope** はリモート・マシン上で **Windows** パフォーマンス・レジストリを使用し、サーバのリソースと可用性を監視します。この監視機能を有効にするには、リモート・マシン用のリモート・レジストリ・サービスをアクティブにする必要があります。
- ▶ **Windows 2000 Service Pack 2:** **Windows 2000 Service Pack 2** には既知の問題があります。リモート・レジストリ・サービスではメモリ・リークが発生します。この問題により、**Service Pack 2** を使用しているリモート **Windows 2000** サーバの **SiteScope** モニタは、動きを止めることがしばしばあります。メモリ・リークの問題は、**Windows 2000 Service Pack 3** で修正されました。この問題を避けるには、**SiteScope** で監視する予定のすべての **Windows 2000** サーバに **Service Pack 3** をインストールすることをお勧めします。

## UNIX 環境の場合に考慮する事項

SiteScope Web サーバが特権ポート上で実行されない限り、SiteScope のインストールや実行を root ユーザが行う必要はありません。

SiteScope を使用したリモート UNIX サーバのエージェントレス監視のセットアップに関する追加情報を以下に示します。

- ▶ **リモート・ログイン・アカウント・シェル** : SiteScope は、アプリケーションとして、ほとんどの一般的な UNIX シェルで正常に実行できます。SiteScope は、リモート UNIX サーバと通信する場合、Bourne シェル (sh) または tsch シェルのどちらかと通信します。したがって、これらのシェルのうちの 1 つを使用するため、各リモート UNIX サーバ上の関連するログイン・アカウントにはシェル・セットが必要です。

---

**注** : シェル・プロファイルは、リモート・マシンと通信するために SiteScope が使用するログイン・アカウントにのみ設定します。リモート・マシン上のその他のアプリケーションおよびアカウントは、現在定義されているシェルを使用できます。

---

- ▶ **アカウント権限** : リモート UNIX サーバを監視する場合、コマンド権限の設定を解決しなければならないことがあります。リモート UNIX サーバからサーバ情報を取得するために SiteScope が実行するほとんどのコマンドは、リモート・サーバの **/usr/bin** ディレクトリにあります。ただし、メモリの情報を取得するコマンドなど、一部のコマンドは **/usr/sbin** にあります。**/usr/sbin** コマンドは通常、**root** ユーザまたはその他の高い権限を持つユーザのために予約されているため、これら 2 つは違う場所にあります。

---

**注** : SiteScope には高いアカウント権限が必要ですが、セキュリティ上の理由から、**root** アカウントを使用した SiteScope の実行や、リモート・サーバで **root** ログイン・アカウントを使用するような SiteScope の設定は行わないことをお勧めします。

---

### 第 3 章 • デプロイメントの方法と計画

権限に問題がある場合は、コマンドを実行する権限を持つ別のユーザとして **SiteScope** にログインするか、または **SiteScope** が使用しているユーザ・アカウント用に権限を変更する必要があります。

# 4

---

## エージェントレス監視について

### 本章の内容

- ▶ SiteScope 監視機能について (ページ 29)
- ▶ エージェントレス監視環境について (ページ 31)

### SiteScope 監視機能について

本章では、SiteScope のエージェントレス監視の概念について説明します。エージェントレス監視では、監視対象のサーバ上にエージェント・ソフトウェアをデプロイすることなく監視を行うことができます。このため、SiteScope のデプロイメントと保守は、パフォーマンスや運用を監視するほかのソリューションに比べてかなり簡単です。エージェント・ベースの監視方法とは異なり、SiteScope では次の方法によって TCO (Total Cost of Ownership) が削減されます。

- ▶ インフラストラクチャの各コンポーネントの詳細なパフォーマンス・データの収集
- ▶ 実運用システムで監視エージェントを実行するための余分なメモリまたは CPU の能力が不要
- ▶ すべての監視コンポーネントを中央のサーバに集約することによる保守時間および保守費用の削減
- ▶ 監視エージェントを更新するための実運用システムのオフライン化が不要
- ▶ ほかにエージェントと共存するための監視エージェントのチューニングが不要

## 第 4 章・エージェントレス監視について

- ▶ 実運用中のサーバへの物理的なアクセスやソフトウェア配布操作を待つ必要がなくなることによる、インストール時間の短縮化
- ▶ 不安定なエージェントが引き起こす実運用サーバでのシステム・ダウンタイムの可能性の減少

SiteScope は、システムやサービスを多くのレベルで監視するため、多様なモニタ・タイプを備えた多機能な運用監視ソリューションです。モニタ・タイプの多くは、特殊な環境に合わせてさらにカスタマイズできます。

企業や組織は複数のソリューションを頻繁にデプロイメント、保守して、その運用や可用性をさまざまなレベルで監視しなければなりません。運用の監視は、次の表で説明するように、いくつかのレベルまたは層に分類できます。

モニタ・タイプ	説明
サーバの状態	CPU 利用率、メモリ、格納領域、主要なプロセスやサービスのステータスなど、サーバ・マシンのリソースを監視
Web プロセスとコンテンツ	主要な URL の可用性、主要な Web ベースのプロセスの機能、および主要なテキスト・コンテンツを監視
アプリケーション・パフォーマンス	Web サーバ、データベース、その他のアプリケーション・サーバなどの、ミッション・クリティカルなアプリケーションのパフォーマンス統計情報を監視
ネットワーク	サービスの接続性と可用性を監視

## エージェントレス監視環境について

大半の SiteScope 監視は、ネットワーク環境でサーバやアプリケーションに要求を行う、Web またはネットワーク・クライアントをエミュレートすることにより実行されます。このため、SiteScope はネットワーク全体にわたって、サーバ、システム、およびアプリケーションにアクセスできなければなりません。

本項の内容

- ▶ 31 ページ「SiteScope の監視の方法」
- ▶ 34 ページ「ファイアウォールと SiteScope のデプロイメント」

### SiteScope の監視の方法

システム、サーバ、およびアプリケーションを監視するために SiteScope が使用する方法は、次の 2 つのカテゴリに分類できます。

#### ▶ 標準ベースのネットワーク・プロトコル

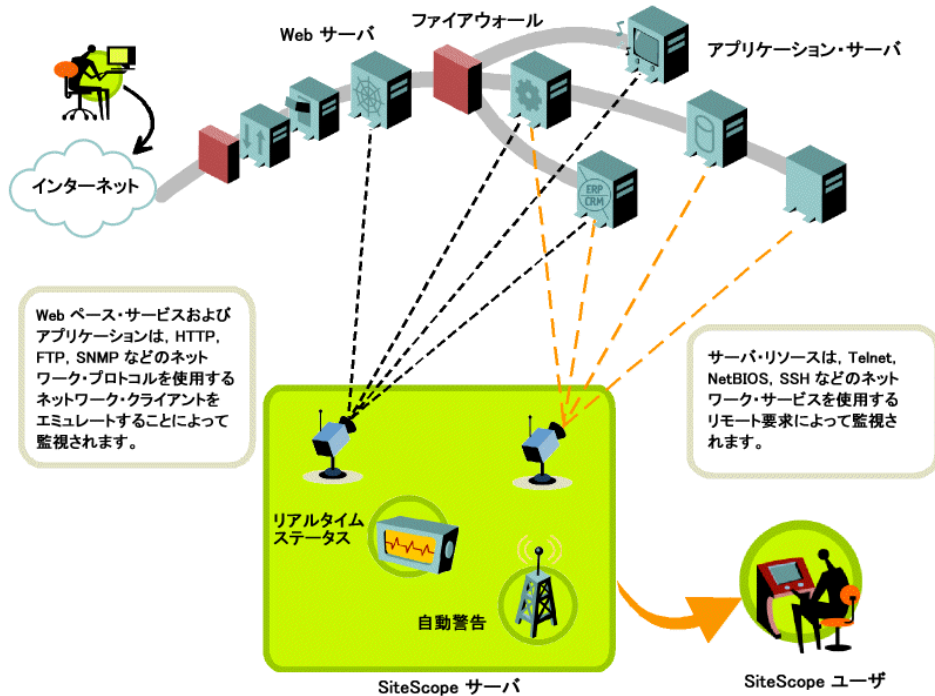
このカテゴリには、HTTP、HTTPS、FTP、SMTP、SNMP、および UDP を使用した監視が含まれます。これらの種類のモニタは、一般に SiteScope が実行されているプラットフォームまたはオペレーティング・システムに依存しません。たとえば、Linux にインストールされた SiteScope は、Windows、HP-UX、Solaris UNIX を実行しているサーバ上の Web ページ、ファイルのダウンロード、電子メールの送信、SNMP データを監視できます。

#### ▶ プラットフォーム固有のネットワーク・サービスおよびネットワーク・コマンド

このカテゴリには、クライアントとしてリモート・マシンにログインして情報を要求するモニタ・タイプが含まれます。たとえば、SiteScope は Telnet または SSH を使用してリモート・サーバにログインし、ディスク領域、メモリ、またはプロセスに関する情報を要求できます。Microsoft Windows プラットフォームでは、SiteScope は Windows パフォーマンス・カウンタ・ライブラリも利用します。プラットフォーム固有のサービスを利用するモニタ・タイプの場合、異なるオペレーティング・システム間の監視には、いくつかの制限があります。たとえば、Microsoft Exchange 2007/2010 および Microsoft Windows ダイアルアップ・モニタは、Windows 用の SiteScope には含まれていますが、Solaris 用の SiteScope には含まれていません。

## 第 4 章 • エージェントレス監視について

次の図に、SiteScope を使用したエージェントレス監視の概要を示します。SiteScope モニタはリモート・マシン上でサービスの要求を行い、パフォーマンスおよび可用性に関するデータを収集します。



SiteScope サーバ・モニタ（たとえば、CPU、ディスク領域、メモリ、サービス）は、次のプラットフォーム上でサーバ・リソースを監視できます。

- ▶ Windows NT/2000/2003/2008/XP Pro/Vista/Windows 7（x86 および Alpha については、次の注を参照）
- ▶ Solaris（Sparc および x86）
- ▶ Linux
- ▶ AIX
- ▶ HP/UX（HP/UX 64 ビット）



- ▶ Digital Unix
- ▶ SGI IRIX
- ▶ SCO
- ▶ FreeBSD

---

**注 :** Solaris または Linux で実行されている SiteScope から Windows マシン上のサーバ・リソース (CPU 利用率, メモリなど) を監視するには, SSH 接続が必要です。この方法で監視する各 Windows マシンに, セキュア・シェル・クライアントをインストールする必要があります。この機能を有効にする方法の詳細については, SiteScope ヘルプの「セキュア・シェル (SSH) を使用した SiteScope の監視」を参照してください。

---

SiteScope にはアダプタ設定テンプレートがあり, これにより UNIX オペレーティング・システムのその他のバージョンを監視するように SiteScope の機能を拡張できます。詳細については, SiteScope ヘルプの「UNIX オペレーティング・システム・アダプタ」を参照してください。

SiteScope がリモートでシステム・データにアクセスする各サーバのログイン・アカウントを有効にする必要があります。監視対象のサーバのログイン・アカウントは, SiteScope がインストールされ実行されているアカウントに合わせて設定する必要があります。たとえば, SiteScope が **sitescope** というユーザ名のアカウントで実行されている場合, この SiteScope によって監視されるサーバ上のリモート・ログイン・アカウントには, **sitescope** ユーザに対して設定されたユーザ・ログイン・アカウントが必要です。

## ファイアウォールと SiteScope のデプロイメント

ファイアウォール越しにサーバを監視するには、サーバの監視に異なるプロトコルとポートが必要となります。そのため、セキュリティ上の理由から、SiteScope を使用しないことをお勧めします。SiteScope のライセンスは、ファイアウォールの両側にある別々の SiteScope をサポートします。HTTP または HTTPS 経由で、1 台のワークステーションから 2 つ以上の SiteScope にアクセスできます。

次の表に、標準的な監視環境で SiteScope が監視および警告発行のために一般的に使用するポートの一覧を示します。

SiteScope の機能	使用される標準ポート
SiteScope Web サーバ	ポート 8080
FTP モニタ	ポート 21
メール・モニタ	ポート 25 (SMTP), 110 (POP3), 143 (IMAP)
ニュース・モニタ	ポート 119
Ping モニタ	ICMP パケット
SNMP モニタ	ポート 161 (UDP)
URL モニタ	ポート 80,443
リモート Windows 監視	ポート 139
電子メール警告	ポート 25
Post 警告	ポート 80,443
SNMP トラップ警告	ポート 162 (UDP)
リモート UNIX ssh	ポート 22
リモート UNIX Telnet	ポート 23
リモート UNIX rlogin	ポート 513

# 5

---

## SiteScope のライセンス

### 本章の内容

- ▶ SiteScope のライセンスの概要 (ページ 35)
- ▶ SiteScope ライセンスのタイプについて (ページ 36)
- ▶ モニタ・ライセンスの概要 (ページ 40)
- ▶ ライセンス・ポイント数の見積もり (ページ 57)
- ▶ SiteScope ライセンスの追加 (ページ 61)

### SiteScope のライセンスの概要

SiteScope のライセンスは、実行可能なモニタの数と、(場合によっては) 使用可能なモニタのタイプを制御します。サイト、シート、またはユーザの数に基づいて販売されるソフトウェアとは異なり、SiteScope のライセンスは監視の要件に基づいています。このため、SiteScope の規模を環境に合わせて効率良く柔軟に調整できます。

SiteScope ライセンスの購入と登録を行うことによって、重要な権利および権限を得ることができます。登録ユーザは、HP のすべての製品に関するテクニカル・サポートや情報を利用できるようになり、無料のアップデートやアップグレードを受ける資格を得ます。また、HP ソフトウェア・サポート Web サイトへのアクセス権も付与されます。このアクセス権を使用して、HP ソフトウェア・セルフ・ソルブ技術情報での技術情報の検索や、SiteScope ドキュメントのアップデートのダウンロードを行うことができます。

---

**注：**11.00 以前のバージョンの SiteScope のライセンス・キーは、現在のバージョンと互換性がありません。ライセンス・キーの配信を <http://webware.hp.com>（英語サイト）から自動的に実行できます。

---

## SiteScope ライセンスのタイプについて

SiteScope を使用するには、有効なライセンスが必要です。SiteScope は、一般ライセンスまたは SiteScope の新規のインストールおよびダウンロードで提供される 60 日間の評価ライセンスを使用してインストールできます。また、拡張ライセンスを購入すると、SiteScope ソリューション・テンプレートおよびオプションのモニタの使用を有効にできます。

SiteScope のライセンスには、次のタイプがあります。

タイプ	説明	期間	表示されるポイント
一般ライセンス	ライセンスの一部として含まれているモニタ・ポイントの数に基づいて、SiteScope の標準的な機能が使用可能になります。拡張ライセンスが必要なモニタは含まれません。	このライセンス・タイプは一時（時間ベース）または永続のいずれかです。	ライセンスで購入したポイントの総数が表示されます。

タイプ	説明	期間	表示されるポイント
評価ライセンス	<p>無料の評価期間中は、SiteScope の標準機能が使用可能になり、また、次の追加モニタを使用できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>▶ Microsoft Exchange (ソリューション・テンプレートを使用)</li> <li>▶ SAP</li> <li>▶ Siebel</li> <li>▶ Web スクリプト</li> <li>▶ WebSphere MQ の状態</li> </ul>	<p>最大 60 日間の固定の試用期間。</p> <p><b>注:</b> 試用期間は永続または時間ベースのライセンスを購入すると直ちに終了します。</p>	500 ポイント
	<p><b>注:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>▶ 評価ライセンスに含まれているすべてのモニタが一般ライセンスのアップグレードの際に含まれるわけではありません。追加ライセンスが必要なモニタのリストについては、下の「拡張ライセンス」を参照してください。</li> <li>▶ 評価期間の期限が切れたり、ライセンスがアップグレードされたりすると、一般ライセンスに含まれないモニタおよびソリューション・テンプレートは使用できなくなります。</li> </ul>		
OS インスタンスのライセンス	<p>ポイントではなく、OS インスタンスでシステム・モニタのライセンスを受けることができます。ライセンスの詳細およびこのライセンスがサポートするモニタ・タイプのリストについては、42 ページ「OS インスタンス拡張ライセンス」を参照してください。</p>	このライセンス・タイプは一時 (時間ベース) または永続のいずれかです。	購入した OS / ホストのライセンスの総数が表示されます。
フェイルオーバー・ライセンス	<p>SiteScope Failover Manager は無料ですぐに使用可能ですが、一般ライセンスがプライマリ SiteScope サーバに対してノード・ロックされる場合に備え、別途フェイルオーバー・ライセンスが必要です。このライセンスは、プライマリ SiteScope サーバがダウンした場合、SiteScope Failover Manager に適用されます。</p>	このライセンス・タイプは一時 (時間ベース) または永続のいずれかです。	プライマリ SiteScope のライセンスで購入したポイントの総数が表示されます。

タイプ	説明	期間	表示されるポイント
<p><b>拡張ライセンス</b></p>	<p>個々の拡張ライセンスは、特定のソリューション・テンプレートまたはオプションのモニタ・タイプを使用可能にします。</p> <p><b>ソリューション・テンプレート：</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>▶ Active Directory</li> <li>▶ HP Quality Center</li> <li>▶ HP Service Manager</li> <li>▶ Microsoft Exchange</li> <li>▶ Microsoft IIS</li> <li>▶ Microsoft Lync サーバ</li> <li>▶ Microsoft SharePoint</li> <li>▶ Microsoft SQL Server</li> <li>▶ JBoss</li> <li>▶ .NET</li> <li>▶ Oracle データベース</li> <li>▶ OS (AIX Host, Linux Host, Solaris Host, Microsoft Windows Host)</li> <li>▶ Siebel</li> <li>▶ SAP</li> <li>▶ VMware Host</li> <li>▶ WebLogic アプリケーション・サーバ</li> <li>▶ WebSphere アプリケーション・サーバ</li> </ul> <p><b>モニタ・タイプ：</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>▶ COM+ Server Monitor</li> <li>▶ SAP</li> <li>▶ Siebel</li> <li>▶ VMware Host CPU/Memory/Network/State/Storage</li> <li>▶ Web スクリプト・モニタ</li> <li>▶ WebSphere MQ の状態モニタ</li> </ul>	<p>このライセンスのタイプは一時または永続のいずれかです。</p>	<p>ポイントなし。消費するポイントはモニタごとに異なります。詳細については、43 ページ「モニタに使用されるライセンス・ポイント」および 54 ページ「ソリューション・テンプレートに使用されるライセンス・ポイント」を参照してください。</p>

次の表に、一般ライセンスと拡張ライセンスの違いをまとめます。

トピック	一般ライセンス	拡張ライセンス
ライセンス・キーあたりのインストール数	インストールされた個々の SiteScope には、個別の一般ライセンス・キーが必要です。	インストールされた個々の SiteScope に個別の拡張ライセンスを適用して、SiteScope サーバのオプション機能を使用可能にする必要があります。
モニタ・ポイント	ライセンス・キーには、事前に設定された「モニタ・ポイント」の数が含まれています。モニタ・ポイントによって、作成できるモニタ・インスタンスの数と、個々の SiteScope サーバで測定できる測定値の数が決まります。	拡張ライセンス・キーは、SiteScope が使用する拡張モニタ・タイプを使用可能にします。一般ライセンス・キーによって管理されているモニタ・ポイントの総数が、拡張ライセンスによって増えることはありません。 任意指定のモニタ・タイプを作成するために使用されるモニタ・ポイントは、一般ライセンス・キーに含まれるモニタ・ポイントの総数から差し引かれます。
	モニタ・ポイントの使用方法の詳細については、40 ページ「モニタ・ライセンスの概要」を参照してください。	
ライセンス・キーの入力	一般ライセンス・キーは、SiteScope のインストール時の [設定] 画面で、または SiteScope をインストール後に、無料評価期間中に [一般プリファレンス] ページで選択したライセンス・ファイルからインポートできます。	拡張ライセンス・キーは、SiteScope のインストール時か、または [一般プリファレンス] ページで SiteScope をインストール後に、[設定] 画面で選択したライセンス・ファイルからインポートできます。
	SiteScope のインストール時のライセンス・ファイルのインポートの詳細については、111 ページ「ライセンス・ファイル」を参照してください。 [一般プリファレンス] ページでのライセンス・ファイルのインポートの詳細については、61 ページ「SiteScope ライセンスの追加」を参照してください。	

SiteScope では、ライセンスの期限が切れる 7 日前に電子メール通知を自動的に送信し、SiteScope を開くたびにポップアップ・メッセージが表示されます。

SiteScope ライセンスをアップグレードまたは更新する必要がある場合、HP License Key Delivery Service サイト (<https://webware.hp.com/licensinghome/hppwelcome.asp>) (英語サイト) にアクセスします。

## モニタ・ライセンスの概要

SiteScope のライセンスはポイント・システムに基づいています。SiteScope が使用するポイント数は、購入したライセンス・タイプおよび使用中のモニタの数とタイプによって異なります。

本項の内容

- ▶ 41 ページ「ポイント・システム」
- ▶ 42 ページ「OS インスタンス拡張ライセンス」
- ▶ 43 ページ「モニタに使用されるライセンス・ポイント」
- ▶ 54 ページ「ソリューション・テンプレートに使用されるライセンス・ポイント」

---

### 注：

- ▶ SiteScope には、ユーザ・ベースのアクセス権のライセンスはありません。SiteScope アプリケーション・サーバにアクセスできるユーザの数には制限がありません。
  - ▶ 各ライセンスは、ライセンスの混乱や悪用される可能性を避けるためノード・ロックできます。ノード・ロックとは、ライセンスが特定のマシンのみで有効になることです。
-



## ポイント・システム

モニタ・タイプのライセンスはポイント・システムに基づいています。SiteScope の永続ライセンスは、モニタ・タイプの組み合わせをアクティブにするために使用されるポイントをいくつか提供します。

作成できる SiteScope モニタの数は、次の 2 つの要因によって決まります。

- ▶ 購入したモニタ・ポイントの総数
- ▶ 使用する SiteScope モニタのタイプ

モニタ・タイプは、アクティブにする必要があるポイントの数によってカテゴリに分かれます。たとえば、Web ページに 1 つの URL モニタを設定する場合は、モニタ・インスタンスごとに 1 つのモニタ・ポイントが必要です。Apache Server モニタを設定する場合は、監視するサーバ・パフォーマンス測定値ごとに 1 つのモニタ・ポイントが必要です。

Microsoft Windows Resources モニタまたは UNIX Resources モニタを設定する場合は、オブジェクト・インスタンスごとに 1 つのモニタ・ポイントが必要です。これらのモニタを設定するには、最初にオブジェクト、次にそのオブジェクトに関連するインスタンス、そして各インスタンスに関連するカウンタを選択します。次の Microsoft Windows Resources モニタの例では、選択されたオブジェクトが **Process**、選択されたインスタンスが **explorer**、そして選択されたカウンタが **% Processor Time** と **% User Time** です。この場合は、**explorer** インスタンスに 1 ポイント必要となります。監視する別のインスタンスを選択すると、2 ポイント必要というようになります。

使用可能なカウンタ

オブジェクト: Process

インスタンス:

すべて

- svchost
- explorer
- mdrv
- CheatStartService

カウンタ:

すべて

- IO Other Bytes/s
- % User Time
- IO Data Operati...
- Pool Manag...

選択されているカウンタ

オブジェクト	インスタンス	カウンタ
Process	explorer	% Process...
Process	explorer	% User Time

合計カウンタ数: 2

## OS インスタンス拡張ライセンス

使用モニタ数のポイントではなく、OS インスタンスでシステム・モニタのライセンスを受けることができます。たとえば、同一のオペレーティング・システムまたはホスト上にある CPU、ディスク・スペース、メモリ・モニタを使用している場合、モニタおよびポイントでカウントするのではなく、1 つの OS インスタンスとしてカウントされます。サポートされているモニタのリストについては、43 ページ「OS インスタンス拡張ライセンス - サポートされているモニタ」を参照してください。

SiteScope では、使用可能な OS インスタンス拡張ライセンスを、サーバでサポートされているモニタが最も多くポイントを使用する最もビジーなサーバに適用します。これらのモニタ・インスタンスが使用するポイントが解放され、OS ライセンスの対象ではないその他のモニタが使用できます。

[プリファレンス] > [一般プリファレンス] > [ライセンス] で OS インスタンス・ライセンス消費の詳細を表示できます。OS インスタンスのライセンス使用状況テーブルには、ライセンスが対象とする OS インスタンス、必要なポイント数の比較に使用するライセンス・ポイント、OS インスタンス拡張ライセンスを使用してホストごとに保存されているポイント数が含まれています。

OS インスタンス拡張ライセンスの期限が切れるかまたは除去される場合、OS ライセンスを使用していたホストに属しているすべてのモニタがポイントを消費し始めます。SiteScope モニタが使用するライセンス・ポイント数が使用可能なポイント数を超える状況が発生することがあります。この場合、SiteScope は 7 日以内に SiteScope がシャットダウンするというメッセージを送信します。SiteScope のシャットダウンを回避するには、より多くのライセンス・ポイントを追加するか、使用しているモニタ数を削減する必要があります。より多くのポイントを追加するには、HP License Key Delivery Service (<http://www.webware.hp.com>) (英語サイト) に問い合わせ、新しいライセンスを求めます。

---

**注：**システム可用性管理ライセンスは OS インスタンス拡張ライセンスの影響を受けません。システム可用性管理ポイントは、引き続き BSM にレポートするモニタに対してカウントされます。これは、OS インスタンス拡張ライセンスに基づいて表示されるものです。この情報は OS インスタンス・ライセンス消費レポートに表示されます (使用される可能性のある総ポイント数またはシステム可用性管理ポイントの使用あるいはその両方)。

Webware で OS インスタンス拡張ライセンスを注文するときは、ライセンス名は Operations OS インスタンスに含まれる **HP SiteScope<X> ポイントまたは <Y>です。**

---

## OS インスタンス拡張ライセンス - サポートされているモニタ

次のモニタ・タイプは、ライセンスに基づく OS インスタンスを使用します。

<ul style="list-style-type: none"> <li>▶ CPU</li> <li>▶ ディレクトリ</li> <li>▶ ディスク領域</li> <li>▶ ファイル</li> <li>▶ HP NonStop イベント・ログ</li> <li>▶ HP NonStop リソース</li> <li>▶ メモリ</li> <li>▶ Microsoft アーカイブ・サーバ</li> <li>▶ Microsoft A/V 会議サーバ</li> <li>▶ Microsoft Director サーバ</li> <li>▶ Microsoft エッジ・サーバ</li> <li>▶ Microsoft フロント・エンド・サーバ</li> <li>▶ Microsoft Hyper-V</li> <li>▶ Microsoft 仲介サーバ</li> <li>▶ Microsoft 監視および CDR サーバ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>▶ Microsoft Registrar サーバ</li> <li>▶ Microsoft Windows Event Log</li> <li>▶ Microsoft Windows パフォーマンス・カウンタ</li> <li>▶ Microsoft Windows Resources</li> <li>▶ Microsoft Windows Services State</li> <li>▶ Ping</li> <li>▶ ポート</li> <li>▶ サービス</li> <li>▶ Solaris ズーン</li> <li>▶ UNIX リソース</li> <li>▶ VMware ホスト CPU</li> <li>▶ VMware ホスト メモリ</li> <li>▶ VMware ホスト ネットワーク</li> <li>▶ VMware ホスト状態</li> <li>▶ VMware ホストストレージ</li> <li>▶ VMware パフォーマンス</li> </ul>
---	--

## モニタに使用されるライセンス・ポイント

次に、SiteScope モニタ・タイプのインスタンスごとに使用されるポイントの一覧を示します。

モニタ	モニタのカテゴリ	使用されるライセンス・ポイント
Amazon Web サービス	仮想化および Cloud	測定値あたり 1 ポイント
Apache サーバ	アプリケーション	測定値あたり 1 ポイント
BroadVision アプリケーション・サーバ	アプリケーション	測定値あたり 1 ポイント
Check Point	アプリケーション	測定値あたり 1 ポイント

モニタ	モニタのカテゴリ	使用されるライセンス・ポイント
Citrix	アプリケーション	測定値あたり 1 ポイント
ColdFusion サーバ	アプリケーション	測定値あたり 1 ポイント
COM+ サーバ	アプリケーション	測定値あたり 1 ポイント <b>注：</b> SiteScope インタフェースでこのモニタ・タイプを使用可能にするには追加ライセンスが必要です。
コンポジット	汎用	モニタあたり 1 ポイント <b>注：</b> このモニタ・タイプによって提供されるシーケンス・チェック機能と複合監視機能は、メンバ・モニタをグループ化して適切なモニタ・ポイントの比率でカウントするために使用されます。このモニタは、その中に含まれるメンバ・モニタのモニタ・ポイントを加算せずに設定できます。
CPU	サーバ	モニタあたり 1 ポイント <b>注：</b> OS インスタンス拡張ライセンスの対象となっているホストで実行されている場合、このモニタでポイントは消費されません。詳細については、42 ページ「OS インスタンス拡張ライセンス」を参照してください。
データベース・カウンタ	データベース	測定値あたり 1 ポイント
データベース・クエリ	データベース	モニタあたり 1 ポイント
DB2 8.x および 9.x	データベース	測定値あたり 1 ポイント
DHCP	サーバ	モニタあたり 1 ポイント
ディレクトリ	汎用	モニタあたり 1 ポイント <b>注：</b> OS インスタンス拡張ライセンスの対象となっているホストで実行されている場合、このモニタでポイントは消費されません。詳細については、42 ページ「OS インスタンス拡張ライセンス」を参照してください。

モニタ	モニタのカテゴリ	使用されるライセンス・ポイント
ディスク領域	サーバ	モニタあたり 1 ポイント <b>注：</b> OS インスタンス拡張ライセンスの対象となっているホストで実行されている場合、このモニタでポイントは消費されません。詳細については、42 ページ「OS インスタンス拡張ライセンス」を参照してください。
DNS	ネットワーク	モニタあたり 1 ポイント
e ビジネス・トランザクション	Web トランザクション	モニタあたり 1 ポイント
F5 Big-IP	アプリケーション	測定値あたり 1 ポイント
ファイル	汎用	モニタあたり 1 ポイント <b>注：</b> OS インスタンス拡張ライセンスの対象となっているホストで実行されている場合、このモニタでポイントは消費されません。詳細については、42 ページ「OS インスタンス拡張ライセンス」を参照してください。
フォーミュラ・コンポジット	ネットワーク	モニタあたり 1 ポイント
FTP	ネットワーク	モニタあたり 1 ポイント
HP iLO (Integrated Lights-Out)	サーバ	測定値あたり 1 ポイント
HP NonStop イベント・ログ	サーバ	モニタあたり 1 ポイント <b>注：</b> OS インスタンス拡張ライセンスの対象となっているホストで実行されている場合、このモニタでポイントは消費されません。詳細については、42 ページ「OS インスタンス拡張ライセンス」を参照してください。
HP NonStop リソース	サーバ	オブジェクト・インスタンスあたり 1 ポイント <b>注：</b> OS インスタンス拡張ライセンスの対象となっているホストで実行されている場合、このモニタでポイントは消費されません。詳細については、42 ページ「OS インスタンス拡張ライセンス」を参照してください。

モニタ	モニタのカテゴリ	使用されるライセンス・ポイント
IPMI	サーバ	測定値あたり 1 ポイント (最大: 120)
JMX	汎用	モニタあたり 1 ポイント
LDAP	汎用	モニタあたり 1 ポイント
リンク・チェック	Web トランザクション	モニタあたり 1 ポイント
ログ・ファイル	汎用	モニタあたり 1 ポイント
メール	ネットワーク	モニタあたり 1 ポイント
MAPI	ネットワーク	モニタあたり 1 ポイント
メモリ	サーバ	モニタあたり 1 ポイント <b>注:</b> OS インスタンス拡張ライセンスの対象となっているホストで実行されている場合、このモニタでポイントは消費されません。詳細については、42 ページ「OS インスタンス拡張ライセンス」を参照してください。
Microsoft アーカイブ・サーバ	仮想化および Cloud	測定値あたり 1 ポイント <b>注:</b> OS インスタンス拡張ライセンスの対象となっているホストで実行されている場合、このモニタでポイントは消費されません。詳細については、42 ページ「OS インスタンス拡張ライセンス」を参照してください。
Microsoft A/V 会議サーバ	仮想化および Cloud	測定値あたり 1 ポイント <b>注:</b> OS インスタンス拡張ライセンスの対象となっているホストで実行されている場合、このモニタでポイントは消費されません。詳細については、42 ページ「OS インスタンス拡張ライセンス」を参照してください。
Microsoft ASP サーバ	アプリケーション	測定値あたり 1 ポイント

モニタ	モニタのカテゴリ	使用されるライセンス・ポイント
Microsoft Director サーバ	仮想化および Cloud	測定値あたり 1 ポイント  <b>注:</b> OS インスタンス拡張ライセンスの対象となっているホストで実行されている場合、このモニタでポイントは消費されません。詳細については、42 ページ「OS インスタンス拡張ライセンス」を参照してください。
Microsoft エッジ・ サーバ	仮想化および Cloud	測定値あたり 1 ポイント  <b>注:</b> OS インスタンス拡張ライセンスの対象となっているホストで実行されている場合、このモニタでポイントは消費されません。詳細については、42 ページ「OS インスタンス拡張ライセンス」を参照してください。
Microsoft Exchange 2007/2010	アプリケー ション	測定値あたり 1 ポイント
Microsoft Exchange 2003 のメール・ ボックス	アプリケー ション	モニタあたり 3 ポイント
Microsoft Exchange 2000/2003/2007 の メッセージ・トラ フィック	アプリケー ション	モニタあたり 5 ポイント
Microsoft Exchange 5.5 のメッセージ・ トラフィック	アプリケー ション	モニタあたり 5 ポイント
Microsoft Exchange 2003 のパブリック・ フォルダ	アプリケー ション	モニタあたり 5 ポイント
Microsoft フロント・ エンド・サーバ	仮想化および Cloud	測定値あたり 1 ポイント  <b>注:</b> OS インスタンス拡張ライセンスの対象となっているホストで実行されている場合、このモニタでポイントは消費されません。詳細については、42 ページ「OS インスタンス拡張ライセンス」を参照してください。

モニタ	モニタのカテゴリ	使用されるライセンス・ポイント
Microsoft Hyper-V	仮想化および Cloud	監視対象の VM または物理サーバごとに 1 ポイント。 <b>注:</b> OS インスタンス拡張ライセンスの対象となっているホストで実行されている場合、このモニタでポイントは消費されません。詳細については、42 ページ「OS インスタンス拡張ライセンス」を参照してください。
Microsoft IIS サーバ	アプリケーション	測定値あたり 1 ポイント
Microsoft 仲介サーバ	仮想化および Cloud	測定値あたり 1 ポイント <b>注:</b> OS インスタンス拡張ライセンスの対象となっているホストで実行されている場合、このモニタでポイントは消費されません。詳細については、42 ページ「OS インスタンス拡張ライセンス」を参照してください。
Microsoft 監視および CDR サーバ	仮想化および Cloud	測定値あたり 1 ポイント <b>注:</b> OS インスタンス拡張ライセンスの対象となっているホストで実行されている場合、このモニタでポイントは消費されません。詳細については、42 ページ「OS インスタンス拡張ライセンス」を参照してください。
Microsoft Registrar サーバ	仮想化および Cloud	測定値あたり 1 ポイント <b>注:</b> OS インスタンス拡張ライセンスの対象となっているホストで実行されている場合、このモニタでポイントは消費されません。詳細については、42 ページ「OS インスタンス拡張ライセンス」を参照してください。
Microsoft SQL Server	データベース	測定値あたり 1 ポイント
Microsoft Windows デイアログ	ネットワーク	モニタあたり 1 ポイント



モニタ	モニタのカテゴリ	使用されるライセンス・ポイント
Microsoft Windows Event Log	サーバ	モニタあたり 1 ポイント <b>注:</b> OS インスタンス拡張ライセンスの対象となっているホストで実行されている場合、このモニタでポイントは消費されません。詳細については、42 ページ「OS インスタンス拡張ライセンス」を参照してください。
Microsoft Windows Media Player	Media	測定値あたり 1 ポイント
Microsoft Windows Media Server	Media	測定値あたり 1 ポイント
Microsoft Windows パフォーマンス・カウンタ	サーバ	モニタあたり 1 ポイント <b>注:</b> 次の場合、このモニタでポイントは消費されません。 ▶ OS インスタンス拡張ライセンスの対象となっているホストで実行されている場合。詳細については、42 ページ「OS インスタンス拡張ライセンス」を参照してください。 ▶ SiteScope が HP Operations Manager に接続されている場合。
Microsoft Windows Resources	サーバ	オブジェクト・インスタンスあたり 1 ポイント <b>注:</b> OS インスタンス拡張ライセンスの対象となっているホストで実行されている場合、このモニタでポイントは消費されません。詳細については、42 ページ「OS インスタンス拡張ライセンス」を参照してください。
Microsoft Windows Services State	サーバ	モニタあたり 1 ポイント <b>注:</b> OS インスタンス拡張ライセンスの対象となっているホストで実行されている場合、このモニタでポイントは消費されません。詳細については、42 ページ「OS インスタンス拡張ライセンス」を参照してください。
ネットワーク帯域幅	ネットワーク	測定値あたり 1 ポイント
ニュース	アプリケーション	モニタあたり 1 ポイント

モニタ	モニタのカテゴリ	使用されるライセンス・ポイント
Oracle 10g アプリケーション・サーバ	アプリケーション	測定値あたり 1 ポイント
Oracle 9i アプリケーション・サーバ	アプリケーション	測定値あたり 1 ポイント (最大 : 7)
Oracle データベース	データベース	測定値あたり 1 ポイント
Ping	ネットワーク	モニタあたり 1 ポイント <b>注 :</b> OS インスタンス拡張ライセンスの対象となっているホストで実行されている場合、このモニタでポイントは消費されません。詳細については、42 ページ「OS インスタンス拡張ライセンス」を参照してください。
ポート	ネットワーク	モニタあたり 1 ポイント <b>注 :</b> OS インスタンス拡張ライセンスの対象となっているホストで実行されている場合、このモニタでポイントは消費されません。詳細については、42 ページ「OS インスタンス拡張ライセンス」を参照してください。
Radius	アプリケーション	測定値あたり 1 ポイント
Real Media Player	Media	測定値あたり 1 ポイント
Real Media Server	Media	測定値あたり 1 ポイント
SAP CCMS	アプリケーション	測定値あたり 1 ポイント
SAP CCMS 警告	アプリケーション	測定値あたり 1 ポイント
SAP Java Web アプリケーション・サーバ	アプリケーション	測定値あたり 1 ポイント
SAP パフォーマンス	アプリケーション	測定値あたり 1 ポイント
SAP Work Processes	アプリケーション	測定値あたり 1 ポイント
スクリプト	汎用	モニタあたり 1 ポイント

モニタ	モニタのカテゴリ	使用されるライセンス・ポイント
サービス	サーバ	モニタあたり 1 ポイント <b>注:</b> OS インスタンス拡張ライセンスの対象となっているホストで実行されている場合、このモニタでポイントは消費されません。詳細については、42 ページ「OS インスタンス拡張ライセンス」を参照してください。
Siebel アプリケーション・サーバ	アプリケーション	測定値あたり 1 ポイント
Siebel ログ	アプリケーション	モニタあたり 1 ポイント
Siebel Web サーバ	アプリケーション	測定値あたり 1 ポイント
SNMP	ネットワーク	モニタあたり 1 ポイント
MIB による SNMP	ネットワーク	測定値あたり 1 ポイント
SNMP トラップ	ネットワーク	モニタあたり 1 ポイント
Solaris ゾーン	仮想化および Cloud	監視対象のゾーン (グローバルまたはグローバル以外) または物理サーバごとに 1 ポイント。 <b>注:</b> OS インスタンス拡張ライセンスの対象となっているホストで実行されている場合、このモニタでポイントは消費されません。詳細については、42 ページ「OS インスタンス拡張ライセンス」を参照してください。
SunONE Web サーバ	アプリケーション	測定値あたり 1 ポイント
Sybase	データベース	測定値あたり 1 ポイント
Tuxedo	アプリケーション	測定値あたり 1 ポイント
UDDI サーバ	アプリケーション	モニタあたり 1 ポイント
UNIX リソース	サーバ	選択したオブジェクト・インスタンスあたり 1 ポイント <b>注:</b> OS インスタンス拡張ライセンスの対象となっているホストで実行されている場合、このモニタでポイントは消費されません。詳細については、42 ページ「OS インスタンス拡張ライセンス」を参照してください。

モニタ	モニタのカテゴリ	使用されるライセンス・ポイント
URL	Web トランザクション	モニタあたり 1 ポイント
URL 内容	Web トランザクション	モニタあたり 1 ポイント
URL リスト	Web トランザクション	URL あたり 1 ポイント
URL シーケンス	Web トランザクション	URL あたり 1 ポイント (ステップ)
VMware ホスト CPU / メモリ / ネットワーク / 状態 / ストレージ	仮想化および Cloud	<p>モニタされる VM または物理サーバで 1 ポイント、そしてホストあたり 1 ポイント。</p> <p><b>注:</b> VMware Host モニタは OS Instance Advanced ライセンスでサポートされていますが、このライセンスは ESX ホストと監視されるすべての VM をカバーしていないが、1 つの ESX ホストまたは VM に適用できます (各 ESX ホストまたは VM をカバーするには別個の OS ライセンスが必要)。OS ライセンスによってカバーされる各ホストまたは VM によってポイントは使用されません。</p> <p>詳細については、42 ページ「OS インスタンス拡張ライセンス」を参照してください。</p>
VMware パフォーマンス	仮想化および Cloud	<p>監視対象の VM または物理サーバごとに 1 ポイント。</p> <p><b>注:</b> OS インスタンス拡張ライセンスの対象となっているホストで実行されている場合、このモニタでポイントは消費されません。詳細については、42 ページ「OS インスタンス拡張ライセンス」を参照してください。</p>

モニタ	モニタのカテゴリ	使用されるライセンス・ポイント
Web スクリプト	Web トランザクション	モニタが実行するトランザクションあたり 4 ポイント。トランザクションには、URL を必要な数だけ含めることができます。モニタには、トランザクションごとに 12 までの測定値を含めることができます。 <b>注：</b> Web Script モニタは、モニタによって実行されるスクリプトに複数のトランザクションがある場合、4 ポイントを超えるポイントを使用できます。
Web サーバ	サーバ	モニタあたり 1 ポイント
Web サービス	汎用	モニタあたり 1 ポイント
WebLogic アプリケーション・サーバ	アプリケーション	測定値あたり 1 ポイント
WebSphere アプリケーション・サーバ	アプリケーション	測定値あたり 1 ポイント
WebSphere MQ の状態	アプリケーション	インスタンスあたり 1 ポイント
WebSphere パフォーマンス・サブレット	アプリケーション	測定値あたり 1 ポイント
XML 測定値	汎用	測定値あたり 1 ポイント

**注：** システム可用性管理 (SAM) で SiteScope を使用して監視されるテクノロジー統合 (EMS) モニタには、SiteScope ライセンスは不要で、SiteScope ライセンス・ポイントも消費しません。代わりに、EMS ポイントを使用します。これは、ライセンス管理のシステム可用性管理レポートおよび管理ライセンスにあるシステム可用性管理ポイントとともにカウントされます。ライセンス管理の詳細については、HP Business Service Management 文書ライブラリの『Platform Administration』(英語版)の「License Management Overview」を参照してください。

## ソリューション・テンプレートに使用されるライセンス・ポイント

ソリューション・テンプレートは、オプションと標準の両方のモニタ・タイプに含まれる、最適化されたモニタ・テンプレートです。テンプレートとテンプレート固有のモニタ・タイプにアクセスするには、拡張ライセンスが必要です。拡張ライセンスを購入すると、特定のソリューション・テンプレート向けの『Best Practices』（英語版）のドキュメントも入手できます。

ライセンス・ポイントの使用は、ソリューション・テンプレートのコストに基づいています。これはテンプレートによってデプロイされたモニタが消費するポイント数が基になります（消費するポイントはモニタごとに異なる）。

次の表に、HP テスト環境で構成されたソリューション・テンプレートのライセンス・ポイントのコストを示します。ライセンス・ポイントの消費は環境ごとに異なり、また監視対象の環境の規模や選択したカウンタ数によっても異なります。

ソリューション・テンプレート	一般的なライセンス・ポイントの使用
Active Directory (グローバル・カタログあり)	34
Active Directory (グローバル・カタログなし)	33
AIX ホスト	13
ASP.NET	20
ASP.NET アプリケーション	1
HP Quality Center Application Server for UNIX	11
HP Quality Center Application Server for Windows	11
HP Quality Center 10.0 License Status	12
HP Quality Center 9.2 License Status	6
HP QuickTest Professional License Server	3
HP Service Manager for UNIX	48
HP Service Manager for Windows	12
JBoss Application Server 4.x	3

ソリューション・テンプレート	一般的なライセンス・ポイントの使用
Linux ホスト	13
Microsoft Exchange 2000	40
Microsoft Exchange 2003	49
Microsoft Exchange 2007	83
Microsoft Exchange 2010	83
Microsoft Exchange 5.5	39
Microsoft IIS 6	98
Microsoft IIS 7.x	79
Microsoft Lync Server 2010	各 Lync Server ロールの 1 インスタンスに 106 ポイント  (ロールが同一の異なる コンピュータでサブテン プレートを使用している 場合、追加のポイントが 使用されます)。
Microsoft SharePoint 2010	74
Microsoft SQL Server	18
Microsoft SQL Server 2008 R2	43
Microsoft Windows Host	13
.NET CLR データ	1
Oracle データベース 9i および 10g	202
SAP NetWeaver アプリケーション・サーバ	13
SAP R/3 アプリケーション・サーバ	13
UNIX の Siebel アプリケーション・サーバ 6.x~7.x	93
Windows の Siebel アプリケーション・サーバ 6.x~7.x	91
UNIX の Siebel アプリケーション・サーバ 8.x	98

## 第 5 章 • SiteScope のライセンス

ソリューション・テンプレート	一般的なライセンス・ポイントの使用
Windows の Siebel アプリケーション・サーバ	101
UNIX の Siebel ゲートウェイ・サーバ	6
Windows の Siebel ゲートウェイ・サーバ	6
UNIX の Siebel Web サーバ	19
Windows の Siebel Web サーバ	19
Solaris Host	13
VMware Host	(ホストの合計数+VM の合計数) × 5 (ソリューション・テンプレートのモニタ数)。 <b>例</b> : 100 ホストおよび 1600 仮想マシンの vCenter : $(1600+100)*5 = 8500$ ポイント
WebLogic 6.x, 7.x, 8.x アプリケーション・サーバ	51
WebLogic 9.x~10.x アプリケーション・サーバ	63
WebSphere 5.x アプリケーション・サーバ	20
WebSphere 6.x アプリケーション・サーバ	24



## ライセンス・ポイント数の見積もり

購入するライセンス・ポイントの数は、予定している SiteScope のデプロイの方法と、監視するシステムやサービスのレベルによって異なります。次に、必要なライセンス・ポイント数の見積もりに関するガイドラインを示します。

本項の内容

- ▶ 57 ページ「サーバの状態の監視」
- ▶ 58 ページ「Web プロセスとコンテンツの監視」
- ▶ 58 ページ「アプリケーション・パフォーマンスの監視」
- ▶ 59 ページ「ネットワークの監視」
- ▶ 60 ページ「モニタ・ポイントの購入」

### サーバの状態の監視

サーバの状態の監視に必要なポイント数は、主に監視するサーバ・マシンの数によって決まります。監視対象の各サーバで、次の各項目について 1 つのポイントが必要です。

- ▶ CPU の監視
- ▶ 個々のハード・ディスクまたは主要なディスク・パーティション
- ▶ メモリ
- ▶ 個々の主要なサーバ・プロセスまたはサービス
- ▶ 個々の主要なファイル、ログ、またはディレクトリ

## Web プロセスとコンテンツの監視

Web プロセスとコンテンツの監視に必要なポイント数は、監視する Web ベースのプロセスとページの数によって決まります。Web ベースのプロセスには、Web ページのシーケンスが含まれます。たとえば、セキュア・サーバにログインして勘定残高を確認し、ログアウトするとします。多くの場合、URL のシーケンスには異なる宛先ページを持つ同じパスが含まれます。オンライン・サービスの場合は、バックエンド・データベースをチェックして、Web インタフェースを使用して修正したデータが正しく更新されているかどうか確認することも必要です。また、ファイルのダウンロードや、自動化された電子メール・メッセージの送受信が含まれるプロセスも考えられます。

- ▶ 個々の Web ベースの URL シーケンスを監視する場合は、監視する Web ベースのプロセスごとに 1 つのシーケンス・モニタ・インスタンスと、そのシーケンス内の URL またはステップごとに 1 つのポイントが必要です。
- ▶ ほかのインターネット・ページまたはプロセスを監視する場合は、監視するファイルのダウンロード、電子メールによる確認、または個々の Web ページ・コンテンツごとに 1 つのポイントが必要です。

## アプリケーション・パフォーマンスの監視

アプリケーション・パフォーマンスの監視は、ネットワーク・ベースのサービスの可用性を確保し、パフォーマンスの問題を検出するための重要な手段です。また、アプリケーションやシステムの多くは複雑であるため、必要なモニタ・ポイント数を見積もるのは非常に困難です。SiteScope の柔軟なライセンス・モデルでは、監視機能をニーズに合わせて簡単に変更できます。

アプリケーション・パフォーマンスの監視に必要なポイント数は、次の要因によって決まります。

- ▶ デプロイされるアプリケーションの数
- ▶ アプリケーションの種類
- ▶ 監視するパフォーマンス測定値の数

一部のアプリケーション (一部の Web サーバなど) のパフォーマンス測定値は、1 つのモニタ・インスタンスと、10 測定値ポイント未満の測定値数によって使用可能となる場合があります。たとえば、Apache Web サーバは、1 つの URL について、アクセス総数、サーバ使用可能時間、および 1 秒あたりの要求数を含むパフォーマンス測定値を提供します。ほかのアプリケーションやシステムでは、複数のサーバ・アドレス、モジュール、および複数のモニタ・インスタンスを必要とする測定値が含まれる場合があります。アプリケーションによっては、監視するデータベース・アプリケーションと統合されている場合もあります。

次に、データのアクセス方法に応じて、アプリケーションの監視に必要なポイントを見積もるためのガイドラインを示します。

- ▶ アプリケーションごとに 1 つのアプリケーション・モニタ・インスタンスと、監視するパフォーマンス測定値ごとに 1 つのポイント
- ▶ アプリケーション・ステータス URL ごとに 1 つのモニタ・インスタンスと、監視するパフォーマンス測定値ごとに 1 つのポイント

## ネットワークの監視

ネットワークの監視には、ユーザがネットワークにアクセスして使用するために必要な、ネットワーク・サービスの接続と可用性の両方の確認が含まれます。これには、DNS、DHCP、LDAP、および RADIUS などのサービスの監視が含まれます。ネットワークのハードウェアや設定によっては、SiteScope の SNMP モニタ・タイプを使用して SNMP でネットワーク・インフラストラクチャにクエリすることで、ネットワークのパフォーマンス統計情報にアクセスできる場合もあります。

次に、ネットワークの監視に必要なポイント数の見積もりに関するガイドラインを示します。

- ▶ 主要なネットワークの接続先ごとに 1 つのポイント
- ▶ 主要なネットワーク・サービス (DNS や LDAP など) ごとに 1 つのポイント
- ▶ SNMP 経由で監視する測定値ごとに 1 つのポイント

## モニタ・ポイントの購入

SiteScope のモニタ・ポイントは、モニタを柔軟にデプロイできるように、50, 100, 500, および 2,000 ポイントのブロック単位で販売されています。たとえば、100 ポイントのブロックを購入すれば、次のように多くの監視オプションを設定できます。

- ▶ それぞれ 5 つのパフォーマンス測定値を監視する 10 のアプリケーション・モニタ (5 x 10 = 50 ポイント)
- ▶ それぞれ 10 のトランザクション・ステップを横断する 2 つのシーケンス・モニタの組み合わせ (10 x 2 = 20 ポイント)
- ▶ 1 ポイントのネットワーク・サービス・モニタまたはサーバ・モニタを 30 (1 x 30 = 30 ポイント)

同じ 100 ポイントのブロックを使用して、次のように設定することもできます。

- ▶ それぞれ 1 つの測定値を監視する 10 のアプリケーション・モニタ (1 x 10 = 10 ポイント)
- ▶ 5 つのステップを持つ シーケンス・モニタ (5 ポイント)
- ▶ 85 のネットワーク・サービス・モニタまたはサーバ・モニタ (85 ポイント)

SiteScope のインストールには、無料の評価ライセンスが含まれています。評価期間以後も SiteScope を使用するには、お使いの SiteScope 用の一般ライセンス・キーを要求してアクティブにする必要があります。モニタ・ポイントの購入の詳細については、HP License Key Delivery Service サイト (<https://webware.hp.com/licensinghome/hppwelcome.asp>) (英語サイト) にアクセスします。

## SiteScope ライセンスの追加

SiteScope をインストールした後は、いつでもライセンスを追加できます。新規または追加のモニタ・ライセンスを取得する方法については、HP License Key Delivery Service サイト (<https://webware.hp.com/licensinghome/hppwelcome.asp>) (英語サイト) にアクセスします。

HP からライセンス・ファイルを受け取ったら、ブラウザ・インタフェース経由で SiteScope にライセンス・キーをインポートします。

**SiteScope にライセンスを追加するには、次の手順で行います。**

- 1** Web ブラウザから、変更する SiteScope インスタンスを開きます。SiteScope サービスまたはプロセスが稼動している必要があります。
- 2** [プリファレンス] > [一般プリファレンス] を選択して、[ライセンス] 表示枠を展開します。
- 3** [ライセンス ファイル] ボックスに SiteScope ライセンス・ファイルのパスを入力するか、[選択] ボタンをクリックしてライセンス・ファイルを選択します。
- 4** [インポート] をクリックします。ライセンスのインポートが正常に完了したら、インポートされたライセンスに関する情報がライセンス表に表示されます。この情報には、ライセンス・タイプ、説明、有効期限、ライセンスで許可されたモニタ・ポイントの総計が含まれます。



# 第 II 部

---

**SiteScope** をインストールする前に





# 6

---

## SiteScope をインストールする前に

### 本章の内容

- ▶ インストールの概要 (ページ 66)
- ▶ システム要件 (ページ 68)
- ▶ 認定されている構成 (ページ 74)
- ▶ SiteScope キャパシティに関する制限事項 (ページ 75)
- ▶ SiteScope サポート・マトリックス (ページ 75)

## インストールの概要

監視環境のデプロイメントおよび管理を容易にするために、SiteScope をインストールする前に考慮する計画の手順とアクションがいくつかあります。

SiteScope アプリケーションのデプロイメントに関する手順の概要を次に示します。

### 1 SiteScope アプリケーションをインストールして実行するサーバを準備します。

---

**注：**

- ▶ 1 台のマシンに複数の SiteScope をインストールしないでください。
  - ▶ 以前のバージョンの SiteScope からアップグレードする場合、End Of Life モニタの現在の設定を確認し、主要な SiteScope データのバックアップ・コピーを作成してください。詳細については、77 ページ「SiteScope のアップグレード」を参照してください。
  - ▶ SiteScope Failover Manager を使用して、SiteScope サーバの故障時にバックアップ監視を有効にする場合は、共有リソースに SiteScope をインストールする必要があります。詳細については、<SiteScope ルート・ディレクトリ> \¥sisdocs¥pdfs¥SiteScopeFailover.pdf にある『HP SiteScope Failover Manager Guide』（PDF）を参照してください。
- 

### 2 SiteScope のインストール実行ファイルを入手します。

- 3 アプリケーションをインストールするディレクトリを作成し、必要に応じてユーザ権限を設定します。

---

**注 :** SiteScope 11.10 をインストールするためには、新しいディレクトリを作成する必要があります。以前のバージョンの SiteScope に使用しているディレクトリにバージョン 11.10 をインストールしないでください。

---

- 4 SiteScope のインストール実行ファイルを実行するか、または準備した場所にアプリケーションをインストールするようスクリプトに指定してインストール・スクリプトを実行します。

詳細については、93 ページ「SiteScope のインストール」を参照してください。

- 5 必要に応じて、サーバを再起動します（Windows へのインストールの場合のみ）。

- 6 互換性のある Web ブラウザを使用して SiteScope に接続し、SiteScope が実行されることを確認します。

詳細については、227 ページ「SiteScope を使った作業の開始」を参照してください。

- 7 インストール後の手順を実行し、SiteScope を実運用で使用する準備を整えます。

詳細については、223 ページ「インストール後の管理」を参照してください。

## システム要件

本項では、サポートされているオペレーティング・システム別に、SiteScope を実行するための最小システム要件と推奨事項を示します。

---

### 注：

- ▶ インストールを始める前に、SiteScope リリース・ノート・ファイルに記載されている内容をよく読み、インストール・プロセスに関する最終確認事項や制限事項がないか確認します。
- ▶ SiteScope は、サポートされている 32 ビットまたは 64 ビット環境の Windows, Solaris, および Linux オペレーティング・システムに 32 ビットのアプリケーションとしてインストールできます。また、サポートされている 64 ビット環境の Windows, Solaris, および Linux オペレーティング・システムに 64 ビットのアプリケーションとしてインストールすることもできます。
- ▶ 異なる環境に SiteScope をインストールする場合のトラブルシューティングや制限事項については、129 ページ「トラブルシューティングおよび制限事項」を参照してください。

---

### 本項の内容

- ▶ 69 ページ「Windows の場合のサーバ・システム要件」
- ▶ 69 ページ「Solaris の場合のサーバ・システム要件」
- ▶ 70 ページ「RedHat Linux の場合のサーバ・システム要件」
- ▶ 70 ページ「VMware のサーバ・システム要件」
- ▶ 73 ページ「64 ビット環境のサポート」
- ▶ 73 ページ「クライアントのシステム要件」

## Windows の場合のサーバ・システム要件

Windows プラットフォームに SiteScope をインストールする場合は、次のシステム要件を使用します。

コンピュータおよびプロセッサ	800 MHz 以上
オペレーティング・システム	<ul style="list-style-type: none"> <li>▶ Microsoft Windows 2003 SP1, SP2 Standard/Enterprise Edition</li> <li>▶ Microsoft Windows Server 2003 R2 SP1, SP2 Enterprise Edition</li> <li>▶ Microsoft Windows Server 2008 R2 SP2 Standard/Enterprise Edition</li> <li>▶ Microsoft Windows Server 2008 R2 Hyper-V</li> </ul>
メモリ	1 GB 以上 (2 GB 以上を推奨)
ハード・ディスクの空き容量	2 GB 以上 (10 GB 以上を推奨)
Java プラグイン (アプレット表示用)	JRE 1.6.0_14 以降

## Solaris の場合のサーバ・システム要件

Solaris プラットフォームに SiteScope をインストールする場合は、次のシステム要件を使用します。

コンピュータおよびプロセッサ	Sun 400 MHz UltraSparc II プロセッサ以上
オペレーティング・システム	Solaris 9 または 10 (最新のパッチ・クラスタを使用)
メモリ	1 GB 以上 (2 GB 以上を推奨)
ハード・ディスクの空き容量	2 GB 以上 (10 GB 以上を推奨)
Java プラグイン (アプレット表示用)	JRE 1.6.0_14 以降

---

**注 :** Solaris プラットフォームで SiteScope 管理レポートを表示するには、SiteScope サーバ上で X Window システムが稼動している必要があります。

---

## RedHat Linux の場合のサーバ・システム要件

RedHat Linux プラットフォームに SiteScope をインストールする場合は、次のシステム要件を使用します。

コンピュータおよびプロセッサ	800 MHz 以上
オペレーティング・システム	RedHat ES/AS Linux 4, 4.3, 5.2, 5.4, 5.5 注: NPTL (Native POSIX Threading Library) 搭載の RedHat Linux 9 は、サポートされません。
メモリ	1 GB 以上 (2 GB 以上を推奨)
ハード・ディスクの空き容量	2 GB 以上 (10 GB 以上を推奨)
Java プラグイン (アプレット表示用)	JRE 1.6.0_14 以降

## VMware のサーバ・システム要件

SiteScope では、下記のテスト済みの設定に従って、次の VMware 環境がサポートされています。

サポート対象環境とテスト済み環境	<ul style="list-style-type: none"> <li>▶ VMware ESX 3.0</li> <li>▶ VMware VirtualCenter 3.0</li> <li>▶ vSphere 4.1</li> </ul>
サポート対象環境のみ	<ul style="list-style-type: none"> <li>▶ VMware VirtualCenter 2.x</li> <li>▶ VirtualCenter 2.x を使用する VMware ESX 2.5</li> <li>▶ VMware ESX 3.x</li> <li>▶ VirtualCenter 3.x を使用する VMware ESX 3.x</li> <li>▶ VMware vCenter Server 4.0</li> <li>▶ VMware ESX 4.0</li> <li>▶ VMware ESXi 4.0</li> </ul>

<p><b>テスト済みの VMware 設定</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>▶ 1 つの物理サーバ上の 4 VMware 仮想マシン (VM)</li> <li>▶ 各 VM に 2 つの CPU (2.39 GHz), 8 GB のメモリ, および 40 GB のディスク空き領域</li> <li>▶ ストレージには HP EVA 8400/22G を使用</li> <li>▶ 物理サーバ : ESX ホストは, 8x Intel Xeon x5570 CPU, 72 GB RAM を搭載し, VMware ESX 4.0 U1 をインストールした HP BL490c G6</li> <li>▶ 同じ物理サーバにはほかの VM は存在していない</li> <li>▶ VMTools をインストール済み</li> </ul> <p><b>注 :</b> SiteScope VM に割り当てられたリソースは他の VM と共有しないでください。</p>
<p><b>テスト済みの SiteScope 設定</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>▶ 各 SiteScope は次に示すサーバを監視します。             <ul style="list-style-type: none"> <li>▶ 33 台の SUN リモート・サーバ</li> <li>▶ 2 台の Linux リモート・サーバ</li> <li>▶ 最大 100 台のドメイン内サーバ (Microsoft Windows Resources モニタ)</li> <li>▶ 696 台の Microsoft Windows リモート・サーバ</li> </ul> </li> <li>▶ SiteScope ごとに, 次のタイプのモニタが約 8880 作成されました。             <ul style="list-style-type: none"> <li>▶ CPU</li> <li>▶ メモリ</li> <li>▶ ディスク領域</li> <li>▶ Microsoft Windows Resources</li> <li>▶ Microsoft Windows Event Log</li> <li>▶ Microsoft Windows サービス状態</li> <li>▶ Microsoft Windows パフォーマンス・カウンタ</li> <li>▶ Ping</li> <li>▶ 送信</li> <li>▶ サービス</li> <li>▶ UNIX リソース</li> </ul> </li> <li>▶ 1 分間に約 900 台のモニタが稼動</li> </ul>

## 第 6 章 • SiteScope をインストールする前に

VMware 環境に SiteScope をインストールする場合は、上記の最低限のシステム要件を使用します（これらはテスト済み環境に基づく推奨事項であり、サポートに関する制限事項ではありません）。

コンピュータおよびプロセッサ	4 Intel Xeon 物理プロセッサ（各 2 GHz）
オペレーティング・システム	Microsoft Windows 2003 Standard/Enterprise SP1 （物理サーバでサポートされているすべてのオペレーティング・システムは、VM サーバでもサポートされます）。
メモリ（RAM）	4 GB
ハード・ディスクの空き容量	20 GB（ハード・ディスク速度：7200 rpm）
ネットワーク・カード	1 物理ギガビット・ネットワーク・インタフェース・カード
その他のソフトウェア	VMTools がインストールされている必要があります。
Java プラグイン（アプレット表示用）	JRE 1.6.0_14 以降

---

**注：**モニタの容量と速度は、以下を始めとするさまざまな要因に大きく影響される可能性があります。SiteScope サーバ・ハードウェア、オペレーティング・システム、パッチ、サードパーティ製のソフトウェア、ネットワーク設定およびアーキテクチャ、監視対象サーバの位置に対する SiteScope サーバの位置、モニタの種類と種類ごとの分布、監視頻度、監視実行時間、Business Service Management 統合、およびデータベースのログ記録。提示されている最高値はすべての環境に当てはまるものではありません。

---



## 64 ビット環境のサポート

SiteScope では次の 64 ビット環境がサポートされます：

<b>オペレーティング・システム</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>▶ Microsoft Windows Server 2003 SP2 Standard/Enterprise Edition (64 ビット)</li> <li>▶ Microsoft Windows Server 2008 SP2 (64 ビット) Enterprise Edition</li> <li>▶ Microsoft Windows Server 2008 R2 (64 ビット) Enterprise Edition</li> <li>▶ Solaris 10 (64 ビット)</li> <li>▶ Linux 5.5 (64 ビット)</li> </ul>
----------------------	--

---

**注：** SiteScope が 64 ビット環境にインストールされると次のモニタは監視をサポートしません：

- ▶ Microsoft Exchange 2003 のメールボックス・モニタ
  - ▶ Microsoft Exchange 2003 のパブリック・フォルダ・モニタ
  - ▶ Microsoft Windows Media Player モニタ
  - ▶ Real Media Player モニタ
  - ▶ Sybase モニタ
  - ▶ Tuxedo モニタ
  - ▶ Web スクリプト・モニタ
- 

## クライアントのシステム要件

SiteScope クライアントは、次のシステムでサポートされています。

- ▶ Microsoft Internet Explorer 7.x ~ 8.0 を使用するすべての Microsoft Windows オペレーティング・システム (Microsoft Windows 7 を含む)
- ▶ Firefox 3.0x (Windows 環境で稼動するクライアントでのみ認定)

## 認定されている構成

次の構成は、HP Business Service Management と統合された SiteScope のインストールのための高負荷環境で認定されています。

オペレーティング・システム	Microsoft Windows Server 2003 SP2 Enterprise Edition (32 ビット)	Microsoft Windows Server 2003 SP2 Enterprise Edition (64 ビット)
システム・タイプ	x86 ベースの PC	ACPI マルチプロセッサ x64 ベースの PC
CPU	Intel Xeon 5160 物理プロセッサ×4 (各 3 GHz)	Intel Xeon 5160 物理プロセッサ×4 (各 3 GHz)
合計物理メモリ (RAM)	16 GB	16 GB
Java ヒープ・メモリ	1024 MB	2048 - 3072 MB
総モニタ数	16,000	24,000
リモート・サーバの総数	1,250	1,200
1 分間のモニタ実行数	2,000	3,500

**注：**

- ▶ ログ内で負の値の Topaz ID エラーは無視すべきです。
- ▶ 高負荷下で作業している場合は、初めて HP Business Service Management に接続する前にすべてのモニタを中断してください。

## SiteScope キャパシティに関する制限事項

SiteScope が BSM と統合されている場合に、負荷が非常に高い処理を実行すると、SiteScope に問題が発生することがあります。次のガイドラインに従ってください。

- ▶ 3,000 を超えるモニタにテンプレート変更適用ウィザードを一度に実行しないでください。
- ▶ モニタ・デプロイメント・ウィザードを実行して、3,000 を超えるモニタを一度に作成しないでください。
- ▶ 1 回の操作で 3,000 を超えるモニタのコピーおよび貼り付けを実行しないでください。
- ▶ グローバル検索と置換を実行して、2,500 を超えるモニタの Business Service Management 統合プロパティを一度に変更しないでください。

SiteScope には、システムの動作を予測し、SiteScope のキャパシティ・プランニングを実行するためのツールが備わっています。詳細については、158 ページ「SiteScope キャパシティ・カリキュレータ」を参照してください。

## SiteScope サポート・マトリックス

本リリースでサポートされる HP Business Service Management, HP Business Process Monitor, および HP Operations Manager バージョンについては、SiteScope のリリース・ノートの HP SiteScope サポート・マトリックスを参照してください (SiteScope で **[ヘルプ]** > **[新機能]** を選択)。



# 7

---

## SiteScope のアップグレード

### 本章の内容

- ▶ アップグレードを実行する前に (ページ 78)
- ▶ 既存の SiteScope インストールのアップグレード (ページ 79)
- ▶ End Of Life Monitor Viewer の使用 (ページ 80)
- ▶ SiteScope ディレクトリの命名 (ページ 83)
- ▶ SiteScope 構成データのバックアップ (ページ 83)
- ▶ 設定データのインポート (ページ 84)
- ▶ カスタム・プロパティの検索/フィルタ・タグへの変換 (ページ 85)
- ▶ 注意事項と制限事項 (ページ 87)

## アップグレードを実行する前に

この章では、お使いのシステムと運用への支障の可能性を最小限に抑えながら、既存の HP SiteScope インストールを HP SiteScope 11.10 にアップグレードする方法について説明します。

SiteScope は、下位互換性を持つように設計されています。このため、監視環境への影響を最小限に抑えながら、新しいバージョンの SiteScope をインストールし、既存の SiteScope からモニタ設定を転送できます。

SiteScope をアップグレードする前に、次の点を考慮してください。

- ▶ アップグレードを始める前に、SiteScope リリース・ノート・ファイルに記載されている内容をよく読み、アップグレード・プロセスに関する最終確認事項や制限事項がないか確認します。リリース・ノートに記載されている手順を守らないと、予期しないデータの消失やアップグレード・プロセスの失敗につながる可能性があります。
- ▶ 設定ツールを使用して SiteScope 設定データをエクスポートすれば、SiteScope 10.x 以降のバージョンを SiteScope 11.10 に直接アップグレードできます。SiteScope 10.00 よりも前のバージョンの場合は、まず SiteScope 10.x にアップグレードしなければなりません。SiteScope 9.00 よりも前のバージョンの場合は、まず SiteScope 9.x にアップグレードしなければなりません。
- ▶ SiteScope の設定に 100 以上の大規模なサブグループを含むグループがある場合、SiteScope 11.10 へのアップグレード中にメモリ・オーバーフローが発生する可能性があります。アップグレードする前に、サブグループの問題のあるレベルを分割して、サブグループ数を 100 以下にしてください。
- ▶ SiteScope バージョン 10.10 以降、HTTP は、UNIX リモート・サーバへの接続方法としてサポートされなくなりました。アップグレード中に SiteScope が HTTP メソッドを使用する UNIX リモート・サーバを見つけると、アップグレード・プロセスが失敗します。これを回避するには、アップグレード対象のバージョンのメソッドのプロパティをほかの有効なオプション (ssh, telnet, または rlogin) のいずれかに変更します。影響を受ける UNIX リモート・サーバのリストについては、**<SiteScope ルート・ディレクトリ> %logs%upgrade.log** ファイルを参照してください。
- ▶ SiteScope モニタにカスタム・プロパティ設定を追加するカスタム・プロパティ・メカニズムは、SiteScope バージョン 10.00 では削除され、フィルタリング機能が [タグ] メカニズムに変わりました。10.00 以前の SiteScope バージョンからアップグレードする場合は、カスタム・プロパティを検索/フィルタ・タグに変換できます。詳細については、85 ページ「カスタム・プロパティの検索/フィルタ・タグへの変換」を参照してください。

## 既存の SiteScope インストールのアップグレード

アップグレードでは、次の手順を実行することを推奨します。

- 1 End Of Life Monitor Viewer を実行して、現在のデプロイメントに End Of Life モニタが存在しないことを確認してください。**

新しいバージョンの SiteScope をインストールする前に、この手順を実行する必要があります。詳細については、80 ページ「End Of Life Monitor Viewer の使用」を参照してください。

- 2 クリーンなディレクトリ構造に新しいバージョンの SiteScope をインストールします。**

ディレクトリの命名方法の詳細については、83 ページ「SiteScope ディレクトリの命名」を参照してください。

SiteScope のインストールの詳細については、93 ページ「SiteScope のインストール」を参照してください。

- 3 SiteScope 11.10 の設定ツールを使用して主要な SiteScope データのバックアップ・コピーを作成します。**

詳細については、83 ページ「SiteScope 構成データのバックアップ」を参照してください。

- 4 インストール後、SiteScope 11.10 の設定ツールを使用して、モニタ設定データを以前のバージョンの SiteScope からインポートします。**

詳細については、84 ページ「設定データのインポート」を参照してください。

- 5 以前のバージョンの SiteScope からデータをインポートした後、バッチ・ファイルまたは start コマンド・シェル・スクリプトを実行して SiteScope を起動します。**

モニタが実行するまでの時間が 15 分を超える場合に、アップグレード後 SiteScope 自身が再起動されないようにするには、<SiteScope ルート・ディレクトリ>%bin ディレクトリから go.bat ファイルを実行するか (Windows プラットフォーム)、<インストール・パス>/SiteScope/start 構文を使用して start コマンド・シェル・スクリプトを実行し (Solaris または Linux プラットフォーム)、SiteScope を起動します。

## End Of Life Monitor Viewer の使用

End Of Life Monitor Viewer は、現在の設定に End Of Life モニタがあるかどうかをアップグレード前に確認するために SiteScope 設定を任意のプラットフォームで実行できる外部ツールです。End Of Life Monitor Viewer を使用することで、次に示すようにアップグレードのために SiteScope 設定を準備できます。

- ▶ End Of Life モニタの詳細を表示（テンプレート・モニタを含む）。モニタ・タイプ用のモニタのプロパティ、モニタのパス、推奨代替モニタを参照できます。
- ▶ このモニタとプロパティの一覧を txt ファイルにエクスポートします。

---

**注：** End Of Life Monitor Viewer を使用して、End Of Life モニタを追加、編集、削除することはできません。

---

## End Of Life Monitor Viewer の実行

SiteScope 設定で End Of Life Monitor Viewer を実行して、現在のデプロイメントに End Of Life モニタが存在しないことを確認してください。

**End Of Life Monitor Viewer を実行するには、次の手順で行います。**

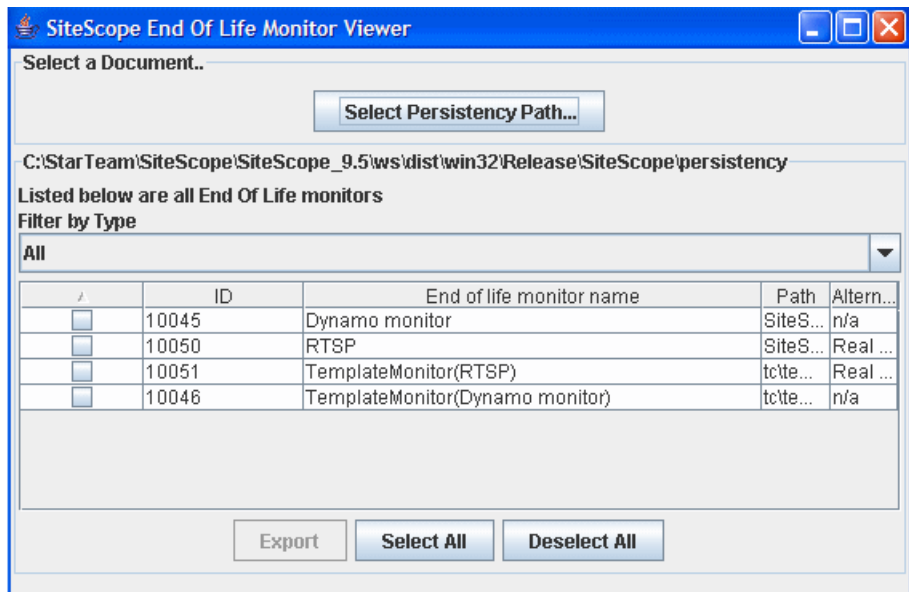
- 1 SiteScope 11.10 ソフトウェアが含まれるインストール・メディアをアップグレードする SiteScope マシンのドライブに挿入します。
- 2 ~~¥EndOfLifeMonitorViewer¥~~**<プラットフォーム>** フォルダで、**upgrade.tools.zip** ファイルの内容を **<SiteScope ルート・ディレクトリ>** に抽出します。
- 3 **<SiteScope ルート・ディレクトリ>¥upgrade** フォルダから、Windows プラットフォームでは **EndOfLifeMonitorsViewer.bat**、Solaris または Linux プラットフォームでは **EndOfLifeMonitorsViewer.sh** ファイルを実行します。End of Life Monitor Viewer が開きます。
- 4 **[Select Persistency Path]** ボタンをクリックします。[開く] ダイアログ・ボックスが開きます。
- 5 永続フォルダのパスを入力し、**[開く]** をクリックします。



- 6 End Of Life Monitor Viewer は、End Of Life モニタの SiteScope 設定を確認し、結果を表示します。

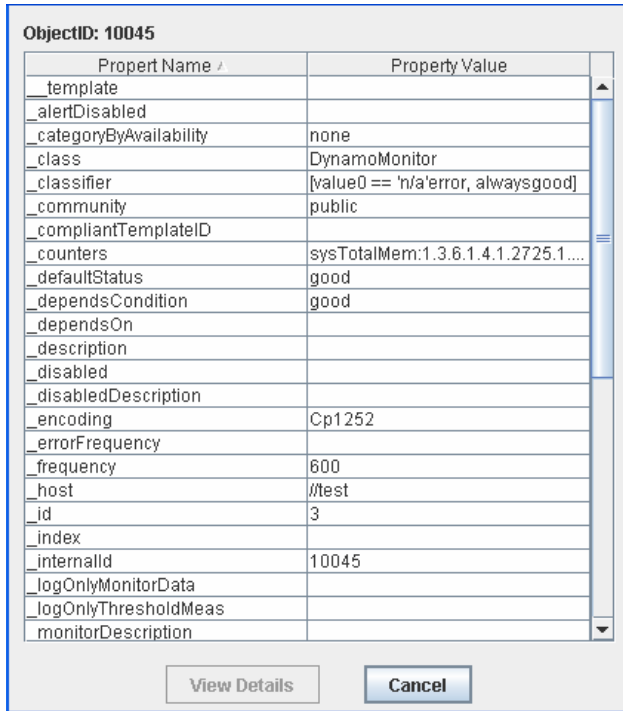
設定に End Of Life モニタが含まれる場合は、次のプロパティが表示されます。

- ▶ モニタ ID
- ▶ End Of Life モニタ名
- ▶ モニタの完全パス
- ▶ 代替モニタ (あれば)



## 第7章 • SiteScope のアップグレード

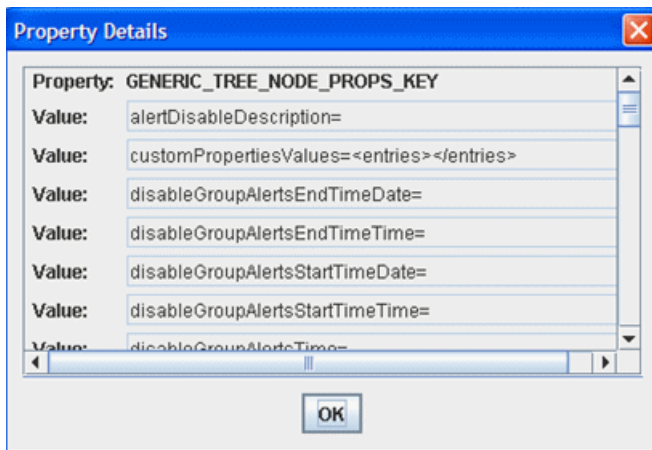
モニタ行をダブルクリックして、モニタの詳細を表示します。



Propert Name	Property Value
_template	
_alertDisabled	
_categoryByAvailability	none
_class	DynamoMonitor
_classifier	[value0 == 'n/a/error, alwaysgood]
_community	public
_compliantTemplateID	
_counters	sysTotalMem:1.3.6.1.4.1.2725.1...
_defaultStatus	good
_dependsCondition	good
_dependsOn	
_description	
_disabled	
_disabledDescription	
_encoding	Cp1252
_errorFrequency	
_frequency	600
_host	/test
_id	3
_index	
_internalId	10045
_logOnlyMonitorData	
_logOnlyThresholdMeas	
monitorDescription	

View Details Cancel

プロパティの詳細を表示するには、プロパティを選択して [詳細表示] ボタンをクリックします。



Property:	Value:
GENERIC_TREE_NODE_PROPS_KEY	alertDisableDescription=
	customPropertiesValues=<entries></entries>
	disableGroupAlertsEndTimeDate=
	disableGroupAlertsEndTimeTime=
	disableGroupAlertsStartTimeDate=
	disableGroupAlertsStartTimeTime=
	disableGroupAlertsTime=

OK

- 7 End Of Life モニタに関する情報をエクスポートするには、.txt ファイルに含めるモニタを選択して [エクスポート] をクリックします。ファイルを保存するファイル名と場所を入力し、[保存] をクリックします。選択したモニタとそのプロパティが、.txt 形式で保存されます。
- 8 現在の SiteScope ユーザ・インタフェースで、End Of Life モニタを推奨される代替モニタに置き換え End Of Life モニタを削除します。

End Of Life モニタおよび置換モニタの一覧については、SiteScope ヘルプの「廃止された統合モニタのリスト」および「廃止された SiteScope モニタのリスト」を参照してください。

## SiteScope ディレクトリの命名

SiteScope のインストール用に作成する新しいディレクトリの名前は **SiteScope** にし、別のディレクトリ・パスに置く必要があります。たとえば、元の SiteScope ディレクトリが **C:\¥SiteScope** であれば、新しいディレクトリは **C:\¥11.10¥SiteScope** にします。

## SiteScope 構成データのバックアップ

SiteScope のアップグレードに備える最も簡単な方法は、設定ツールを使用して現在の SiteScope のインストール・ディレクトリとそのサブディレクトリをすべてバックアップすることです。設定ツールを使用して、後で SiteScope にインポートするために、現在の SiteScope からテンプレート、ログ、モニタ設定ファイル、サーバ証明書、スクリプトなどの SiteScope データをエクスポートできます。ユーザ・データが zip ファイルにエクスポートされます。

---

**注：**以前のバージョンの SiteScope からアップグレードする場合、サーバ証明書とスクリプトも確実に含まれるように、SiteScope 11.10 設定ツールを使用してデータをエクスポートすることを推奨します（以前のバージョンのツールは、サーバ証明書とスクリプトのエクスポートをサポートしていません）。

---

または、SiteScope インストールを手動でバックアップできます。詳細については、235 ページ「SiteScope を起動できない場合に SiteScope インストールのバックアップとリカバリを行う」を参照してください。

---

**注：** SiteScope データのエクスポート時に **<SiteScope> %htdocs** ディレクトリはコピーされないため、このディレクトリのバックアップを作成して、アップグレード後に SiteScope 11.10 ディレクトリにコピーして、古いレポートを参照できるようにする必要があります。

---

設定ツールを使用して SiteScope データをエクスポートする方法の詳細については、135 ページ「SiteScope 設定ツールの使用」を参照してください。

または、インストール・プロセスの一部として SiteScope で SiteScope データをエクスポートできます。詳細については、93 ページ「SiteScope のインストール」を参照してください。

## 設定データのインポート

SiteScope のアップグレード後、設定ツールを使用して、以前のバージョンの SiteScope からモニタ設定データをコピーできます。サーバ証明書とスクリプトが確実に含まれるようにするには、SiteScope 11.10 の設定ツールを使用してデータを SiteScope にインポートしてください。詳細については、135 ページ「SiteScope 設定ツールの使用」を参照してください。

または、手動でバックアップを作成した場合は、新しいインストール・ディレクトリからバックアップしたすべてのフォルダとファイルを削除して、バックアップしたフォルダとファイルをインストール・ディレクトリにコピーする必要があります。詳細については、235 ページ「SiteScope を起動できない場合に SiteScope インストールのバックアップとリカバリを行う」を参照してください。

## カスタム・プロパティの検索/フィルタ・タグへの変換

SiteScope ではカスタム・プロパティはサポートされなくなりました。10.00 以前の SiteScope バージョンからアップグレードする場合は、マッピング・ファイルを作成して、カスタム・プロパティ変換ツールを実行することにより、カスタム・プロパティを検索/フィルタ・タグに変換できます。

**カスタム・プロパティを検索/フィルタ・タグに変換するには、次の手順で行います。**

- 1 テキスト・エディタで、マッピング・ファイルを作成します。これには、次の形式でカスタム・プロパティを検索/フィルタ・タグにマッピングします。

```
<カスタム・プロパティ名> , <カスタム・プロパティ値> - <タグ名> , <タグの値>
```

説明：

<カスタム・プロパティ名>は **master.config** ファイルで設定されているカスタム・プロパティです。

<カスタム・プロパティ値>は、前述の特定のカスタム・プロパティ名の値です。

<タグ名>は、モニタに追加するタグの名前です（このタグは検索/フィルタ・タグとしてシステム内に存在している必要がある）。

<タグの値>は、カスタム・プロパティの値に対応する前述のタグの値です。

次に例を示します。

```
_custPropSeverity,MINOR->Severity,MINOR
_custPropServiceGroup,Sales->Notification Group,Sales
```

---

**注：**マッピング・ファイルでは、< > ->文字間にスペースを含むことはできません。

---

- 2 ファイルを保存します。
- 3 コマンド・ラインを開き、次の情報を入力します。
  - ▶ Windows 環境の場合：  
    <SiteScope ルート・ディレクトリ>%tools%CustomPropertyToTagTool.bat  
    <マッピング・ファイルへのパス> < SiteScope persistency フォルダへのパス>
  - ▶ UNIX, Linux または Solaris 環境の場合：  
    <SiteScope ルート・ディレクトリ>%tools%CustomPropertyToTagTool.sh  
    <マッピング・ファイルへのパス> <SiteScope persistency フォルダへのパス>

(Windows プラットフォームでは) たとえば、次のように入力します。

```
C:%SiteScope%tools%CustomPropertyToTagTool.bat
C:%Desktop%configFile2.txt
C:%SiteScope%persistency
```

## 注意事項と制限事項

このセクションでは、SiteScope のアップグレードのトラブルシューティングおよび制限事項について説明します。

本項の内容

- ▶ 88 ページ「アップグレード後の最初の SiteScope の起動に時間がかかる場合がある」
- ▶ 88 ページ「SiteScope がカスタム ID を取得できない」
- ▶ 89 ページ「アクション・タイプに応じて標準設定警告アクションの名前が指定される」
- ▶ 89 ページ「Business Service Management/ServiceCenter または Service Manager の統合」
- ▶ 90 ページ「Business Service Management との統合を行う場合の SiteScope のほかのサーバへの移動」
- ▶ 90 ページ「SiteScope のアップグレードの失敗」

---

**注：** SiteScope のアップグレードに関するその他の情報については、HP ソフトウェア・セルフ・ソルブ技術情報

(<http://support.openview.hp.com/selfsolve/documents>) も参照してください。

技術情報を利用するには、HP パスポート ID を使ってログオンする必要があります。

---

## アップグレード後の最初の SiteScope の起動に時間がかかる場合がある

**問題：**アップグレード後の最初の SiteScope の再起動に時間がかかる（15 分を超える）場合があります。15 分後モニタが実行を開始しなかった場合、SiteScope は自分自身で再起動します。

### 考えられる解決策：

- ▶ モニタが実行するまでの時間が 15 分を超える場合に、SiteScope 自身が再起動されないようにするには、**<SiteScope ルート・ディレクトリ>%bin** ディレクトリから **go.bat** ファイルを実行するか（Windows プラットフォーム）、**<インストール・パス>/SiteScope/start** 構文を使用して **start** コマンド・シェル・スクリプトを実行して（Solaris または Linux プラットフォーム）、SiteScope を起動します。
- ▶ 稼働していないターゲット環境のすべてのモニタを無効にします。この操作により、システムが応答するまでの待機時間が短縮されます。

## SiteScope がカスタマ ID を取得できない

**問題：**9.0 より前のバージョンの SiteScope で、SiteScope が Business Service Management に接続されると、SiteScope は **<SiteScope ルート・ディレクトリ> %cache%persistent%TopazConfiguration** にある設定ファイルにカスタマ ID を保存します。

9.x へのアップグレード後に初めて SiteScope をロードすると、SiteScope は設定ファイルを読み取り、HP Business Service Management の接続の詳細を取得しようと試みます。このファイルが壊れている場合（エクスポート設定が正しく実行されないことにより発生する場合など）、SiteScope はカスタマ ID を取得することができないため、HP Business Service Management から取得しようとします。再起動中に Business Service Management がダウンすると、SiteScope はカスタマ ID を取得できず、SiteScope が再度自分自身を再起動します。

**考えられる解決策：**アップグレード後に SiteScope を起動する前に、SiteScope に接続されているすべての HP Business Service Management が稼働していることを確認します。



## アクション・タイプに応じて標準設定警告アクションの名前が指定される

**問題：**警告アクションは SiteScope 9.0 で追加されました。SiteScope 9.0 以降のバージョンにアップグレードすると、標準設定警告アクションが作成され、アクション・タイプに応じて名前が指定されます（電子メール、ページャ、SMS など）。これは、標準設定の名前をアクションを保持する警告と連結する必要がある場合、問題となる可能性があります。

**考えられる解決策：**アップグレードの前に、< SiteScope ルート・ディレクトリ > %groups にある **master.config** ファイルを開き、連結で使用する区切り文字を含むように **\_AlertActionCompositeNameDelimiter** キーを変更します。

## Business Service Management/ServiceCenter または Service Manager の統合

この項目は、10.00 より前のバージョンから SiteScope をアップグレードして、Business Service Management/ServiceCenter または Service Manager 統合を操作する場合に該当します。SiteScope で ServiceCenter モニタを設定するときに、**peregrine.jar** というファイルが作成され、SiteScope マシン上の **WEB-INF%lib** ディレクトリに配置されます。このファイルは、SiteScope のアップグレード中に削除されるため、アップグレード前にバックアップする必要があります。アップグレードが完了したら、バックアップした **peregrine.jar** ファイルを **WEB-INF%lib** ディレクトリに戻します。

## Business Service Management との統合を行う場合の SiteScope のほかのサーバへの移動

このプロセスは、SiteScope サーバを（新しいホスト名と IP アドレスを持つ）新しいハードウェアに移動して、Business Service Management 統合を行う場合に該当します。次の手順で行って統合への影響を最小限に抑えます。

- 1 現在の SiteScope インストールのバックアップを作成します。詳細については、83 ページ「SiteScope 構成データのバックアップ」を参照してください。
- 2 新しいハードウェアに SiteScope をインストールして、SiteScope 設定データを SiteScope インストール・ディレクトリにインポートします。詳細については、84 ページ「設定データのインポート」を参照してください。
- 3 以前のハードウェアで使用したポート番号を使用して SiteScope サーバを設定します。
- 4 10.10 より前のバージョンの SiteScope を使用している場合は、Business Service Management で次の手順で行います。
  - ▶ 新しい SiteScope ページの SiteScope プロファイルに関連するフィールドを更新します。
  - ▶ HOSTS テーブルの SiteScope マシンに関する情報を更新します。

## SiteScope のアップグレードの失敗

アップグレード・プロセスが失敗した場合は、<SiteScope ルート・ディレクトリ> ¥logs ディレクトリにある upgrade.log ファイルでアップグレードが失敗した理由を確認してください。

Windows 環境への SiteScope のインストール時にアップグレード・プロセスが失敗した場合は、SiteScope は何度でも再起動の実行を試みます。

**考えられる解決策 :** SiteScope のインストールを再度実行します。

# 第 III 部

---

## SiteScope のインストール



# 8

---

## SiteScope のインストール

### 本章の内容

- ▶ インストールの流れ (ページ 93)
- ▶ Solaris または Linux にインストールする場合の準備 (ページ 95)
- ▶ 64 ビットのインストール準備 (ページ 96)
- ▶ インストール・ウィザードを使用してインストール (ページ 97)
- ▶ コンソール・モードを使用した Solaris または Linux へのインストール (ページ 121)
- ▶ トラブルシューティングおよび制限事項 (ページ 129)

### インストールの流れ

SiteScope は自己解凍型実行ファイルとして提供され、HP の Web サイトからダウンロードできるほか、DVD で入手することもできます。SiteScope は、1 つのサーバにインストールされ、Windows プラットフォームでは 1 つのアプリケーションとして、Solaris または Linux プラットフォーム上では 1 つのアプリケーションまたはさまざまなプロセスとして稼動します。

#### **1 SiteScope 11.10 のインストール準備を行います (Solaris または Linux に SiteScope をインストールする場合のみ)。**

詳細については、95 ページ「Solaris または Linux にインストールする場合の準備」を参照してください。

## 2 SiteScope 11.10 をインストールします。

- ▶ Windows へのインストールの詳細については、97 ページ「インストール・ウィザードを使用してインストール」を参照してください。
- ▶ Solaris 用の SiteScope および Linux 用の SiteScope には、次に示すインストール・オプションが用意されています。
  - ▶ 実行可能なユーザ・インタフェース（インストール・ウィザード）。詳細については、97 ページ「インストール・ウィザードを使用してインストール」を参照してください。
  - ▶ コマンド・ライン入力によるコンソール・モード・インストール・スクリプト。詳細については、121 ページ「コンソール・モードを使用した Solaris または Linux へのインストール」を参照してください。
- ▶ サイレント・インストールを使用して SiteScope をインストールすることもできます。詳細については、133 ページ「サイレント・モードでの SiteScope のインストール」を参照してください。

---

### 注：

- ▶ 既存バージョンの SiteScope がインストールされている場合は、アンインストールしてから SiteScope 11.10 をインストールする必要があります。
  - ▶ 以前に設定ツールを使用して SiteScope データをエクスポートした場合は（詳細については、135 ページ「SiteScope 設定ツールの使用」を参照）、ユーザ・データ ZIP ファイルをインポートできます。
  - ▶ サードパーティ製のマドルウェアおよびドライバがある場合、それらは手作業でコピーまたはインストールする必要があります。
- 

## 3 SiteScope に接続します。

## Solaris または Linux にインストールする場合の準備

お使いの環境によっては、Solaris または Linux に SiteScope をインストールするための準備に、ユーザ・ルート・アカウントの作成、適切なインストール先の場所の選択、アカウント権限の設定が必要になります。

**UNIX または Linux に SiteScope をインストールするための準備は、次の手順で行います。**

- 1** SiteScope アプリケーションを実行するユーザ・アカウントを作成します。そのアカウントの標準のシェルを設定します。
- 2** SiteScope アプリケーションのインストール場所は `/opt/HP/SiteScope` です。インストールする場所で、SiteScope のインストールと運用を行うために十分なディスク領域が使用できることを確認します。

---

### 注：

- ▶ インストール中は Solaris および Linux のインストール・ディレクトリを変更できません。インストール完了後に変更することもお勧めしません。
  - ▶ SiteScope 11.10 をインストールするための新しいディレクトリを作成します。以前のバージョンの SiteScope に使用しているディレクトリにバージョン 11.10 をインストールしないでください。
  - ▶ すべてのサーバ監視機能を使用するには SiteScope に高いアカウント権限が必要ですが、root アカウントからの SiteScope の実行や、リモート・サーバへのアクセスに root アカウントを使用するような SiteScope の設定は行わないことをお勧めします。
  - ▶ サイレント・インストールを使用して SiteScope をインストールすることもできます。詳細については、133 ページ「サイレント・モードでの SiteScope のインストール」を参照してください。
-

## 64 ビットのインストール準備

SiteScope のインストールの前に、次の点に注意してください。

- ▶ Microsoft Exchange 2003 のメールボックス , Microsoft Exchange 2003 のパブリック・フォルダ, Microsoft Windows Media Player, Real Media Player, Sybase, Tuxedo, および Web Script モニタは SiteScope の 64 ビット・バージョンでの動作をサポートしないので、これらのモニタのいずれかで作業する予定の場合は、SiteScope の 32 ビット・バージョンをインストールしてください。
- ▶ 32 ビットのプロセスでは 4 GB の仮想メモリのアクセスに制限されますが、64 ビットのプロセスでは、8TB の仮想メモリのアドレス領域にアクセス可能で、SiteScope の監視容量を増やすことができます。
- ▶ SiteScope 64 ビット・バージョンは、SiteScope 32 ビット・バージョンの最大 3 倍のメモリを消費します。したがって、SiteScope 64 ビット・バージョンを使用している場合、135 ページ「SiteScope 設定ツールの使用」で説明するように、サーバの JVM ヒープ・サイズを手動で増やす必要があります。
- ▶ インストール制限は次のとおりです。

インストーラ¥OS	32 ビット	64 ビット
32 ビット	サポート	サポート
64 ビット	なし	サポート



## インストール・ウィザードを使用してインストール

インストール・ウィザードを使用してサポート対象の Windows, Solaris, または Linux 環境に SiteScope をインストールするには、次の手順を実行します。サポートされている環境のリストについては、68 ページ「システム要件」を参照してください。

X11 ライブラリがすでにサーバにインストールされている場合は、インストール・ウィザードが自動的に実行されます。これらのライブラリがインストールされていない場合は、次のいずれかを実行してください。

- ▶ X11 サーバがインストールされていないマシンに、グラフィック・モードで SiteScope をインストールします。詳細については、120 ページ「X11 サーバがインストールされていないマシンへのインストール・ウィザードを使用した SiteScope のインストール」を参照してください。
- ▶ コンソール・モードで、Solaris または Linux プラットフォームに SiteScope をインストールします。詳細については、121 ページ「コンソール・モードを使用した Solaris または Linux へのインストール」を参照してください。

---

**注：**サイレント・インストールを使用して SiteScope をインストールすることもできます。詳細については、133 ページ「サイレント・モードでの SiteScope のインストール」を参照してください。

---

**SiteScope をインストールするには、次の手順で行います。**

- 1 SiteScope ソフトウェアが含まれるインストール・メディアを SiteScope をインストールするマシンのドライブに挿入します（または、HP のダウンロード・サイトから SiteScope アーカイブをダウンロードできます）。
- 2 OS の指示に従って SiteScope のインストールを実行します。

### Windows の場合：

OS およびアーキテクチャに基づき、次の実行ファイルの前に SiteScope のインストール元の場所を入力します。

**HPSiteScope\_11.10\_setup.exe**

たとえば、SiteScope を Windows 32 ビット OS にインストールする場合、DVD\_ROOT > ¥Windows\_Setup¥32bit¥HPSiteScope\_11.10\_setup.exe を実行します。

**Solaris または UNIX の場合:**

- a ルート・ユーザーとしてサーバにログインします。
- b OS およびアーキテクチャに基づき、インストール・ファイルがある DVD ドライブのディレクトリに移動します。
- c スクリプト `./HPSiteScope_11.10_setup.bin` を実行します。

---

**注:** グラフィック・モードのインストールは、Solaris または Linux での 64 ビットのインストールではサポートされていません。

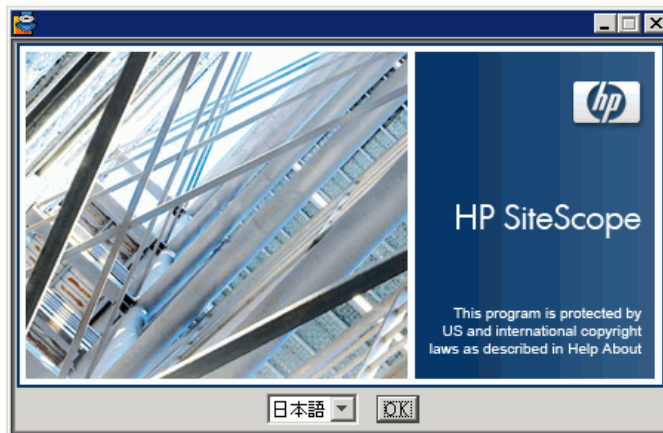
---

---

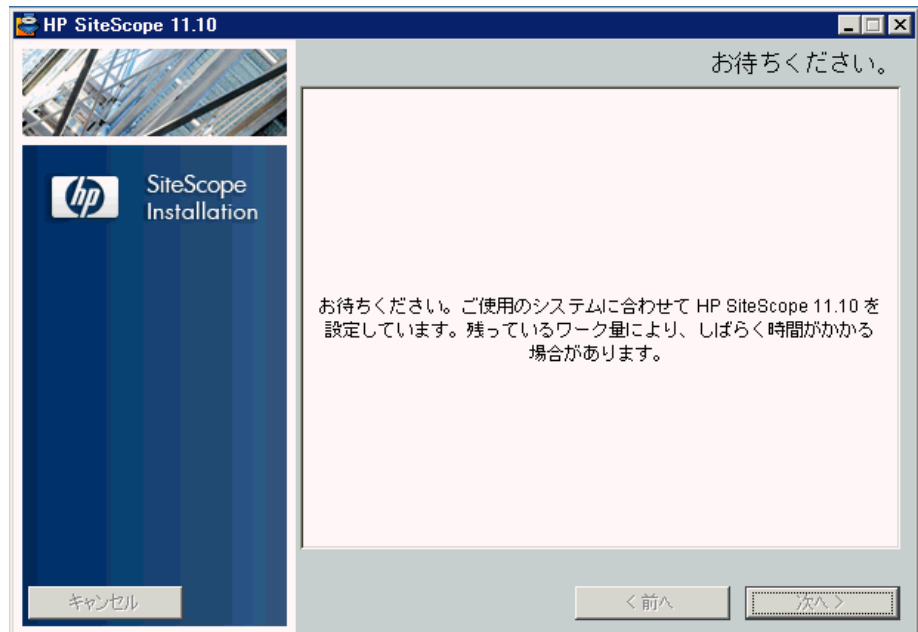
**注:** サーバで Microsoft ターミナル・サーバー・サービスが動作している場合、SiteScope のインストール時に、このサービスが**インストール・モード**である必要があります。サービスが正しいモードでない場合、ウィザードはエラー・メッセージを表示してインストールを完了します。**change user** コマンドを使用して、インストール・モードに切り替えます。詳細については、Microsoft サポート・サイト (<http://support.microsoft.com/kb/320185>) を参照してください。

---

- 3 ロケールの選択画面が表示されます。

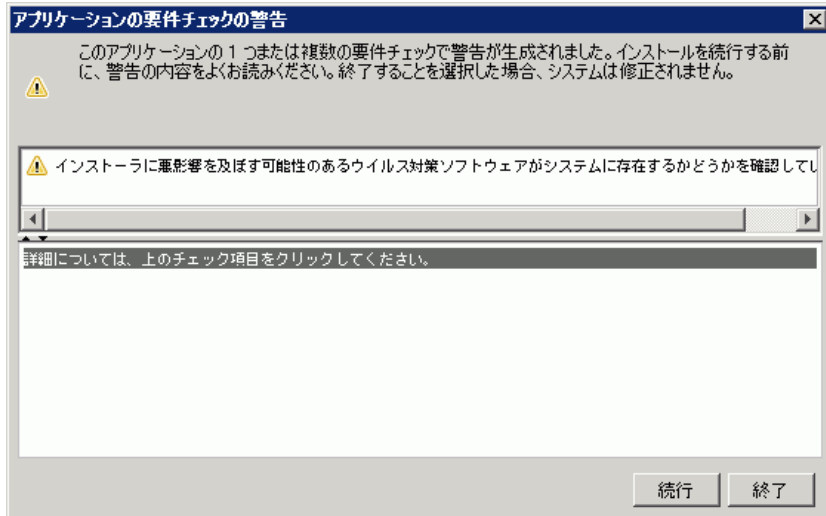


[OK] をクリックして、インストールを続けます。[初期化] 画面が表示されます。



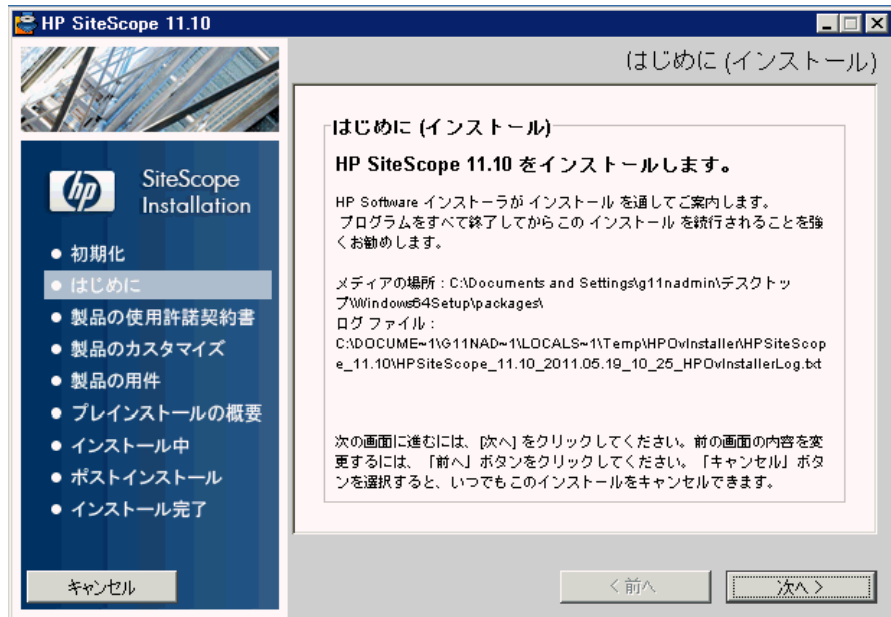
システム上で稼動しているアンチウイルス・プログラムが検出されると、警告内容を調べてからインストールを続行するように求められます。

- 4 [アプリケーションの要件チェックの警告] 画面に警告が表示される場合は、内容を読み、画面の指示に従ってください。

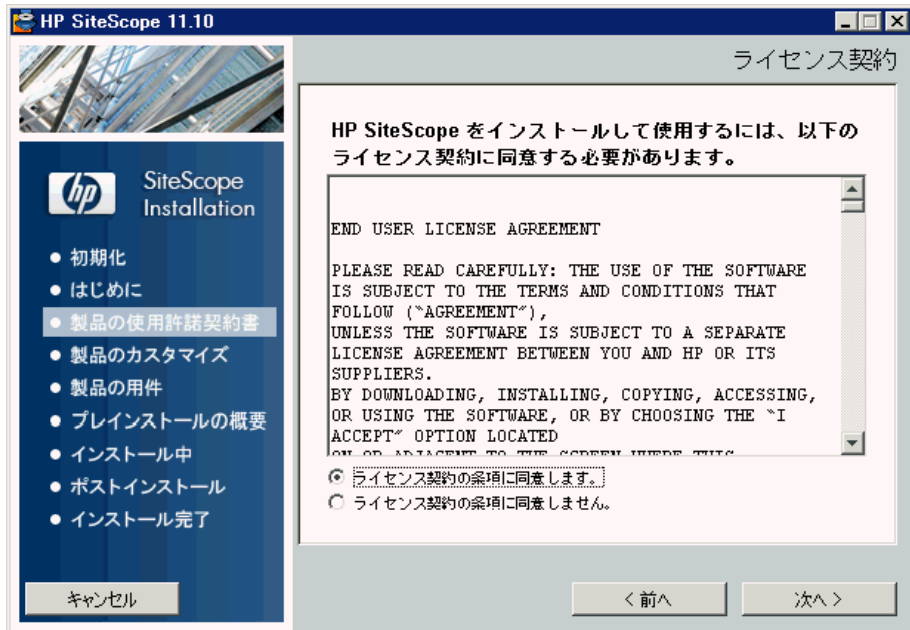


[**続行**] をクリックして、インストールを続けます。

- 5 表示される [はじめに (インストール)] 画面で、[次へ] をクリックします。



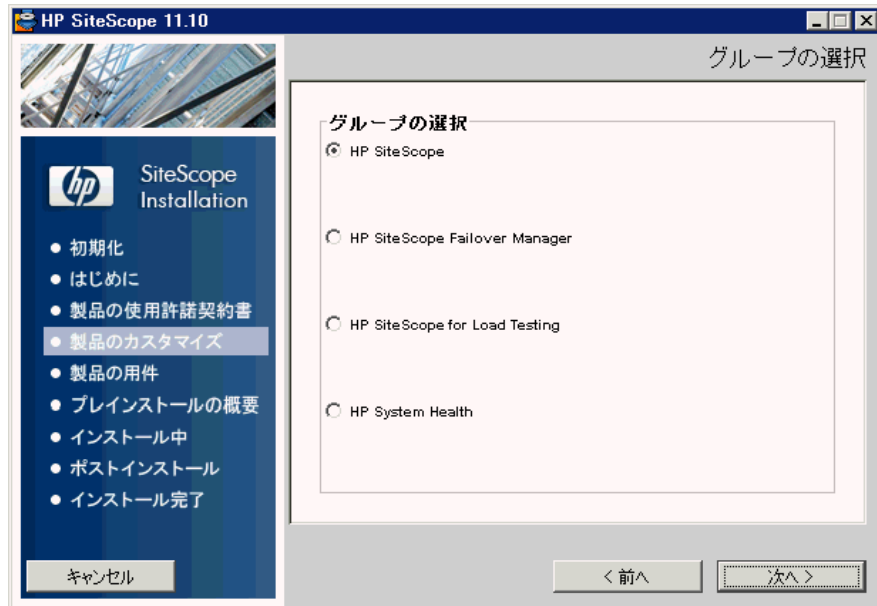
6 使用許諾契約画面が開きます。



SiteScope の使用許諾契約を確認します。

SiteScope をインストールするには、[ライセンス契約の条項に同意します] を選択して、[次へ] をクリックくします。

## 7 [製品のカスタマイズ] 画面で、SiteScope セットアップの種類を選択します。



- **HP SiteScope:** 標準の SiteScope です。
- **HP SiteScope Failover Manager。** この設定タイプでは、SiteScope サーバに障害が発生した場合、インフラストラクチャの可用性を監視するバックアップとして SiteScope Failover Manager を使用できます。
- **HP SiteScope for Load Testing:** HP LoadRunner または HP Performance Center をインストールする場合のみ使用できます。このオプションを選択した場合、ユーザは LoadRunner または Performance Center アプリケーションで SiteScope モニタを定義し、使用できます。SiteScope は、ネイティブの LoadRunner および Performance Center モニタを補足する追加の監視機能を提供します。詳細については、該当する LoadRunner または Performance Center のドキュメントを参照してください。

---

**注:** Solaris または Linux プラットフォームにインストールする場合は、このインストール・オプションを使用できません。

---

- ▶ **HP System Health**。この設定タイプは、HP Business Service Management インストールに限って使用されます。設定を確認および Business Service Management インストールのシステム状況を保証するために SiteScope 監視システムを使用します。詳細については、HP Business Service Management 文書ライブラリの『Platform Administration』（英語版）の「System Health」を参照してください。

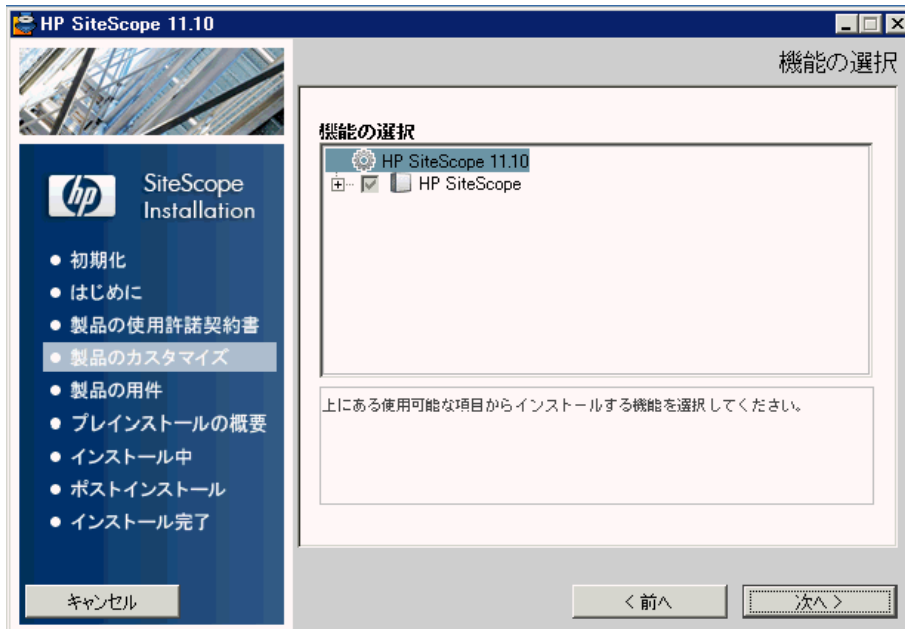
---

**注：**Solaris または Linux プラットフォームにインストールする場合は、このインストール・オプションを使用できません。

---

[次へ] をクリックして次に進みます。

- 8 [機能の選択] 画面が開き、HP SiteScope フォルダが表示されます。

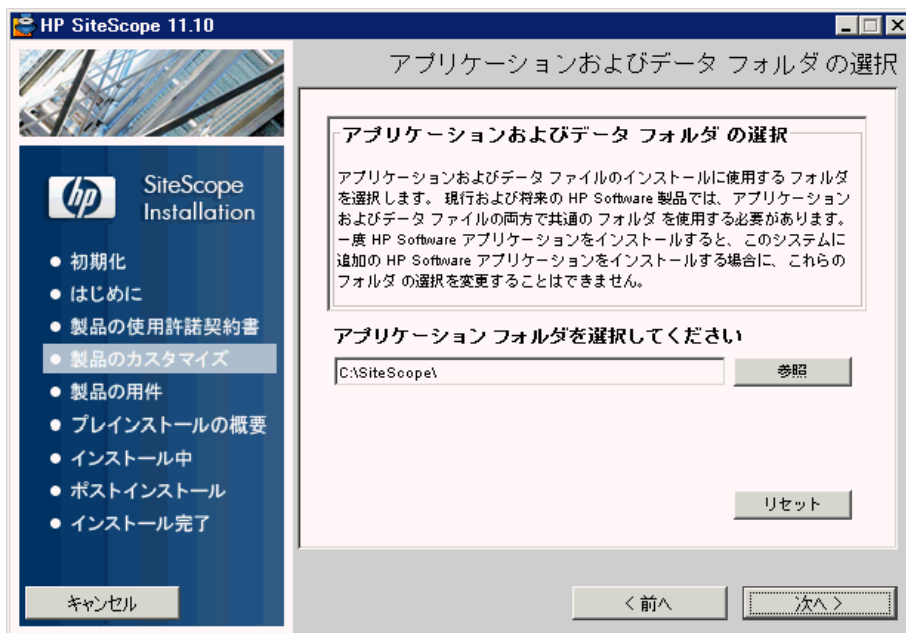


[次へ] をクリックして次に進みます。



- 9 Solaris または Linux プラットフォームにインストールする場合、SiteScope は `/opt/HP/SiteScope/` フォルダに自動的にインストールされます。手順 10 (107 ページ) に進みます。

[アプリケーションおよびデータ フォルダの選択] 画面が開きます。



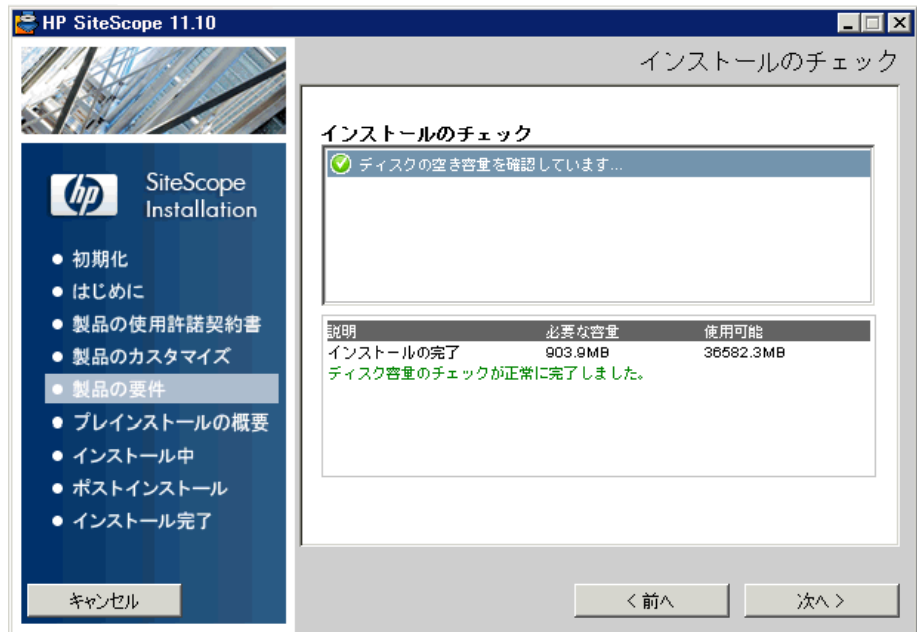
標準設定のディレクトリを受け入れるか、[参照] をクリックして別のディレクトリを選択します。別のディレクトリを選択した場合、インストール・パスの名前にスペースやラテン文字以外の文字を含めないでください。また、パス名は **SiteScope** というフォルダ名（大文字と小文字が区別されます）で終了していなければなりません。標準設定のインストール・パスを復元するには、[リセット] をクリックします。

**SiteScope Failover Manager を使用する場合の注意** : SiteScope Failover Manager を使用して、バックアップ監視を有効にする場合は、共有リソースに SiteScope をインストールする必要があります。

- ▶ Windows の場合は、SiteScope installation フォルダの UNC パスを使用して SiteScope をインストールする必要があります。たとえば、`¥¥lab1¥users¥SiteScopes¥Version_11.0¥Build_2000¥SiteScope` を使用します。
  - ▶ Linux または Solaris の場合は、`/opt/HP/SiteScope` フォルダに共有リソースをマウントする必要があります。
- 

[[次へ](#)] をクリックして次に進みます。

- 10 [インストールのチェック] 画面が開いて、検証が実行されます。



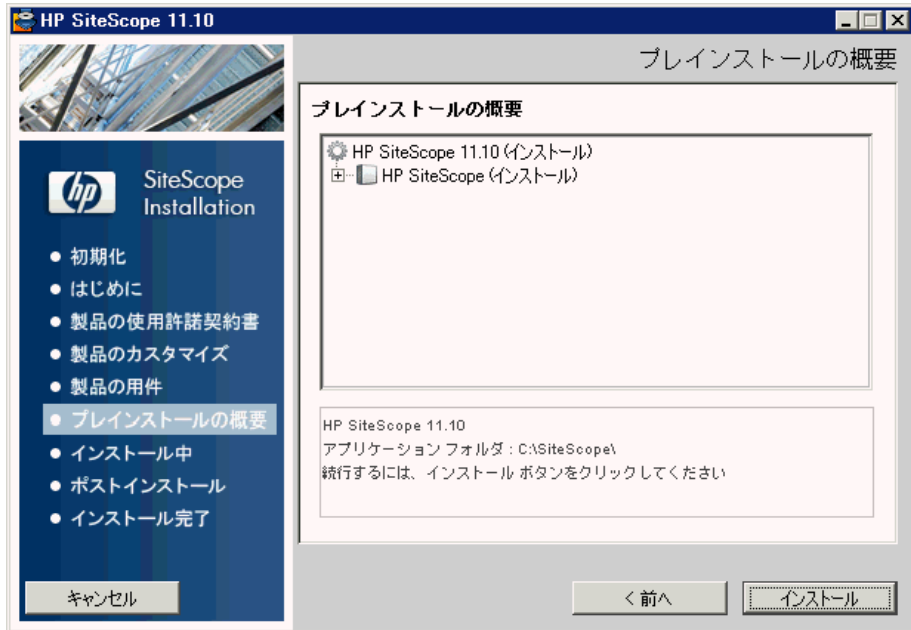
空きディスク容量の検証が正常に完了したら、[次へ] をクリックします。

空きディスク容量の検証に失敗した場合は、次の手順で行います。

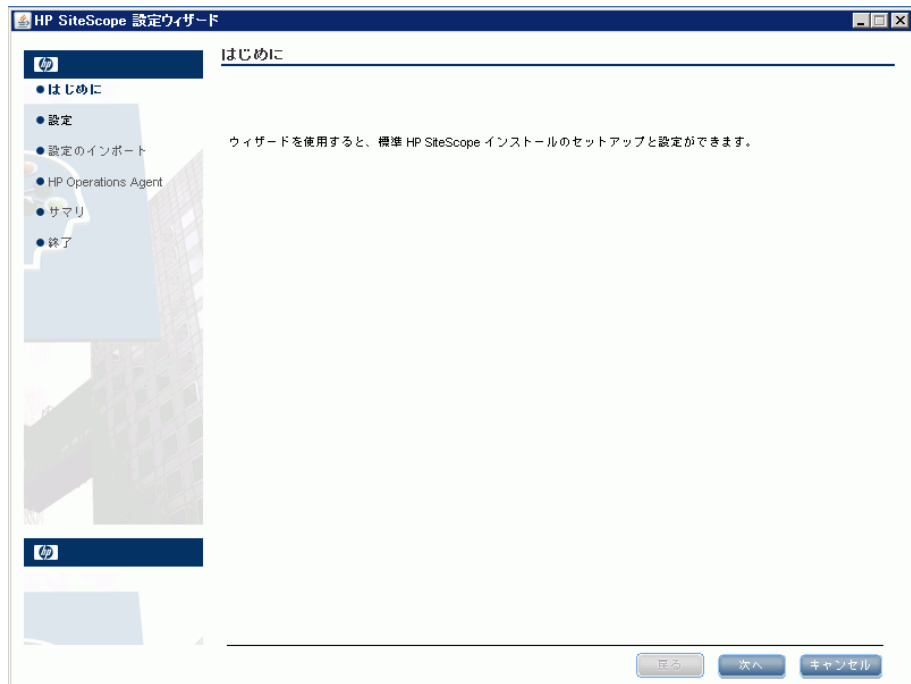
- ▶ Windows のディスクのクリーンアップ・ユーティリティなどを使用して、ディスク領域を開放します。
- ▶ 手順 9 および 10 を繰り返します。

11 [プレインストールの概要] 画面で、[インストール] をクリックします。

必要な SiteScope ソフトウェア・コンポーネントが選択されて、インストールされます。インストール中は、各ソフトウェア・コンポーネントおよびインストールの進行状況が画面に表示されます。



- 12 SiteScope コンポーネントのインストールが終了すると、SiteScope 設定ウィザードの [はじめに] 画面が開きます。



[次へ] をクリックします。

13 SiteScope 設定ウィザードの [設定] 画面が開きます。



必要な設定情報を入力し、[次へ] をクリックします。

- ▶ **ポート:** SiteScope のポート番号。指定したポート番号が使用中の場合（エラー・メッセージが表示される場合）は、別のポートを入力します。必要に応じて、後で設定ツールを使用してポートを変更できます。標準設定では、ポート 8080 です。

---

**注:** 単一のフェイルオーバー・マシンから SiteScope Failover Manager を使用して複数のプライマリ SiteScope を監視する予定の場合は、各プライマリ SiteScope インストールを一意のポート番号で応答するように設定する必要があります。SiteScope サーバで使用されるポートを確認するには、SiteScope 設定ウィザードを使用します。詳細については、135 ページ「Windows プラットフォームでの設定ツールの実行」を参照してください。

---

- ▶ **ライセンス・ファイル:** ライセンス・ファイルのパスを入力するか、[選択] をクリックして SiteScope ライセンス・キー・ファイルを選択します。60 日間のトライアル期間以降も SiteScope を使用する場合は、ライセンスを購入する必要があります。試用期間中に SiteScope を使用する場合は、この時点でライセンス情報を入力する必要はありません。

---

**注:** 11.00 以前のバージョンの SiteScope のライセンス・キーは、現在のバージョンと互換性がありません。ライセンス・キーの配信を <http://webware.hp.com>（英語サイト）から自動的に実行できます。

---

- ▶ **ローカル システム アカウントを使用** (Solaris または Linux インストールでは無効): インストール時の標準設定では、SiteScope は **Local System account** として実行されるように設定されています。このアカウントはローカル・コンピュータに対する広範な権限を保持していて、ほとんどのシステム・オブジェクトにアクセスできます。SiteScope をローカル・システム・アカウントで実行している場合、サーバの名前を使用してリモート・サーバへの接続が試みられます。

- ▶ **このアカウントを使用** (Solaris または Linux インストールでは無効) : SiteScope サービスのユーザ・アカウントを変更する場合に選択します。SiteScope サービスを、ドメイン管理権限を持つユーザとしてログオンするように設定できます。これにより、SiteScope にドメイン内のサーバ・データを監視するためのアクセス権限が付与されます。リモート・サーバにアクセスできるアカウントおよびパスワードを入力し、確認のためにパスワードを再入力します。

---

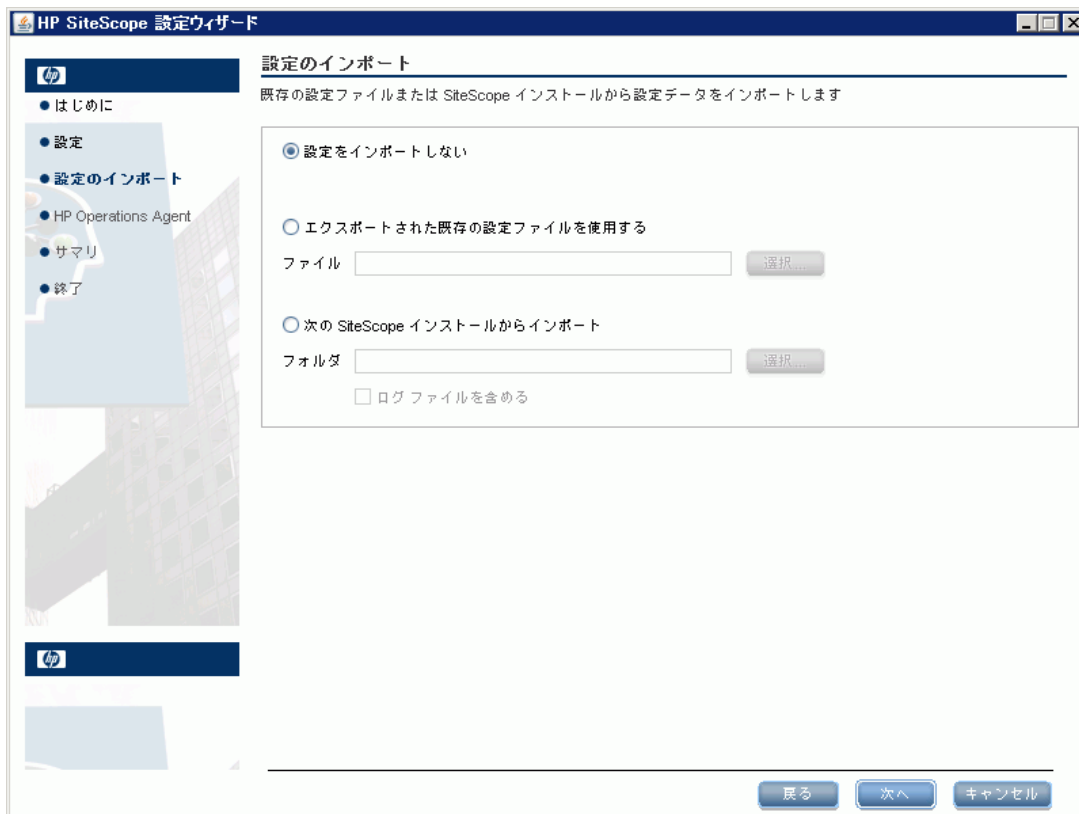
**注 :** SiteScope がインストールされ、カスタム・ユーザ・アカウントとして実行するように設定されている場合、使用するアカウントには**サービスとしてログオン**権限が必要です。ユーザにログオン・サービスへのアクセス権を付与するには、次の手順で行います。

1. Windows の [コントロール パネル] で、[**管理ツール**] をダブルクリックします。
2. [**ローカル セキュリティ ポリシー**] をダブルクリックし、[**ローカル ポリシー**] > [**ユーザ権利の割り当て**] > [**サービスとしてログオン**] を選択します。
3. [**ユーザーまたはグループの追加**] をクリックして、ログオン・サービス・アクセス権を付与するユーザを選択して、[**OK**] をクリックします。
4. [**OK**] をクリックして、更新されたポリシーを保存します。

- 
- ▶ **サービス名** (Solaris または Linux インストールでは無効) : SiteScope サービスの名前。マシンに以前のバージョンの SiteScope がインストールされている場合は、SiteScope サービスに別の名前を入力します。標準のサービス名は SiteScope です。
  - ▶ **インストール後に SiteScope サービスを開始する** (Solaris または Linux インストールでは無効) : インストールが完了すると、SiteScope サービスは自動的に起動します。



- 14 [設定のインポート] 画面が開き、既存の SiteScope 設定データを新しい SiteScope にインポートできるようになります。



次のいずれかのオプションを選択し、[次へ] をクリックします。

- ▶ **設定をインポートしない**
- ▶ **エクスポートされた既存の設定ファイルを使用する** : エクスポートされた既存の設定ファイルにある、テンプレート、ログ、モニタ設定ファイルなどの SiteScope データを使用できます。SiteScope データは設定ツールを使用してエクスポートされ、ZIP 形式で保存されます。[選択] ボタンをクリックし、インポートするユーザ・データ・ファイルに移動します。

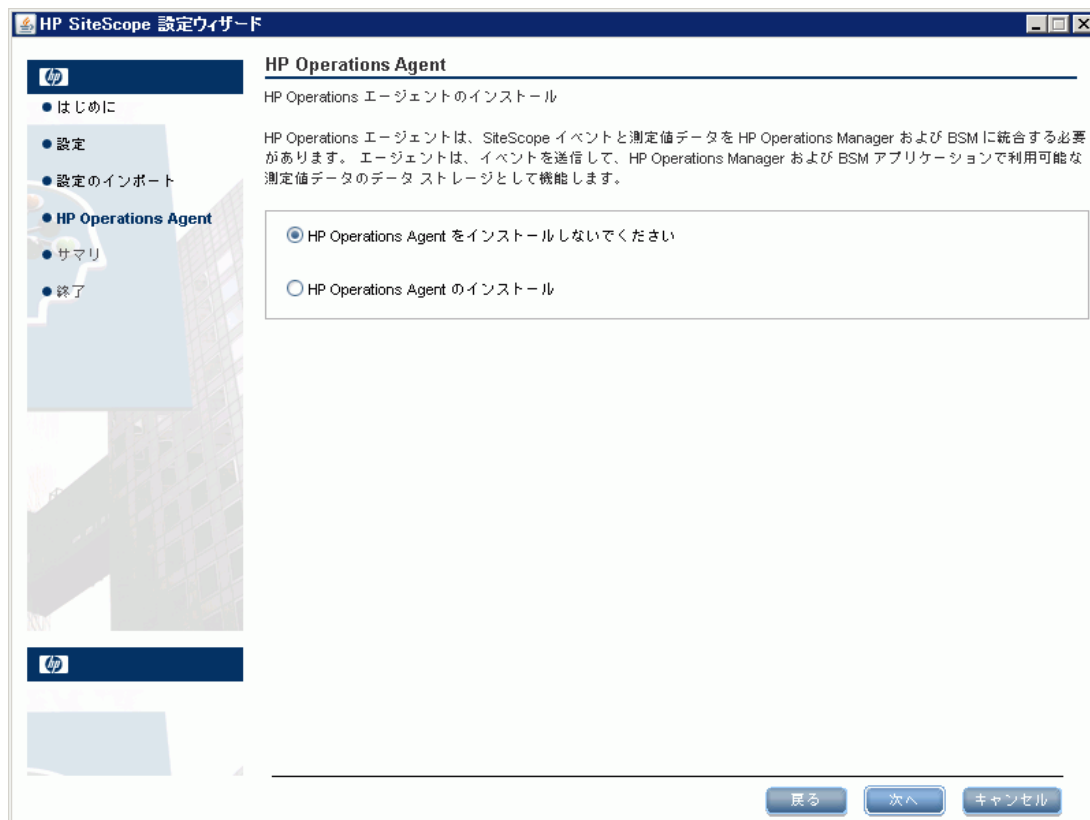
- ▶ **次の SiteScope インストールからインポート:** [選択] ボタンをクリックして、設定データのインポート元の SiteScope インストール・フォルダに移動します。
- ▶ **ログ ファイルを含める:** 選択した SiteScope インストール・フォルダからログ・ファイルをインポートできるようになります。

---

**注:** SiteScope 間で設定データを移動する場合は、設定データの取得元の SiteScope サーバが、データ・インポート先の SiteScope サーバと同じタイム・ゾーン内にあることを確認してください。

---

- 15 [HP Operations Agent] 画面が開きます。イベントおよび測定値を HP Operations Manager または BSM ゲートウェイ・サーバに送信するように SiteScope が統合されている場合は、HP Operations Agent が必要です。



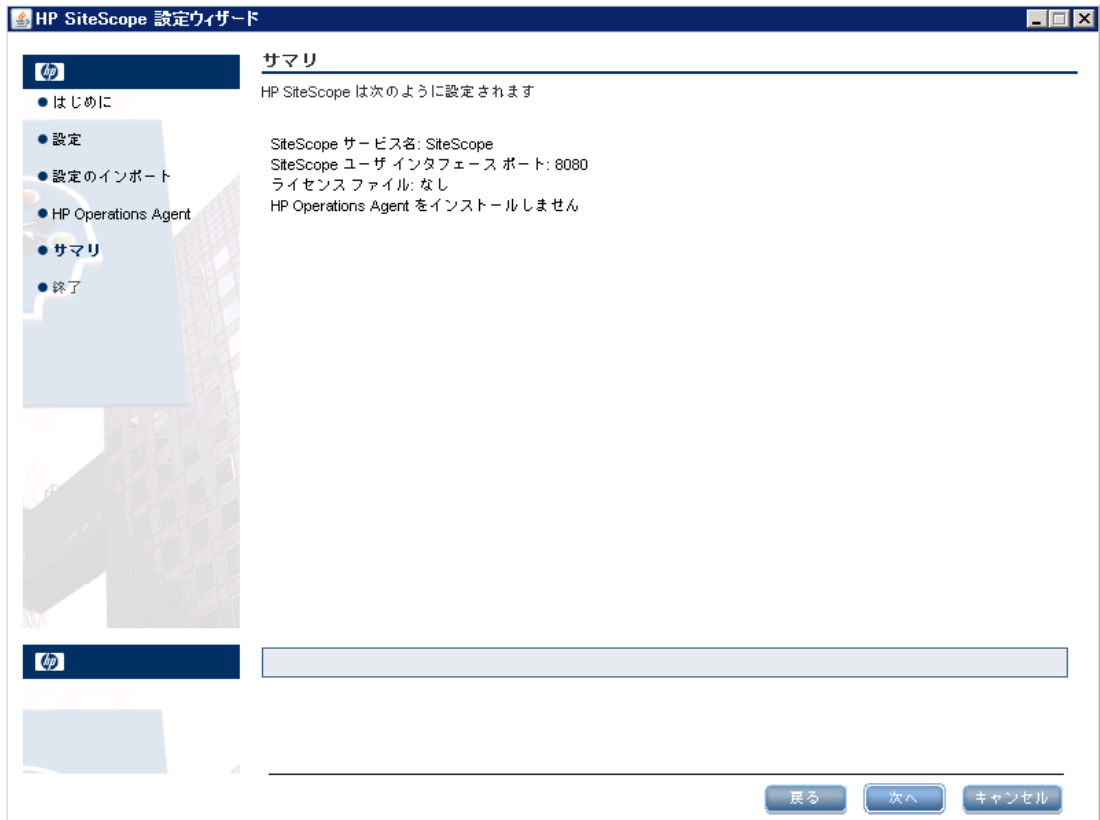
次のいずれかのオプションを選択し、[次へ] をクリックします。

- ▶ **HP Operations Agent をインストールしないでください:** HP Operations Agent はインストールされません。
- ▶ **HP Operations Agent のインストール:** SiteScope サーバに HP Operations Agent をインストールする場合に選択します。HP Operations Agent を使用すると、SiteScope が HP Operations Manager または BSM ゲートウェイ・サーバと統合されている場合に、イベントを送信し、測定値データのデータ・ストレージとして機能するように SiteScope を設定できます。

**注：**

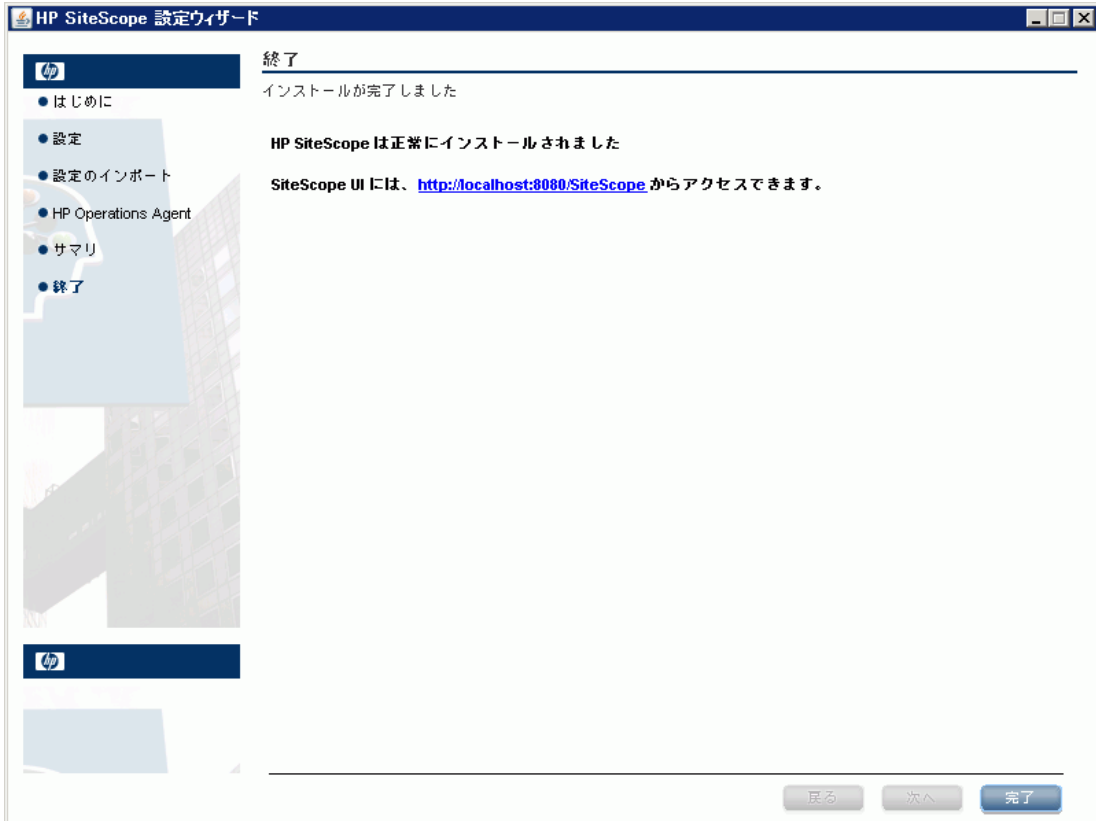
- ▶ HP Operations Agent がすでにインストールされているマシンに SiteScope およびこのエージェントをインストールすると、SiteScope は現在のエージェントをアップグレードして上書きします。
  - ▶ HP Operations Agent は、リリース・ノートの HP SiteScope Support Matrices セクション (SiteScope で、**[ヘルプ]** > **[新機能]** を選択) にリストされている環境で動作する SiteScope でサポートされます。したがって、SiteScope と HP Operations Agent や BSM との統合は、これらの環境でのみサポートされています。
  - ▶ 32 ビット Windows マシンに HP Operations Agent をインストールする際に問題が発生する場合は、129 ページ「トラブルシューティングおよび制限事項」を参照してください。
-

16 [サマリ] 画面が開きます。



情報が正しいことを確認し、**[次へ]** をクリックして次に進みます。選択内容を変更するには、**[戻る]** をクリックして前の画面に戻ります。

17 [終了] 画面が開きます。



SiteScope ユーザ インタフェース にアクセスするには、現在の SiteScope の接続アドレスをクリックします。

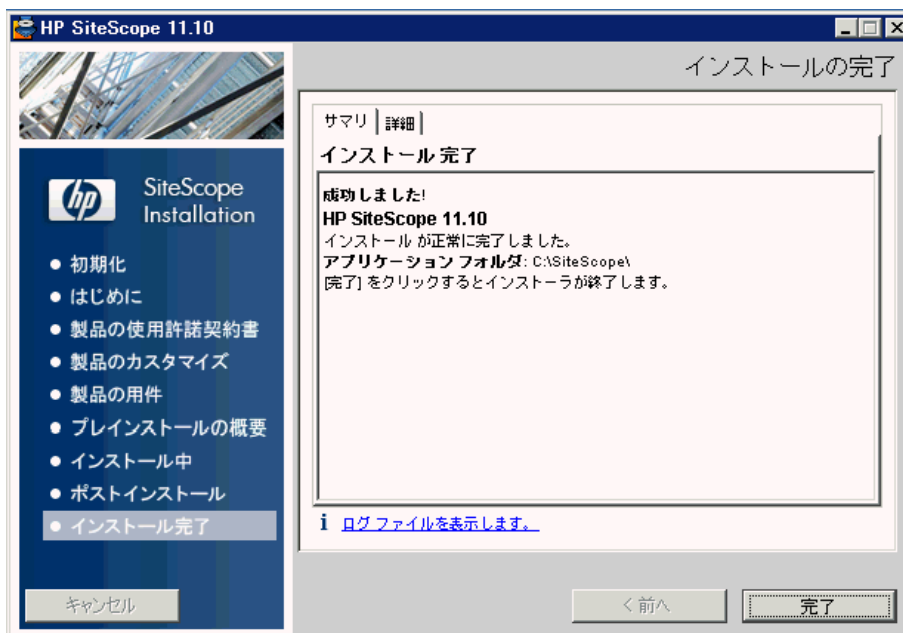
---

**注：**構成設定画面で「インストール後に SiteScope サービスを開始する」を選択しなかった場合は、SiteScope サービスを起動してから、SiteScope に接続する必要があります。詳細については、227 ページ「SiteScope を使った作業の開始」を参照してください。

---

[完了] をクリックして、SiteScope 設定ウィザードを閉じます。

- 18 インストールが終了したら、[インストールの完了] ウィンドウが開き、使用したインストール・パスおよびインストール・ステータスのサマリが表示されます。



インストールに失敗した場合は、[インストールの完了] ウィンドウの [**ログファイルを表示します**] リンクをクリックして Web ブラウザでログ・ファイルを表示し、インストール・ログ・ファイルにエラーがないか確認します。

インストールされたパッケージの詳細については、[**詳細**] タブをクリックしてください。

インストール・プログラムを閉じる場合は、[**完了**] をクリックします。

インストール・プログラムがサーバを再起動する必要があると判断した場合は、サーバを再起動するように求められます。

- 19 利用可能な最新機能については、インストールした SiteScope と同じ場所から、最新の SiteScope サービス・パックをダウンロードしてインストールしてください。SiteScope インタフェースへのアクセスの詳細については、229 ページ「SiteScope への接続」を参照してください。

- 20** Linux または Solaris 環境に SiteScope をインストールした場合は、SiteScope インストール・ディレクトリに権限を設定して、SiteScope アプリケーションを実行するために使用されるユーザ・アカウントに対して、読み込み、書き込み、および実行の権限を付与します。これらの権限は、SiteScope インストール・ディレクトリに含まれるすべてのサブディレクトリに対して設定する必要があります。

## **X11 サーバがインストールされていないマシンへのインストール・ウィザードを使用した SiteScope のインストール**

以下のいずれかで、X11 サーバがインストールされていないマシンにインストール・ウィザードを使用して SiteScope をインストールできます。

- ▶ VNC サーバを使用する (多くの Linux および Solaris システムで、VNC サーバは標準設定でインストールされている)
- ▶ DISPLAY 環境変数を編集して、別のマシンの X サーバを使用するようにプログラムを設定する

**VNC サーバを使用して、X11 がインストールされていないマシンに SiteScope をインストールするには、次の手順で行います。**

- 1** コマンド・ラインで `vncserver` を実行します。プログラムが起動したら、パスワードを選択し、VNC サーバで使用されるディスプレイ (通常は:1) を選択します。
- 2** 以下のフォーマットを使用し、VNC クライアントから SiteScope マシンに接続します。その際は、`hostname:display` の形式を使用します。たとえば、`sitescope.company.name:1` と入力します。
- 3** 表示されるコンソールで SiteScope インストール・ディレクトリに移動して、通常どおりにインストールを実行します。

**X をリダイレクトして、X11 がインストールされていないマシンに SiteScope をインストールするには、次の手順で行います。**

- 1** X サーバがインストールされた Linux または Solaris システムを実行するか、Windows に X サーバをインストールします (`xming` など)。
- 2** X アクセス制御によって、SiteScope が接続できることを確認します。Linux または Solaris プラットフォームの場合は、`man xhost` を実行してマニュアルを参照してください。Windows プラットフォームの場合は、X サーバの実装に関するドキュメントを参照してください。
- 3** SiteScope マシンで `export DISPLAY=x-server.machine.name:display` を実行します (`display` は通常 0)。
- 4** 同じシェル内の SiteScope インストール・ディレクトリに移動して、通常どおりインストールを実行します。



## コンソール・モードを使用した Solaris または Linux へのインストール

SiteScope は、コマンド・ラインまたはコンソール・モードを使用してインストールできます。SiteScope をリモート・サーバにインストールする場合、または、ユーザ・インタフェースを使用してインストール・オプションを使用できない何らかの理由がある場合は、このオプションを使用します。

**コンソール・モードを使用して Solaris または Linux に SiteScope をインストールするには、次の手順で行います。**

- 1 SiteScope をインストールするマシンに SiteScope セットアップ・ファイルをダウンロードします。

または、SiteScope のインストールに使用するユーザ・アカウントがアクセス可能なディスクまたはネットワーク上の場所に SiteScope セットアップ・ファイルをコピーします。

- 2 次のコマンドを実行します。

```
HPSiteScope_11.10_setup.bin -i console
```

インストール・スクリプトによって、Java 仮想マシンが初期化されて、インストールが開始されます。

- 3 ロケールの選択画面が表示されます。

```
Preparing to install...
Extracting the JRE from the installer archive...
Unpacking the JRE...
Extracting the installation resources from the installer archive...
Configuring the installer for this system's environment...
Preparing CONSOLE Mode Installation...

=====
Choose Locale...
-----

    1- English
    ->2- 日本語

CHOOSE LOCALE BY NUMBER: █
```

2 を入力して日本語を選択し、ENTER キーを押して続行します。

- 4 確認画面が表示されます。

ENTER キーを押して続行します。

- 5 [はじめに] 画面が表示されます。

```
はじめに
----

次のソフトウェアのインストールへようこそ :HP SiteScope 11.10
HP Software インストーラがインストールの案内をします。このインストールを続ける
前に、すべてのプログラムを終了することを強くお勧めします。

アプリケーション メディアの場所 : /doc/HPSiteScope_v11.1_linux/packages/
インストール ログ ファイル : /tmp/HPOvInstaller/HPSiteScope_11.10/HPSiteScope_11
.10_2011.04
.09_04_02 HPOvInstallerLog.txt
それぞれの指示に従いながら、インストールの次のステップに進みます。
If you want to change something on a previous step, type 'back'.
You may cancel this installation at any time by typing 'quit'.

Enter キーを押すと続行: █
```

ENTER キーを押して、インストールを続けます。

- 6 使用許諾契約のテキストが表示されます。SiteScope 使用許諾契約は、数ページにわたって表示されます。表示される各ページを確認してください。次のページに進むには、ENTER キーを押します。使用許諾契約のすべてのページを確認したら、使用許諾契約に同意するか同意しないかを指定します。

```
ライセンス契約の条項に同意します。 (Y/N): Y
```

SiteScope をインストールするには、使用許諾契約に同意する必要があります。標準設定の選択は、使用許諾契約に同意しないになっています。使用許諾契約に同意して、インストールを続行する場合は、Y を入力します。

---

**注** : SiteScope 使用許諾契約を読んだ後にインストールをキャンセルする場合は、N を入力します。

---

7 SiteScope のセットアップの種類を選択する画面が開きます。

```
->1- HP SiteScope: ()
  2- HP SiteScope Failover Manager: ()

以下のいずれかのグループを選択してください...: 1
```

使用に適した種類を選択します。セットアップの種類番号を入力し、ENTER キーを押して続行します。

8 [機能の選択] 画面が開きます。

```
機能の選択
-----

インストール機能は、機能のグループを表します。
If you want to change something on a previous step, type 'back'.
You may cancel this installation at any time by typing 'quit'.

->1- HP SiteScope (Required)

機能を選択してください（コンマで選択肢を仕切る）: █
```

1 (必須) を入力して、SiteScope をインストールします。

ENTER キーを押して、インストールを続けます。

9 [インストール要件のチェック] 画面が開きます。

```
インストール要件のチェック
-----

確認中 : ディスクの空き容量を確認しています... [完了]

チェックを実行しています...
詳細 : チェックを実行しています... お待ちください
チェック要件のインストールが正常に完了しました。
If you want to change something on a previous step, type 'back'.
You may cancel this installation at any time by typing 'quit'.

続行するには Enter キーを押してください。: █
```

ENTER キーを押して、インストールを続けます。

- 10 [プレインストールの概要] 画面が開きます。

```
アプリケーション名
  HP SiteScope

アプリケーションの簡略名
  HPSiteScope

アプリケーション リビジョン
  11.10

アプリケーション ディレクトリ
  /opt/HP/SiteScope/

データ ディレクトリ
  /var/opt/HP/SiteScope/

If you want to change something on a previous step, type 'back'.
You may cancel this installation at any time by typing 'quit'.

Enter キーを押すと 続行: █
```

ENTER キーを押して、インストールを続けます。

- 11 [インストール機能] 画面が開き、インストール・プロセスが開始されます。

```
インストール 機能
-----

パッケージの状態をチェックしています。

選択されたパッケージのインストールの状態をチェックしています。

Processing of 6 packages (Using Native rpm) scheduled.
Completed checking the installation status of all packages.
この処理にはしばらく時間がかかる場合があります。処理を中断しないでください...
```

インストール・プロセスが完了すると、インストール後の設定画面が表示されます。

- 12 ポートに関するプロンプトが表示されます。

```
Installing...
-----
[=====|=====|=====|=====]
[-----|-----|-----|-----]
: =====
==
-----
HP SiteScope ポート 番号を入力してください
ポート [8080]
PRESS <1> to accept the value [8080], or <2> to change the value
|
```

1 を入力して、標準設定のポート 8080 を受け入れるか、または 2 を入力してポートを変更し、ポート変更を求めるプロンプトで別の番号を入力します。

---

**注：**単一のフェイルオーバー・マシンから SiteScope Failover Manager を使用して複数のプライマリ SiteScope を監視する予定の場合は、各プライマリ SiteScope インストールを一意のポート番号で応答するように設定する必要があります。SiteScope サーバで使用されるポートを確認するには、SiteScope 設定ウィザードを使用します。詳細については、143 ページ「Solaris または Linux プラットフォームでの設定ツールの実行」を参照してください。

---

ENTER キーを押して、インストールを続けます。

- 13** ライセンス・ファイル・パスを求めるプロンプトが表示されます。

```
ライセンス ファイルのパスを入力してください  
ファイル名 []  
PRESS <1> to accept the value [], or <2> to change the value  
1  
: -----
```

1 を入力して、ライセンス・ファイル・パスを空のまま残すか（この時点でライセンス情報を入力しなくても、無料の評価期間中は SiteScope を使用できる）、または 2 を入力して、次のテキスト・ボックスにライセンス・ファイルのパスを入力します。

---

**注：**以前のバージョンの SiteScope のライセンス・キーは、現在のバージョンと互換性がありません。ライセンス・キーの配信を <http://webware.hp.com>（英語サイト）から自動的に実行できます。

---

ENTER キーを押して、インストールを続けます。

- 14** 設定データのインポート画面が開きます。

```
: -----  
既存の設定ファイルまたは SiteScope インストールから設定データをインポートします  
->1 - インポートしません: ()  
  2 - ファイルからインポートします: ()  
  3 - フォルダからインポートします: ()  
1
```

データをインポートしない場合は、1 を入力します。

エクスポートされた既存の設定ファイルから、テンプレート、ログ、モニタ設定ファイルなどの SiteScope データを使用する場合は、2 を入力します。このオプションを選択した場合は、次のテキスト・ボックスに設定ファイルのパスを入力します。

SiteScope インストール・ディレクトリから設定データをインポートする場合は、3 を入力します。このオプションを選択した場合は、設定データのインポート元の SiteScope インストール・フォルダのパスを入力します。

ENTER キーを押して、インストールを続けます。

---

**注：** SiteScope 間で設定データを移動する場合は、設定データの取得元の SiteScope サーバが、データ・インポート先の SiteScope サーバと同じタイム・ゾーン内にあることを確認してください。

---

**15** [HP Operations Agent のインストール] 画面が開きます。

```
HP Operations Agent のインストール
->1 - インストールしないでください: ()
   2 - インストール: ()
1
:
```

HP Operations Agent をインストールしない場合は、1 を入力します。

SiteScope サーバに HP Operations Agent をインストールする場合は、2 を入力します。SiteScope が HP Operations Manager または BSM ゲートウェイ・サーバと統合されている場合に、イベントを送信し、測定値データのデータ・ストレージとして機能するように SiteScope を設定するには、このエージェントが必要になります。

---

**注：**

- ▶ HP Operations Agent がすでにインストールされているマシンに SiteScope およびこのエージェントをインストールすると、SiteScope は現在のエージェントをアップグレードして上書きします。
- ▶ HP Operations Agent は、リリース・ノートの HP SiteScope Support Matrices セクション (SiteScope で、**[ヘルプ]** > **[新機能]** を選択) にリストされている環境で動作する SiteScope でサポートされます。したがって、SiteScope と HP Operations Agent や BSM との統合は、これらの環境でのみサポートされています。

---

ENTER キーを押して、インストールを続けます。

- 16 確認のためのインストール・パラメータがコンソールに表示されます。

```
HP SiteScope は次のように設定されます
SiteScope ユーザ インタフェース ポート : 8080
ライセンス ファイル : none
HP Operations Agent をインストールしません
Press <1> to continue, or <2> to change values:
```

指定したパラメータを使用してインストールを続ける場合は 1 を入力し、前のダイアログに戻って変更する場合は 2 を入力して、ENTER キーを押します。

インストール・プロセスが開始されます。インストールのステータス・メッセージが表示されます。

```
インストール 完了
-----
成功しました！
HP SiteScope 11.10
インストール が正常に完了しました。
アプリケーションディレクトリ : /opt/HP/SiteScope/
```

- 17 SiteScope のインストール後、SiteScope インストール・ディレクトリに権限を設定して、SiteScope アプリケーションを実行するために使用されるユーザ・アカウントに対して、読み込み、書き込み、および実行の権限を付与します。これらの権限は、SiteScope インストール・ディレクトリに含まれるすべてのサブディレクトリに対して設定する必要があります。
- 18 SiteScope へ接続するには、229 ページ「Solaris および Linux プラットフォームでの SiteScope プロセスの開始と停止」の手順に従います。



## トラブルシューティングおよび制限事項

本項では、SiteScope のインストールに関するトラブルシューティングおよび制限事項について説明します。

- ▶ 129 ページ「コンソール・モードで Linux Red Hat 64 に SiteScope をインストールできないことがある」
- ▶ 129 ページ「グラフィック・モードで 64 ビット Linux に SiteScope がインストールされない」
- ▶ 129 ページ「SiteScope が 64 ビットの Microsoft Windows Server 2003 にインストールされている場合は、SiteScope サービスはインストールされません。」
- ▶ 130 ページ「%TEMP% および %TMP% が空き領域を含むディレクトリをポイントする場合、SiteScope は Windows にインストールできない場合があります。」
- ▶ 130 ページ「HP Operations Agent が 32 ビット Windows にインストールされない」
- ▶ 131 ページ「SiteScope のアンインストール後に SiteScope をインストールできない」
- ▶ 131 ページ「UNC パスを使用している場合に HP Operations Agent をインストールできない」

### コンソール・モードで Linux Red Hat 64 に SiteScope をインストールできないことがある

開いている X セッション数が多すぎる場合、コンソール・モードを使用して Linux Red Hat 64 ビット環境に SiteScope をインストールできないことがあります。

**回避策:** 一部の X セッションを閉じるか、DISPLAY 変数の設定を解除します。

### グラフィック・モードで 64 ビット Linux に SiteScope がインストールされない

インストール・ウィザードを使用している場合、Linux Red Hat 64 ビット環境で SiteScope インストーラが機能しないことがあります。

**回避策:** 代わりにコンソール・モードを使用して、SiteScope をインストールします。

### SiteScope が 64 ビットの Microsoft Windows Server 2003 にインストールされている場合は、SiteScope サービスはインストールされません。

McAfee Antivirus が実行中の 64 ビットの Microsoft Windows Server 2003 には SiteScope サービスをインストールできません。

**回避策:** McAfee Antivirus ソフトウェアをシャットダウンして、SiteScope を再インストールします。

**%TEMP% および %TMP% が空き領域を含むディレクトリをポイントする場合、SiteScope は Windows にインストールできない場合があります。**

環境変数 %TEMP% および %TMP% が空き領域を含むディレクトリをポイントする場合、Microsoft Windows のマシンへの SiteScope をインストールは失敗します。例 :C:¥Documents and Settings¥Default User¥Local Settings¥Temp。

**回避策:** 環境変数 %TEMP% および %TMP% を、空き領域を含まないディレクトリ・パスにポイントするように変更します。例 : C:¥Temp。

**HP Operations Agent が 32 ビット Windows にインストールされない**

HP Operations Agent を 32 ビット Windows マシンにインストールできない場合は、<SiteScope のルート・ディレクトリ>¥install¥components¥oa¥win32 内のすべての .msi ファイルを元の名前に戻して（次に示すリストを参照）、HP Operations Agent を再インストールします。

たとえば、HPOvAgtEx-06.20.105-WinNT4.0-release.msi の名前を HPOvAgtEx.msi に変更します。

▶ HPOvAgtEx.msi	▶ HPOvLcja.msi
▶ HPOvBbc.msi	▶ HPOvLcko.msi
▶ HPOvConf.msi	▶ HPOvLczC.msi
▶ HPOvCtrl.msi	▶ HPOvPacc.msi
▶ HPOvDepl.msi	▶ HPOvPCO.msi
▶ HPOvEaAes.ms	▶ HPOvPerlA.msi
▶ HPOvEaAgt.msi	▶ HPOvSecCC.msi
▶ HPOvEaAja.msi	▶ HPOvSecCo.msi
▶ HPOvEaAko.msi	▶ HPOvXalanA.msi
▶ HPOvEaAzC.msi	▶ HPOvXercesA.msi
▶ HPOvLces.msi	▶ HPOvXpl.msi

**SiteScope のアンインストール後に SiteScope をインストールできない**

SiteScope のアンインストール後にインストールを実行しても、完了しないで、「Windows Scripting Host を有効にしてください」というメッセージが表示されます。この原因は、Windows が PATH 環境変数内の %SystemRoot% 変数を解決できないことです（%SystemRoot% がパスに含まれていない場合も同様）。

**回避策**：PATH 環境変数内の %SystemRoot% 変数を、C:¥Windows¥system32 の実際のパスで置き換えます。

**UNC パスを使用している場合に HP Operations Agent をインストールできない**

UNC パスを使用してリモートの場所に SiteScope をインストールする（Windows プラットフォームに SiteScope Failover Manager をインストールする場合など）場合、HP Operations Agent をインストールできません。

**回避策:**

- 1 SiteScope のインストール後に、<SiteScope のルート・ディレクトリ>¥install¥components¥oa¥win32 または ¥win64 フォルダをローカルにコピーします。
- 2 win32 または ¥win64 フォルダにある cscript opc\_inst.vbs を実行して、HP Operations Agent を手動でインストールします。



# 9

## サイレント・モードでの SiteScope のインストール

### 本章の内容

- ▶ サイレント・モードでの SiteScope のインストールについて (ページ 133)
- ▶ サイレント・インストールの実行 (ページ 134)

### サイレント・モードでの SiteScope のインストールについて

サイレント・インストールを使用して SiteScope をインストールできます。サイレント・インストールでは、セットアップ画面を移動して選択値を入力することなく、バックグラウンドですべてのセットアップ・プロセスを実行します。入力する代わりに、すべての設定パラメータには、応答ファイルで定義する値が割り当てられます。複数の異なる設定にサイレント・インストールを実行するには、複数の応答ファイルを作成します。

### 注意事項および制限事項

サイレント・インストールを実行する前に、次の点を考慮してください。

- ▶ サイレント・モードでインストールを実行する場合、メッセージはまったく表示されません。代わりに、インストールが正常に完了したかどうかなどのインストール情報が記録されたログ・ファイルを表示できます。インストール・ログ・ファイルは次の場所にあります。
  - ▶ Windows プラットフォームの場合：  
`%tmp%\HPOvInstaller\HPSiteScope_11.10`
  - ▶ Solaris プラットフォームの場合：  
`/var/tmp/HPOvInstaller/HPSiteScope_11.10`
  - ▶ Linux プラットフォームの場合：  
`/tmp/HPOvInstaller/HPSiteScope_11.10`
- ▶ SiteScope インストール・パス (`prodInstallDir=<Installation_path>`) は、その名前の部分にスペースや非ラテン文字を含めずに入力し、最後を **SiteScope** という名前のフォルダで終わらせるように指定します (フォルダ名は大文字と小文字を区別して指定する必要があります)。

## サイレント・インストールの実行

サイレント・インストールは、**oviinstallparams.ini** ファイルを使用して実行します。このファイルの形式は非常に特殊であるため、サンプル・ファイル **oviinstallparams.ini** を使用してサイレント・インストール・ファイルを作成します。

---

**注：** サンプル・ファイル **oviinstallparams.ini** は、**<SiteScope インストール・ディレクトリ> %examples%silent\_installation** フォルダから SiteScope をインストールした後にのみ使用できます。

---

**SiteScope 11.10 のサイレント・インストールを実行するには、次の手順で行います。**

- 1** **< SiteScope インストール・ディレクトリ> %examples%silent\_installation** フォルダにある **oviinstallparams.ini** ファイルに移動します。
- 2** このファイルのコピーを作成し、作成したコピーをインストールの必要性に応じて変更します。
- 3** このファイルを、**HPSiteScope\_11.10\_setup.exe** または **HPSiteScope\_11.10\_setup.bin** が存在するセットアップ・フォルダにコピーします。
- 4** コマンド・ラインから、**-i silent** フラグを指定してインストーラを実行します。たとえば、**HPSiteScope\_11.10\_setup.exe -i silent** (Windows の場合) や **HPSiteScope\_11.10\_setup.bin -i silent** (UNIX の場合) のように入力します。

---

**注：** アンインストールするには、以下のアンインストール・コマンドを実行します。**/opt/HP/SiteScope/installation/bin/uninstall.sh -i silent**

---

# 10

---

## SiteScope 設定ツールの使用

### 本章の内容

- ▶ Windows プラットフォームでの設定ツールの実行 (ページ 135)
- ▶ Solaris または Linux プラットフォームでの設定ツールの実行 (ページ 143)
- ▶ コンソール・モードでの Solaris または Linuxでの設定ツールの実行 (ページ 150)

### Windows プラットフォームでの設定ツールの実行

設定ツールは、ある SiteScope から別の SiteScope に設定データを移動するのに便利なユーティリティです。後で SiteScope にインポートするために、現在の SiteScope からテンプレート、ログ、モニタ設定ファイル、スクリプト、サーバ証明書などの SiteScope データをエクスポートできます。このウィザードを使用すると、Windows レジストリ・キーのサイズ変更による SiteScope のパフォーマンス最適化、SiteScope に割り当てられているポートの変更、および HP Operations Agent のインストールやアンインストールも実行できます。

インストール・プロセス中に SiteScope データをエクスポートした場合、設定ツールを使用してそのデータをインポートできます。または、設定ツールを使用して、インストール・プロセスの一部としてではなく独立して現在の SiteScope からデータをエクスポートすることもできます。以前のバージョンの SiteScope でモニタ設定ファイルを作成または変更した場合は、それらを現在の SiteScope ディレクトリにインポートする必要があります。

**注：**

- ▶ データをエクスポートまたはインポートする前に SiteScope サービスを停止し、データのエクスポートまたはインポートの後にサービスを再起動する必要があります。詳細については、228 ページ「Windows プラットフォームでの SiteScope サービスの開始と 停止」を参照してください。
  - ▶ SiteScope 間で設定データを移動する場合は、設定データの取得元の SiteScope サーバが、データ・インポート先の SiteScope サーバと同じタイムゾーン内にあることを確認してください。
  - ▶ 同じバージョンの SiteScope に設定をインポートする場合、新しいテンプレート例をインポートするには、すべてのテンプレート例コンテナの名前を変更するか、コンテナを削除する必要があります。
  - ▶ SiteScope 11.10 の設定ツールに、データのエクスポート時にサーバ証明書とスクリプトを含めることのサポートが追加されました。以前のバージョンの SiteScope からデータをエクスポートするときにサーバ証明書とスクリプトを含める方法については、79 ページ「既存の SiteScope インストールのアップグレード」を参照してください。
- 

**SiteScope 設定ツールを実行するには、次の手順で行います。**

- 1 SiteScope サーバで、[スタート] > [すべてのプログラム] > [HP SiteScope] > [設定ツール] を選択します。SiteScope 設定ウィザードが開きます。



## 2 実行するアクションを選択してから、[次へ] をクリックします。

### はじめに

このウィザードを使用すると、SiteScope サーバへのサイズ変更、SiteScope へ割り当てられたポートの変更、ある SiteScope から別の SiteScope への設定データの移動、HP Operations エージェントのインストール/アンインストールが可能となります。

実行するアクションを選択してください。

- サイズ変更
- ポートの変更
- 設定のインポート
- 設定のエクスポート
- HP Operation Agent

- ▶ **サイズ変更** : Windows レジストリ・キーの JVM ヒープ・サイズ、デスクトップ・ヒープ・サイズ、およびファイル・ハンドル数を増やして、SiteScope のパフォーマンス最適化を有効にします。詳細については、ステップ 3 (138 ページ) を参照してください。

**注** : JVM ヒープ・サイズへのサイズ変更は、SiteScope 32-ビットのインストールのみに関係があります。SiteScope 64 ビットのインストールでは、JVM ヒープ・サイズは手動で増やす必要があります。64 ビット・バージョンは SiteScope 32 ビット・バージョンの最大 3 倍のメモリを消費するためです。

**JVM ヒープ・サイズを増やすには、次の手順を実行します :**

1. サーバでレジストリ・エディタを開きます ([スタート] > [ファイル名を指定して実行] をクリックし `regedit` と入力)。
2. `HKEY_LOCAL_MACHINE¥System¥CurrentControlSet¥Services¥SiteScope¥serviceParam` を指定して、パラメータ `-Xmx512m` を必要に応じて `-Xmx2048m` 以上の値 (2GB の場合) に、最大 `-Xmx8192m` (8GB の場合) に増やします。
3. SiteScope を再起動します。

**注** : `<SiteScope installation>¥bin` ディレクトリで `go.bat` ファイルを実行することで SiteScope を起動する場合、`go.bat` ファイルを開き、上記のステップ 2 のように `-Xmx512m` パラメータを増やします。

- ▶ **ポートの変更** : SiteScope サーバで使用されるポートを変更できるようにします。詳細については、ステップ 4 (139 ページ) を参照してください。
  - ▶ **設定のインポート** : エクスポートされた設定データ (.zip) ファイル、または既存の SiteScope インストールから設定データをインポートできるようにします。詳細については、ステップ 5 (140 ページ) を参照してください。
  - ▶ **設定のエクスポート** : 後で SiteScope にインポートするために、現在の SiteScope からテンプレート、ログ、モニタ設定ファイルなどの SiteScope データをエクスポートできるようにします。詳細については、ステップ 6 (141 ページ) を参照してください。
  - ▶ **HP Operations Agent** : HP Operations Agent のインストールおよびアンインストールを有効にします。このエージェントを使用すると、SiteScope が HP Operations Manager または BSM ゲートウェイ・サーバと統合されている場合に、SiteScope または SiteScope Failover Manager はイベントを送信し、測定値データのデータ・ストレージとして機能できます。詳細については、ステップ 7 (142 ページ) を参照してください。
- 3 [サイズ変更]** オプションを選択した場合は、[サイズ変更] 画面が開きます。Windows レジストリのパラメーター一覧を表示する画面が開きます。

#### サイズ変更

---

[次へ] ボタンをクリックすると、レジストリ内の次のパラメータが変更されます:

1. JVM ヒープ サイズを 4096 MB へ増やす
2. デスクトップ ヒープ サイズを 8192 KB へ増やす
3. ファイル処理数を 18,000 へ増やす

Windows レジストリ・キーに次の変更を加えることで、SiteScope のパフォーマンスを最適化できます。

- ▶ **JVM ヒープ・サイズ** : 値を 512 MB から 1024 MB に変更します。JVM ヒープ・サイズの詳細については、<http://java.sun.com/j2se/1.5.0/docs/guide/vm/gc-ergonomics.html> (英語サイト) を参照してください。
- ▶ **デスクトップ・ヒープ・サイズ** : 値を 512 KB から 2048 KB に変更します。デスクトップ・ヒープ・サイズの詳細については、<http://support.microsoft.com/kb/126962> を参照してください。

- ▶ **ファイル処理数** : Microsoft Windows 2000 SP4 がマシンにインストールされている場合は、処理数を 10,000 から 18,000 に変更します。ファイル処理数の変更の詳細については、<http://support.microsoft.com/kb/326591> を参照してください。

[次へ] をクリックして、サイズ設定操作を完了します。

#### 4 [ポートの変更] オプションを選択した場合は、ポートの変更画面が開きます。

##### ポートの変更

SiteScope サーバ別に使用する任意のポートを変更できます。

他の Business Service Management 製品で使用されているポートと干渉しないよう、28000 ~ 28100 の範囲のポートの使用をお勧めします。

SiteScope ユーザ インタフェース	<input type="text" value="8080"/>
Tomcat シャットダウン	<input type="text" value="28005"/>
Tomcat AJP コネクタ	<input type="text" value="28009"/>
SSL	<input type="text" value="8443"/>
JMX コンソール	<input type="text" value="28006"/>
従来のユーザ インタフェース	<input type="text" value="8888"/>
従来のユーザ インタフェース (安...	<input type="text"/>

必要に応じて、SiteScope サーバで使用されるポートを変更します。ポート番号には、1 ~ 65534 の数字を指定する必要があります。クラシック・ユーザ・インタフェースを除くすべてのコンポーネントで、ポートは必須です。

**注** : ほかの Business Service Management 製品で使用されるポートの妨げとならないように、28000 ~ 28100 のポートを使用することをお勧めします。

[次へ] をクリックして、ポートの変更操作を完了します。

---

**注:** ポート変更操作を完了した後, [スタート] > [すべてのプログラム] > [HP SiteScope] > [HP SiteScope を開く] でポートが更新されます。

---

- 5 [設定のインポート] オプションを選択した場合は, [設定のインポート] 画面が開きます。

#### 設定のインポート

既存の設定ファイルまたは SiteScope インストールから設定データをインポートします。

対象の SiteScope を停止することをお勧めします。

エクスポートされた既存の設定ファイルを使用する  
ファイル

次の SiteScope インストールからインポート  
フォルダ

ログ ファイルを含める

---

**注:** データをインポートする前に SiteScope サービスを停止し, データのインポート後にサービスを再起動する必要があります。詳細については, 228 ページ「Windows プラットフォームでの SiteScope サービスの開始と 停止」を参照してください。

---

- ▶ [エクスポートされた既存の設定ファイルを使用する] を選択した場合は, インポートするユーザ・データの名前を入力します。
- ▶ [次の SiteScope インストールからインポート] を選択した場合は, ユーザ・データ・ファイルをインポートする SiteScope インストール・ディレクトリを入力します。ログ・ファイルもインポートする場合は, [ログ ファイルを含める] を選択します。

[次へ] をクリックして, インポート操作を完了します。

## 6 [設定のエクスポート] オプションを選択した場合は、[設定のエクスポート] 画面が開きます。

### 設定のエクスポート

既存の SiteScope から設定データをエクスポートします。

処理を行う前に SiteScope を停止することをお勧めします。

- ▶ [SiteScope フォルダから] ボックスに表示されている標準設定のディレクトリを受け入れるか、SiteScope インストール・ディレクトリの完全パスを入力します。たとえば、表示されたディレクトリ・パスを受け入れたくなく、インストール・ディレクトリのパスが `D:\$SiteScope11_0\$SiteScope` である場合は、`D:\$SiteScope11_0\$SiteScope` と入力します。
- ▶ [宛先フォルダ] に、ユーザ・データ・ファイルをエクスポートする既存のディレクトリ、およびエクスポートしたユーザ・データ・ファイルの名前を入力します。この名前は `.zip` で終わる必要があります。ログ・ファイルもエクスポートする場合は、[ログファイルを含める] を選択します。

### 注：

- ▶ データをエクスポートする前に SiteScope サービスを停止し、データのエクスポート後にサービスを再起動する必要があります。詳細については、228 ページ「Windows プラットフォームでの SiteScope サービスの開始と停止」を参照してください。
- ▶ SiteScope データのエクスポート時に `%htdocs` ディレクトリはコピーされないため、このディレクトリのバックアップを作成し、アップグレード後に SiteScope 11.10 ディレクトリにコピーして、古いレポートを参照できるようにする必要があります。

[次へ] をクリックして、エクスポート操作を完了します。

- 7 [HP Operations Agent] オプションを選択した場合は、[HP Operations Agent のインストール] または [HP Operations Agent のアンインストール] 画面が開きます。

#### HP Operations Agent

HP Operations Agent のインストール/アンインストール

HP Operations Agent は、SiteScope イベントと測定値データを HP Operations Manager および BSM に統合する必要があります。エージェントは、イベントを送信して、HP Operations Manager および BSM アプリケーションで利用可能な測定値データのデータ ストレージとして機能します。

HP Operations Agent のインストール

HP Operations Agent のアンインストール

- ▶ **HP Operations Agent のインストール** : SiteScope サーバに HP Operations Agent をインストールする場合に選択します。SiteScope が HP Operations Manager または BSM ゲートウェイ・サーバと統合されている場合に、イベントを送信し、測定値データのデータ・ストレージとして機能するように SiteScope を設定するには、このエージェントが必要になります。
- ▶ **HP Operations Agent のアンインストール** : SiteScope サーバから HP Operations Agent をアンインストールする場合に選択します。

[次へ] をクリックして、インストールおよびアンインストール操作を完了します。

---

**注** : HP Operations Agent がすでにインストールされているマシンにこのエージェントをインストールすると、SiteScope は現在のエージェントをアップグレードして上書きします。

---

8 [サマリ] 画面が開いて、設定ステータスが表示されます。

#### サマリ

設定が完了しました

設定が完了しました

[完了] をクリックして、ウィザードを閉じます。

---

**ヒント:** アップグレード後に SiteScope を起動するには、<SiteScope のルート・ディレクトリ>¥bin ディレクトリの **go.bat** ファイルを実行します。このようにすると、監視を実行するまで 15 分以上かかった場合に、SiteScope が自動起動しなくなります。

---

## Solaris または Linux プラットフォームでの設定ツールの実行

設定ツールは、ある SiteScope から別の SiteScope に設定データを移動するのに便利なユーティリティです。後で SiteScope にインポートするために、現在の SiteScope からテンプレート、ログ、モニタ設定ファイル、スクリプト、サーバ証明書などの SiteScope データをエクスポートできます。このウィザードを使用すると、SiteScope サーバで使用されるポートの変更や、HP Operations Agent のインストールやアンインストールも実行できます。

インストール・プロセス中に SiteScope データをエクスポートした場合、設定ツールを使用してそのデータをインポートできます。または、設定ツールを使用して、インストール・プロセスの一部としてではなく独立して現在の SiteScope からデータをエクスポートすることもできます。以前のバージョンの SiteScope でモニタ設定ファイルを作成または変更した場合は、それらを現在の SiteScope ディレクトリにインポートする必要があります。

---

**注：**

- ▶ また、設定ツールを **Solaris** プラットフォームまたは **Linux** プラットフォームでコンソール・モードで実行することもできます。詳細については、150 ページ「コンソール・モードでの **Solaris** または **Linux** での設定ツールの実行」を参照してください。
- ▶ **SiteScope** 間で設定データを移動する場合は、設定データの取得元の **SiteScope** サーバが、データ・インポート先の **SiteScope** サーバと同じタイム・ゾーン内にあることを確認してください。
- ▶ **SiteScope 11.10** の設定ツールに、データのエクスポート時にサーバ証明書とスクリプトを含めることのサポートが追加されました。以前のバージョンの **SiteScope** からデータをエクスポートするときにサーバ証明書とスクリプトを含める方法については、79 ページ「既存の **SiteScope** インストールのアップグレード」を参照してください。
- ▶ **SiteScope 64** ビット・バージョンは **SiteScope 32** ビット・バージョンの最大 3 倍メモリを消費します。したがって、**SiteScope 64** ビット・バージョンを使用している場合には、サーバで JVM ヒープ・サイズを手動で増やす必要があります。
  - 1). 編集用に **SiteScope/bin/start-service** ファイルを開きます。
  - 2). 最後の行で、パラメータ **-Xmx512m** を必要に応じて **-Xmx2048m** 以上の値 (2GB の場合) に、最大 **-Xmx8192m** (8GB の場合) に増やします。

---

**SiteScope 設定ツールを実行するには、次の手順で行います。**

- 1 **SiteScope** サーバで次のどちらかを実行します。
  - a グラフィックス・モードで、<**SiteScope** インストール・ディレクトリ> /bin/config\_tool.sh を実行します。
  - b コンソール・モードで、<**SiteScope** インストール・ディレクトリ> /bin/config\_tool.sh -i console を実行します。

**SiteScope** 設定ウィザードが開きます。

[次へ] をクリックします。



- 2 [はじめに] 画面で実行するアクションを選択してから、[次へ] をクリックします。

### はじめに

このウィザードを使用すると、SiteScope へ割り当てられたポートの変更、ある SiteScope から別の SiteScope への設定データの移動、HP Operations エージェントのインストール/アンインストールが可能となります。

実行するアクションを選択してください。

- ポートの変更
- 設定のインポート
- 設定のエクスポート
- HP Operation Agent

- ▶ **ポートの変更** : SiteScope サーバで使用されるポートを変更できるようにします。詳細については、ステップ 3 (146 ページ) を参照してください。
- ▶ **設定のインポート** : エクスポートされた設定データ (.zip) ファイル、または既存の SiteScope インストールから設定データをインポートできるようにします。詳細については、ステップ 5 (148 ページ) を参照してください。
- ▶ **設定のエクスポート** : 後で SiteScope にインポートするために、現在の SiteScope からテンプレート、ログ、モニタ設定ファイルなどの SiteScope データをエクスポートできるようにします。詳細については、ステップ 4 (147 ページ) を参照してください。
- ▶ **HP Operations Agent** : HP Operations Agent のインストールおよびアンインストールを有効にします。このエージェントを使用すると、SiteScope が HP Operations Manager または BSM ゲートウェイ・サーバと統合されている場合に、SiteScope または SiteScope Failover Manager はイベントを送信し、測定値データのデータ・ストレージとして機能できます。詳細については、ステップ 6 (149 ページ) を参照してください。

3 [ポートの変更] オプションを選択した場合は、ポートの変更画面が開きます。

ポートの変更

---

SiteScope サーバ別に使用する任意のポートを変更できます。

他の Business Service Management 製品で使用されているポートと干渉しないよう、28000 ~ 28100 の範囲のポートの使用をお勧めします。

SiteScope ユーザ インタフェース	<input type="text" value="8080"/>
Tomcat シャットダウン	<input type="text" value="28005"/>
Tomcat AJP コネクタ	<input type="text" value="28009"/>
SSL	<input type="text" value="8443"/>
JMX コンソール	<input type="text" value="28006"/>
従来のユーザ インタフェース	<input type="text" value="8888"/>
従来のユーザ インタフェース (安...	<input type="text"/>

必要に応じて、SiteScope サーバで使用されるポートを変更します。ポート番号には、1 ~ 65534 の数字を指定する必要があります。クラシック・ユーザ・インタフェースを除くすべてのコンポーネントで、ポートは必須です。

---

**注：**ほかの Business Service Management 製品で使用されるポートの妨げとならないように、28000 ~ 28100 のポートを使用することをお勧めします。

---

[次へ] をクリックして、ポートの変更操作を完了します。

- 4 [設定のエクスポート] オプションを選択した場合は、[設定のエクスポート] 画面が開きます。

**設定のエクスポート**

既存の SiteScope から設定データをエクスポートします。

処理を行う前に SiteScope を停止することをお勧めします。

SiteScope フォルダから

宛先フォルダ

ログ ファイルを含める

---

**注：**データをエクスポートする前に SiteScope サービスを停止し、データのエクスポート後にサービスを再起動する必要があります。詳細については、229 ページ「Solaris および Linux プラットフォームでの SiteScope プロセスの開始と停止」を参照してください。

---

- ▶ [SiteScope フォルダから]ボックスに表示されている標準設定のディレクトリを受け入れるか、SiteScope インストール・ディレクトリの完全パスを入力します。例えば、表示されたディレクトリ・パスを受け入れたくなく、インストール・ディレクトリのパスが /opt/9\_0/SiteScope である場合は、/opt/9\_0/SiteScope と入力します。
- ▶ [宛先フォルダ] に、ユーザ・データ・ファイルをエクスポートする既存のディレクトリ、およびエクスポートしたユーザ・データ・ファイルの名前を入力します。この名前は .zip で終わる必要があります。
- ▶ ログ・ファイルもエクスポートする場合は、[ログ ファイルを含める] を選択します。

[次へ] をクリックして、エクスポート操作を完了します。

- 5 [設定のインポート] オプションを選択した場合は、[設定のインポート] 画面が開きます。

#### 設定のインポート

既存の設定ファイルまたは SiteScope インストールから設定データをインポートします。

対象の SiteScope を停止することをお勧めします。

エクスポートされた既存の設定ファイルを使用する  
ファイル

次の SiteScope インストールからインポート  
フォルダ

ログ ファイルを含める

**注:** データをインポートする前に SiteScope サービスを停止し、データのインポート後にサービスを再起動する必要があります。詳細については、229 ページ「Solaris および Linux プラットフォームでの SiteScope プロセスの開始と停止」を参照してください。

- ▶ [エクスポートされた既存の設定ファイルを使用する] を選択した場合は、インポートするユーザ・データの名前を入力します。
- ▶ [次の SiteScope インストールからインポート] を選択した場合は、ユーザ・データ・ファイルをインポートする SiteScope インストール・ディレクトリを入力します。
- ▶ ログ・ファイルもインポートする場合は、[ログ ファイルを含める] を選択します。

[次へ] をクリックして、インポート操作を完了します。

## 6 [HP Operations Agent] オプションを選択した場合は、[HP Operations Agent] 画面が開きます。

### HP Operations Agent

HP Operations Agent のインストール/アンインストール

HP Operations Agent は、SiteScope イベントと測定値データを HP Operations Manager および BSM に統合する必要があります。エージェントは、イベントを送信して、HP Operations Manager および BSM アプリケーションで利用可能な測定値データのデータ ストレージとして機能します。

HP Operations Agent のインストール

HP Operations Agent のアンインストール

- ▶ **HP Operations Agent のインストール** : SiteScope サーバに HP Operations Agent をインストールする場合に選択します。SiteScope が HP Operations Manager または BSM サーバと統合されている場合に、イベントを送信し、測定値データのデータ・ストレージとして機能するように SiteScope を設定するには、このエージェントが必要になります。
- ▶ **HP Operations Agent のアンインストール** : SiteScope サーバから HP Operations Agent をアンインストールする場合に選択します。

[次へ] をクリックして、インストールおよびアンインストール操作を完了します。

---

**注** : HP Operations Agent がすでにインストールされているマシンにこのエージェントをインストールすると、SiteScope は現在のエージェントをアップグレードして上書きします。

---

## 7 [サマリ] 画面が開きます。

### サマリ

設定が完了しました

設定が完了しました

[完了] をクリックして、ウィザードを閉じます。

## コンソール・モードでの Solaris または Linux での設定ツールの実行

設定ツールは、コマンド・ラインまたはコンソール・モードを使用して実行できます。SiteScope をリモート・サーバに設定する場合、または、ユーザ・インタフェースを使用できない何らかの理由がある場合は、このオプションを使用します。

**コンソール・モードでの Solaris または Linux での設定ツールを実行するには、次の手順で行います。**

- 1 次のコマンドを実行します。

```
/bin/config_tool.sh -i console
```

- 2 設定選択画面が表示されます。

```
sh-3.2# ./config_tool.sh -i console
このウィザードを使用すると、SiteScope へ割り当てられたポートの変更、
ある SiteScope から別の SiteScope への設定データの移動、HP Operations エージェント/アンインストールが可能となります。

実行するアクションを選択してください。

-----
次のオプションのいずれかを選択してください

->1 - エクスポート : ()
   2 - インポート : ()
   3 - ポートの変更 : ()
   4 - HP Operations Agent : ()

: █
```

実行する設定アクションを選択します。

- ▶ SiteScope データをエクスポートするには、1 を入力します。
- ▶ エクスポートされた設定データ (.zip) ファイル、または既存の SiteScope インストールから設定データをインポートするには、2 を入力します。
- ▶ SiteScope サーバで使用するポートを変更するには、3 を入力します。
- ▶ HP Operations Agent をインストールまたはアンインストールするには、4 を入力します。

ENTER キーを押して続行します。

- 3 [エクスポート] オプションを選択した場合は、設定のエクスポート画面が開きます。

```

-----
次のオプションのいずれかを選択してください

->1 - エクスポート : ()
   2 - インポート : ()
   3 - ポートの変更 : ()
   4 - HP Operations Agent : ()

: 1
-----
SiteScope ソース フォルダ
フォルダ名 []
PRESS <1> to accept the value [], or <2> to change the value
2
フォルダ名:
/opt/HP/SiteScope
フォルダ名 [/opt/HP/SiteScope]:
PRESS <1> to accept the value [/opt/HP/SiteScope], or <2> to change the value
1
-----
エクスポートされた設定対象ファイル名
ファイル名 [SiteScope.zip]
PRESS <1> to accept the value [SiteScope.zip], or <2> to change the value
1
-----
設定が完了しました

```

- ▶ **SiteScope ソース・フォルダ** では、次の操作を実行します。
  - ▶ [] で指定されたデフォルト・ディレクトリを受け入れるには、1 を入力します。
  - ▶ デフォルトの値を変更するには、2 を入力し、SiteScope インストール・ディレクトのフル・パスを入力します。たとえば、表示されたディレクトリ・パスを受け入れず、インストール・ディレクトリのパスが /opt/HP/SiteScope である場合は、/opt/HP/SiteScope と入力します。
 ENTER キーを押して、インストールを続行します。
- ▶ **エクスポートされた設定対象ファイル名** では、次の操作を実行します。
  - ▶ SiteScope.zip というファイルにデータをエクスポートするには、1 を入力します。
  - ▶ エクスポートされるユーザ・データ・ファイルの名前を変更するには、2 を入力します。この名前は .zip で終わる必要があります。
 ENTER キーを押して、エクスポート操作を完了します。

- 4 [インポート] オプションを選択した場合は、設定のインポート画面が開きます。

```
-----
次のオプションのいずれかを選択してください
-----
->1 - エクスポート : ()
   2 - インポート : ()
   3 - ポートの変更 : ()
   4 - HP Operations Agent : ()

: 2
-----
既存の設定ファイルまたは SiteScope インストールから設定データをインポートします
-----
->1 - インポートしません : ()
   2 - ファイルからインポートします : ()
   3 - フォルダからインポートします : ()

: 2
-----
インポートされた設定ファイルの名前を入力してください
ファイル名 []
PRESS <1> to accept the value [], or <2> to change the value
2
ファイル名:
SiteScope.zip
ファイル名 [SiteScope.zip]:
PRESS <1> to accept the value [SiteScope.zip], or <2> to change the value
```

次のように設定データ・オプションを選択します。

- ▶ 設定データをインポートしない場合は、1を入力します。
- ▶ ファイルから設定データをインポートするには、2を入力します。このオプションを選択した場合は、次の操作を実行します。
  - ▶ [] で指定されたデフォルトのファイル名を受け入れるには、1を入力します。
  - ▶ この値を変更するには、2を入力し、設定データをインポートするファイルの名前を入力します。この名前を受け入れるには、1を入力します。
- ▶ SiteScope インストール・ディレクトリから設定データをインポートするには、3を入力します。このオプションを選択した場合は、次の操作を実行します。
  - ▶ [] で指定されたデフォルト・ディレクトリを受け入れるには、1を入力します。
  - ▶ この値を変更するには、2を入力し、ユーザ・データ・ファイルをインポートする SiteScope インストール・ディレクトリを入力します。この名前を受け入れるには、1を入力します。

ENTER キーを押して、インポート操作を完了します。



## 5 [ポートの変更] オプションを選択した場合は、ポートの変更画面が開きます。

```
: 3
-----
SiteScope ユーザ インタフェース ポート
ポート [8080]
PRESS <1> to accept the value [8080], or <2> to change the value
1
-----
Tomcat シャットダウン ポート
ポート [28005]
PRESS <1> to accept the value [28005], or <2> to change the value
1
-----
Tomcat AJP コネクタ ポート
ポート [28009]
PRESS <1> to accept the value [28009], or <2> to change the value
1
-----
SSL ポート
ポート [8443]
PRESS <1> to accept the value [8443], or <2> to change the value
1
-----
JMX コンソール ポート
ポート [28006]
PRESS <1> to accept the value [28006], or <2> to change the value
1
-----
以下のコンポーネントは、このコンポーネントのポート
```

必要に応じて、SiteScope サーバで使用されるポートを変更します。ポート番号には、1 ~ 65534 の数字を指定する必要があります。クラシック・ユーザ・インタフェースを除くすべてのコンポーネントで、ポートは必須です。

---

**注:** ほかの Business Service Management 製品で使用されるポートの妨げとならないように、28000 ~ 28100 のポートを使用することをお勧めします。

---

ENTER キーを押して、ポート変更操作を完了します。

- 6 [HP Operations Agent] オプションを選択した場合は、HP Operations Agent 画面が開きます。

```
-----  
次のオプションのいずれかを選択してください  
->1 - エクスポート : ( )  
   2 - インポート : ( )  
   3 - ポートの変更 : ( )  
   4 - HP Operations Agent : ( )  
  
: 4  
-----  
次のオプションのいずれかを選択してください  
->1 - HP Operation Agent のインストール : ( )  
   2 - HP Operation Agent のアンインストール : ( )  
  
: 1  
-----  
HP Operations Agent のインストール  
->1 - インストールしないでください : ( )  
   2 - インストール : ( )  
  
: 2  
-----  
設定が完了しました
```

次のオプションのいずれかを使用します。

- ▶ SiteScope サーバに HP Operations Agent をインストールする場合には、1 を入力します。SiteScope が HP Operations Manager または BSM ゲートウェイ・サーバと統合されている場合に、イベントを送信し、測定値データのデータ・ストレージとして機能するように SiteScope を設定するには、このエージェントが必要になります。
- ▶ SiteScope サーバから HP Operations Agent をアンインストールするには、2 を入力します。

---

**注 :** HP Operations Agent がすでにインストールされているマシンにこのエージェントをインストールすると、SiteScope は現在のエージェントをアップグレードして上書きします。

---

ENTER キーを押して、HP Operations Agent のインストールまたはアンインストール操作を完了します。

**注 :** SiteScope 64 ビット・バージョンは SiteScope 32 ビット・バージョンの最大 3 倍メモリを消費します。したがって、SiteScope 64 ビット・バージョンを使用している場合には、サーバで JVM ヒープ・サイズを手動で増やす必要があります。

- 1). 編集用に **SiteScope/bin/start-service** ファイルを開きます。
  - 2). 最後の行で、パラメータ **-Xmx512m** を必要に応じて **-Xmx2048m** 以上の値 (2GB の場合) に、最大 **-Xmx8192m** (8GB の場合) に増やします。
-



# 11

## SiteScope のサイズ設定

### 本章の内容

- ▶ SiteScope のサイズ設定について (ページ 157)
- ▶ SiteScope キャパシティ・カリキュレータ (ページ 158)
- ▶ Windows プラットフォーム上での SiteScope のサイズ設定 (ページ 160)
- ▶ Solaris および Linux プラットフォーム上での SiteScope のサイズ設定 (ページ 164)
- ▶ 注意事項と制限事項 (ページ 169)

### SiteScope のサイズ設定について

標準の SiteScope 設定では何千ものモニタを実行できますが、最適なパフォーマンスを得るには SiteScope がインストールされているサーバのサイズ設定が必要となる場合があります。設定はそれぞれ異なるため、SiteScope キャパシティ・カリキュレータを使用し、運用している SiteScope の設定がサイズ設定を必要としているかどうかを検証する必要があります。

SiteScope が稼動するサーバのサイズを正しく設定することが、監視のデプロイメントに成功する基礎となります。最適なサイズ設定を行うために、HP は次の SiteScope サーバ環境を強くお勧めします。

- ▶ SiteScope をスタンドアロン・サーバとして実行する。最良の結果を得るには、サーバ上で実行するプログラムを SiteScope のみにします。Business Service Management, BMC, LoadRunner, データベース, Web サーバなどは、SiteScope サーバにインストールしないようにしてください。
- ▶ SiteScope の 1 つのインスタンスのみを 1 つのサーバ上で実行します。1 つのサーバ上で SiteScope の複数のインスタンスを実行すると、サーバ・リソースの問題が発生する可能性があります。これには、System Health で使用される SiteScope のインスタンスが含まれます。

- ▶ SiteScope Failover Manager には、プライマリ SiteScope サーバと同様のサイズ設定が必要です。

## SiteScope キャパシティ・カリキュレータ

SiteScope には、システムの動作を予測し、SiteScope のキャパシティ・プランニングを実行するためのツールが備わっています。SiteScope を実行しているシステムの CPU とメモリの詳細、タイプ別のモニタ数、モニタの実行頻度を入力します。この入力が終わると、モニタ タイプごとの予測される CPU 使用率とメモリ使用率、特定の作業負荷に推奨されるシステム要件などがカリキュレータによって表示されます。この情報から、設定にチューニングが必要かどうかを判断できます。

---

**注：** SiteScope キャパシティ・カリキュレータは Windows 版で実行されている SiteScope のみでサポートされ、159 ページ「サポートされるモニタとソリューション・テンプレート」にリストされるモニタおよびソリューション・テンプレートに対応します。

---

**SiteScope キャパシティ・カリキュレータを使用するには、次の手順で行います。**

- 1 カリキュレータを使用する前に、SiteScope サーバでの負荷を見積もり、ハードウェア要件を判断するために本書のシステム要件と推奨事項を使用します。  
詳細については、68 ページ「システム要件」および 74 ページ「認定されている構成」を参照してください。
- 2 < SiteScope ルート・ディレクトリ > %tools を選択し、SiteScope キャパシティ・カリキュレータを開きます。
  - ▶ SiteScope 32 ビットでは：[SiteScopeCapacityCalculator\\_32\\_bit.xls](#)
  - ▶ SiteScope 64 ビットでは：[SiteScopeCapacityCalculator\\_64\\_bit.xls](#)
- 3 [Monitor Usage] タブで、[Requirements] セクションに次の情報を入力します。
  - ▶ 平均 CPU 使用率
  - ▶ CPU タイプ
  - ▶ メモリ・ヒープ・サイズ（メガバイト単位）

4 [Monitors] セクションで、各タイプのモニタの数と、各モニタの更新頻度を入力します。

5 結果と推奨事項が [Results and Recommendations] セクションに表示されます。予期された結果と実際の結果の 30 ~ 40% の相違は許容範囲とみなします。

## サポートされるモニタとソリューション・テンプレート

SiteScope キャパシティ・カリキュレータでは、次のモニタとソリューション・テンプレートがサポートされます。

<p><b>モニタ</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>▶ CPU</li> <li>▶ データベース・カウンタ</li> <li>▶ ディスク領域</li> <li>▶ DNS モニタ</li> <li>▶ ログ・ファイル・モニタ</li> <li>▶ メモリ・モニタ</li> <li>▶ Microsoft IIS サーバ・モニタ</li> <li>▶ Microsoft SQL Server モニタ</li> <li>▶ Microsoft Windows Event Log モニタ</li> <li>▶ Microsoft Windows Resources モニタ</li> <li>▶ Ping モニタ</li> <li>▶ SAP CCMS モニタ</li> <li>▶ スクリプト・モニタ</li> <li>▶ サービス・モニタ</li> <li>▶ Siebel アプリケーション・サーバ・モニタ</li> <li>▶ MIB による SNMP モニタ</li> <li>▶ URL モニタ</li> <li>▶ WebLogic アプリケーション・サーバ・モニタ</li> <li>▶ WebSphere アプリケーション・サーバ・モニタ</li> </ul>
<p><b>ソリューション・テンプレート</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>▶ Microsoft Exchange 2003 ソリューション・テンプレート</li> <li>▶ Siebel ソリューション・テンプレート</li> </ul>

## Windows プラットフォーム上での SiteScope のサイズ設定

Windows プラットフォームにインストールされている SiteScope のサイズ設定を行う場合は、SiteScope と Windows オペレーティング・システムで次のサイズ設定手順を実行する必要があります。

### 1 SiteScope をサイズ設定します。

最初に SiteScope をサイズ設定し、次の手順に進む前に少なくとも 24 時間 SiteScope を実行することをお勧めします。詳細については、161 ページ「SiteScope のサイズ設定」の手順を参照してください。

### 2 Windows オペレーティング・システムのチューニング

SiteScope をサイズ設定して少なくとも 24 時間待機したら、Windows オペレーティング・システムのチューニングを行い、その後、サイズ設定パラメータの変更を有効にするために SiteScope サーバを再起動する必要があります。詳細については、162 ページ「Microsoft Windows オペレーティング・システムのチューニング」の手順を参照してください。

### 3 一般的な保守の推奨事項

また、いくつかの一般的な保守の推奨事項に従って、最適なチューニングを行ってください。詳細については、163 ページ「一般的な保守の推奨事項」を参照してください。

---

#### 注意：

- ▶ 変更するすべてのファイルまたはパラメータのバックアップを行い、必要に応じてバックアップから復元できるようにしておくことをお勧めします。
  - ▶ 設定に効果がない場合、ファイルやパラメータをむやみに増やしたり減らしたりしないでください。詳細やトラブルシューティングについては、HP ソフトウェア・サポートにお問い合わせください。
-



## SiteScope のサイズ設定

SiteScope のサイズ設定では、本当に必要な場合にだけ、モニタが **[エラーの検証]** オプションを使用することを確認する必要があります。このオプションは、ごくわずかのモニタに使用されなければならないが、それらは、監視対象のリモート・マシンのネットワーク問題やサーバ負荷の問題によって、誤った **「データなし」** 警告を受けた履歴を持つモニタなどです。

この機能を有効にすると、失敗したモニタは、警告条件がチェックされる前にスケジューラをバイパスしてすぐに再実行されます。このような特別な実行が多数発生すると、スケジューラが大きく混乱し、SiteScope のパフォーマンスを低下させる可能性があります。接続の問題によるモニタの失敗では、そのモニタが終了する前、エラーの検証には **[接続タイムアウト]** に設定されている時間がかかる場合があります。この間、標準設定では、モニタ・スレッドと接続が 2 分間ロックされます。この遅延により、ほかのモニタの待機や、失敗したモニタのスキップが発生することがあります。

**SiteScope をサイズ設定するには、次の手順を実行します。**

- 1 モニタごとに、**[プロパティ]** タブを選択して **[モニタの実行設定]** パネルを開き、**[エラーの検証]** が選択されているかどうかを調べます。このオプションが必要でないモニタでは、チェック・ボックスをクリアします。

---

**ヒント：**複数のモニタの場合、**[グローバル検索と置換]** を使用してこのタスクを実行することをお勧めします。

---

- 2 Windows オペレーティング・システムのチューニングを行う前に、少なくとも 24 時間 SiteScope を実行します。

## Microsoft Windows オペレーティング・システムのチューニング

Microsoft Windows オペレーティング・システムのチューニングでは、設定ツールを使用していくつかのパラメータを変更する必要があります。また、いくつかの一般的な保守の推奨事項に従って、最適なチューニングを行ってください。

**Microsoft Windows オペレーティング・システムのチューニングは、次の手順で行います。**

**1** 適切な Windows Service Pack または Hotfix が SiteScope サーバにインストールされていることを確認します。

▶ Windows 2000 の場合、Service Pack 4 がインストールされている必要があります。Windows 2000 でのファイル・ハンドルの増加と Service Pack のダウンロードに関する詳細については、<http://support.microsoft.com/kb/326591/ja-jp> を参照してください。

▶ Windows XP の場合、Hotfix 327699 がインストールされている必要があります。Windows XP でのファイル・ハンドルの増加と Hotfix のダウンロードに関する詳細については、<http://support.microsoft.com/kb/327699/ja-jp> を参照してください。

**2** 設定ツールを実行し、[**サイズ変更**] オプションを選択します。

このツールにより、JVM ヒープ・サイズを 1024 MB、デスクトップ・ヒープ・サイズを 2048 KB、ファイル・ハンドルの数を 18,000 に増やします。また、SiteScope の実行可能ファイルに対する警告ポップアップを無効にします。詳細については、135 ページ「Windows プラットフォームでの設定ツールの実行」を参照してください。

---

**注：**設定ツールでサポートされるのは、標準設定の SiteScope サービス名だけです。サービス名を変更した場合は、設定ツールを実行せず、HP ソフトウェア・サポートにお問い合わせください。

---

**3** パラメータの変更を反映させるために、SiteScope サーバを再起動します。

## 一般的な保守の推奨事項

次に、Windows 上の SiteScope をサイズ設定するための一般的な保守の推奨事項について説明します。

### ▶ 適切なモニタ頻度を決定する。

モニタの実行頻度を確認し、モニタが適切な間隔で実行されていることを確認します。たとえば、ほとんどのディスク・モニタは 5 分間隔で実行する必要はありません。通常は、おそらく `/var`、`/tmp`、および `swap` 以外のすべてのボリュームについては、15 分、30 分、または 60 分間隔が適切です。モニタ頻度を小さくすることで 1 分間に稼動するモニタの数が少なくなり、パフォーマンスと処理能力が改善されます。

### ▶ グループ構造を最適化する。

グループ構造には、SiteScope の使いやすさと SiteScope のパフォーマンスの最適化を考慮してください。構造の深さを最小限に抑えるように、トップレベルのグループの数も最小限に抑えるのが理想的です。

グループ構造に 50 を超えるトップレベルのグループがある場合、またはグループ構造が 5 階層より深い場合、パフォーマンスが低下する可能性があります。

### ▶ SiteScope 設定エラーを解決する。

状況モニタを使用して、モニタ設定のエラーを解決します。エラーが少数でも、パフォーマンスや安定性の低下につながる可能性があります。これらのエラーを解決する方法については、HP ソフトウェア・サポートにお問い合わせください。

### ▶ SiteScope サーバの物理的な位置を計画する。

SiteScope サーバは、ローカル・ネットワーク上でその監視対象マシンにできるだけ近い場所に設置することをお勧めします。十分な容量があり遅延の低い接続環境では許容可能な場合がありますが、WAN 接続を経由して監視することはお勧めしません。

## Solaris および Linux プラットフォーム上での SiteScope のサイズ設定

Solaris および Linux オペレーティング・システム上で SiteScope のサイズ設定を行うと、いくつかのパラメータが変更されます。また、いくつかの一般的な保守の推奨事項に従って、最適なチューニングを行ってください。

### 1 オペレーティング・システムのチューニング

SiteScope インスタンス用の適切な数のスレッドを設定し、Solaris または Linux オペレーティング・システム・パラメータを設定します。詳細については、164 ページ「オペレーティング・システムのチューニング」の手順を参照してください。

### 2 Java 仮想マシンのチューニング

JVM ヒープ・サイズとスレッド・スタック・サイズを設定し、パラレル・ガベージ・コレクションを実装します。詳細については、166 ページ「Java Virtual Machine のチューニング」の手順を参照してください。

### 3 一般的な保守の推奨事項

また、いくつかの一般的な保守の推奨事項に従って、最適なチューニングを行ってください。詳細については、167 ページ「一般的な保守の推奨事項」を参照してください。

## オペレーティング・システムのチューニング

オペレーティング・システムのチューニングでは、SiteScope インスタンス用の適切な数のモニタと、Solaris または Linux オペレーティング・システムのパラメータを設定する必要があります。

### 実行中モニタの最大数の設定

[実行中モニタの最大数] 設定は、[プリファレンス] > [インフラストラクチャプリファレンス] > [サーバ設定]で行えます。詳細については、SiteScope ヘルプの「インフラストラクチャ・プリファレンス」を参照してください。

## Solaris または Linux オペレーティング・システム・パラメータの設定

Solaris または Linux オペレーティング・システムは大量のスレッドをサポートできます。この機能を有効にするには、SiteScope サーバで次の手順で行います。

Solaris または Linux オペレーティング・システム・パラメータを設定するには、次の手順で行います。

### 1 カーネル・ファイル記述子の制限を変更します。

- a /etc/system ファイルを編集して次の行を追加します。

```
set rlim_fd_max=8192
```

---

**注：**標準設定は 1024 です（この制限はユーザのルートには適用されません）。値「8192」は、SiteScope の最大のインスタンスにも対応します。小さな値を試すより、この大きな値を使用してください。これにより、小さな値で不十分だった場合に、マシンを再起動する必要がなくなります。

---

- b サーバを再起動します。

### 2 ユーザのランタイムの制限を変更します。

- a <SiteScope ルート・ディレクトリ>%bin ディレクトリで、SiteScope スタートアップ・スクリプト、start-monitor および start-service に次の行を追加します。

```
ulimit -n 8192
```

- b 次のパラメータが次の最小値であることを確認します。詳細については、UNIX システム管理者にお問い合わせください。

パラメータ	最小値
コア・ファイル・サイズ (ブロック)	制限なし
データ・セグメント・サイズ (キロバイト)	制限なし
ファイル・サイズ(ブロック)	制限なし
開くファイル数	8192
パイプ・サイズ(512 バイト)	10
スタック・サイズ(キロバイト)	8192
CPU 時間(秒)	制限なし
最大ユーザ・プロセス数	8192
仮想メモリ(キロバイト)	制限なし

ランタイムの制限の変更後に、SiteScope アプリケーションまたはサーバを再起動する必要はありません。

## Java Virtual Machine のチューニング

最適なパフォーマンスを得るために JVM を設定する必要があります。

JVM を設定するには、次の手順で行います。

### 1 ヒープ領域を増やします。

標準設定では、SiteScope の Java のヒープ領域は 512 MB に設定されています。これは大量インスタンスの通常運用には不十分です。

Java ヒープ領域は、`<SiteScope ルート・ディレクトリ>%bin` ディレクトリで `start-service` スクリプトと `start-monitor` スクリプトを変更することで、1024 MB（これは負荷が大きい場合に推奨されるヒープサイズ）まで増やせます。

### 2 スレッド・スタック・サイズ (-Xss) を減らします。

SiteScope によって作成された各スレッドは、`-Xss` で割り当てられているメモリ量を使用してスタックをインスタンス化します。標準設定の UNIX JRE の最大スレッド・スタック・サイズ、`-Xss` は、スレッドごとに 512 KB メモリです。

`<SiteScope ルート・ディレクトリ>%bin%start-monitor` の Java コマンド・ラインに指定されていない場合、標準設定の最大スレッド・スタック・サイズが使用されます。標準設定のサイズは、使用できるメモリを超過することによって、スレッドの数を制限できます。

4000 以上のモニタから成るインスタンスは、128 KB の `-Xss` を利用できます。

## 一般的な保守の推奨事項

Solaris および Linux プラットフォームで SiteScope のサイズ設定を行うには、一般的な保守の推奨事項があります。

### ▶ 状況モニタを使用する。

可能な限り、特にリモート UNIX 接続を使用するすべてのモニタで、**[依存関係]** で状況モニタを利用します。状況モニタにより、複数のマシンが使用不能になった場合や SSH 接続スレッドがロックされた場合に、それを検出することでサーバのパフォーマンスの低下を防ぐことができます。

### ▶ エラーを検証する機能の使用を最小限に抑える。

**[モニタの実行設定]** パネルで **[エラーの検証]** オプションを有効にすると、停止したモニタは、警告条件がチェックされる前にスケジューラをバイパスしてすぐに再実行されます。このような特別な実行が多数発生すると、スケジューラが大きく混乱し、SiteScope のパフォーマンスを低下させる可能性があります。接続の問題によるモニタの失敗では、そのモニタが終了する前、エラーの検証には **[接続タイムアウト]** に設定されている時間がかかる場合があります。この間、標準設定では、モニタ・スレッドと接続が 2 分間ロックされます。この遅延により、ほかのモニタの待機や、失敗したモニタのスキップが発生することがあります。

### ▶ SSH および内部 Java ライブラリを使用する。

SSH 接続方法を使用してリモート・プリファレンスを定義する場合、可能な限り、SSH および内部 Java ライブラリ・オプションを使用します。内部 Java ライブラリは、サードパーティ製の Java ベースの SSH クライアントです。このクライアントにより、Telnet およびホストのオペレーティング・システムの SSH クライアント経由のパフォーマンスやスケーラビリティが大幅に改善されます。このクライアントは、SSH1、SSH2、公開鍵認証などをサポートします。

SSH で、**接続キャッシュの有効化**を設定します。**[最大接続数]**を調整して、特定のサーバに対して稼動するすべてのモニタをタイムリーに実行できるようにする必要があります。

▶ **適切なモニタ頻度を決定する。**

モニタの実行頻度を確認し、モニタが適切な間隔で実行されていることを確認します。たとえば、ほとんどのディスク・モニタは 5 分間隔で実行する必要はありません。通常は、おそらく /var、/tmp、および swap 以外のすべてのボリュームについては、15 分、30 分、または 60 分間隔が適切です。モニタ頻度を小さくすることで 1 分間に稼動するモニタの数が少なくなり、パフォーマンスと処理能力が改善されます。

▶ **グループ構造を最適化する。**

グループ構造には、SiteScope の使いやすさと SiteScope のパフォーマンスの最適化を考慮してください。構造の深さを最小限に抑えるように、トップレベルのグループの数も最小限に抑えるのが理想的です。

グループ構造に 50 を超えるトップレベルのグループがある場合、またはグループ構造が 5 階層より深い場合、パフォーマンスが低下する可能性があります。

▶ **SiteScope 設定エラーを解決する。**

状況モニタを使用して、モニタ設定のエラーを解決します。エラーが少数でも、パフォーマンスや安定性の低下につながる可能性があります。これらのエラーを解決する方法については、HP ソフトウェア・サポートにお問い合わせください。

▶ **SiteScope サーバの物理的な位置を計画する。**

SiteScope サーバは、ローカル・ネットワーク上でその監視対象マシンにできるだけ近い場所に設置することをお勧めします。WAN や低速ネットワーク・リンクを監視する場合は、通常、ネットワークがボトルネックになります。このため、監視の実行に時間がかかる場合があります。十分な容量があり遅延の低い接続環境では許容可能な場合がありますが、WAN 接続を経由して監視することはお勧めしません。



### ▶ ローカル・ユーザ・アカウントを使用する。

ローカル・ユーザ・アカウントは、UNIX Remote Authentication の Directory サービス・アカウントに適しています。ローカル・ユーザ・アカウントにより、認証に対する Directory サービス・サーバへの依存を回避します。これによって、認証が迅速に行われ、Directory サービス・サーバがダウンしても接続の失敗を避けることができます。

SiteScope のインスタンスが非常に大量な場合、Directory サービス・サーバのパフォーマンスに悪影響を及ぼす可能性があります。Directory サービス・サーバは監視対象サーバに近い場所に設置することをお勧めします。

## 注意事項と制限事項

**問題** : JVM が「スワップ領域不足」エラーでクラッシュする。

以下の方法でスワップ領域不足エラーを検出できます。

- 1 ターゲットの SiteScope サーバで仮想バイト・カウンタを監視するために Microsoft Windows Resources モニタを作成します。
- 2 次のしきい値に設定します。

32 ビット OS	64 ビット OS
[エラー条件] >= 1.9 GB [警告条件] >= 1.8 GB (このプロセスは値が 2 GB に達するとクラッシュします)	[エラー条件] >= 7.9 GB [警告条件] >= 7.8 GB (このプロセスは値が 8 GB に達するとクラッシュします)

### 解決方法

- 1 JVM ヒープ・サイズを小さくします。JVM ヒープ・サイズの変更についての詳細は、135 ページ「Windows プラットフォームでの設定ツールの実行」を参照してください。
- 2 動作している現在のモニタ数を削減して ([プリファレンス] > [インフラストラクチャ プリファレンス] > [サーバ設定] > [モニタ プロセスの最大数] で)、SiteScope が使用するスレッド数を減らします。



# 12

---

## SiteScope のアンインストール

### 本章の内容

- ▶ Windows プラットフォームの SiteScope のアンインストール (ページ 171)
- ▶ Solaris または Linux プラットフォームの SiteScope のアンインストール (ページ 176)

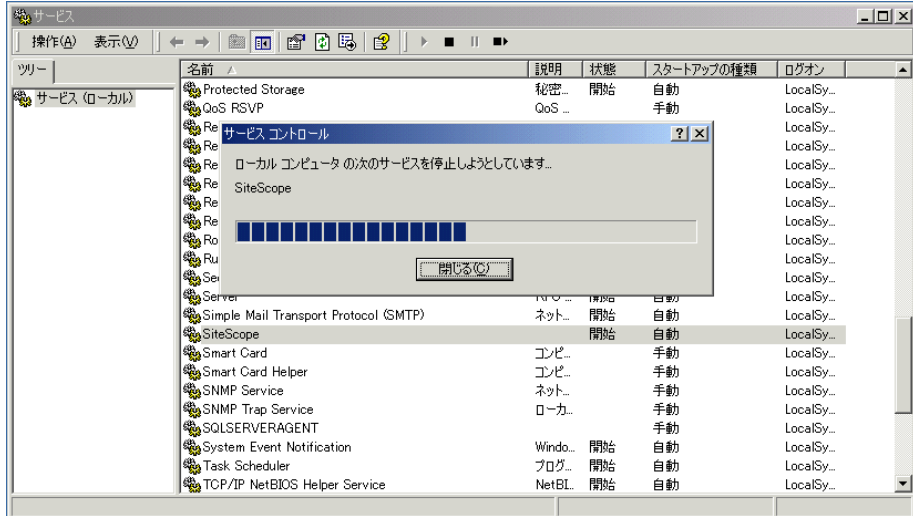
### Windows プラットフォームの SiteScope のアンインストール

サーバ・マシンから SiteScope をアンインストールできます。Windows プラットフォーム上で稼動している SiteScope の場合、SiteScope には、コンピュータから SiteScope ソフトウェアをアンインストールするためのプログラムが含まれています。

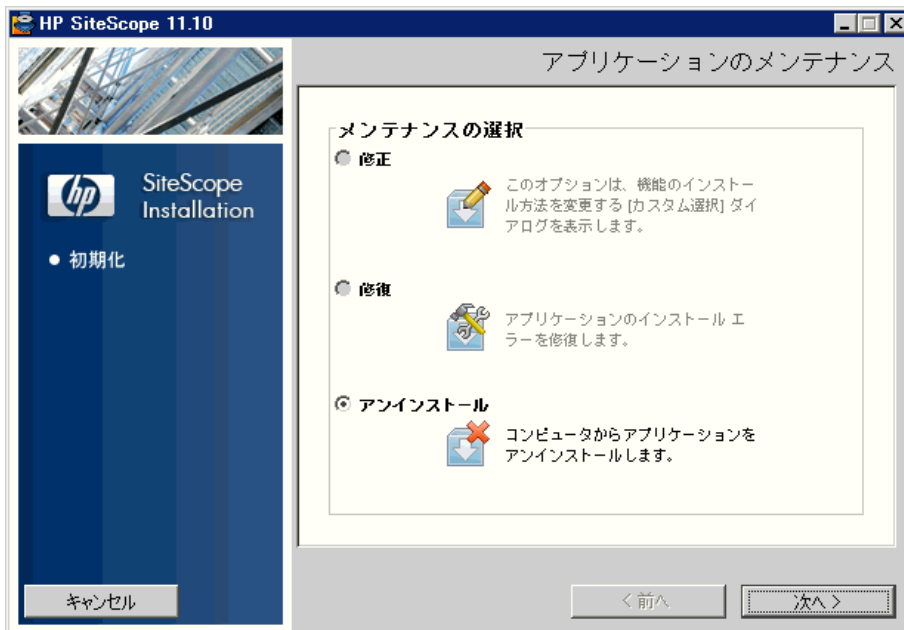
Windows プラットフォームの SiteScope をアンインストールするには、次の手順で行います。

- 1 [スタート] > [すべてのプログラム] > [管理ツール] > [サービス] を選択します。[サービス] ダイアログ・ボックスが開きます。

- 2 サービスの一覧から **SiteScope** サービスを選択します。SiteScope が稼動している場合は、右クリックして操作メニューを表示し、[停止] を選択します。サービスの [状態] に、サービスが停止したことが示されるまで待ってから、[サービス] ウィンドウを閉じます。

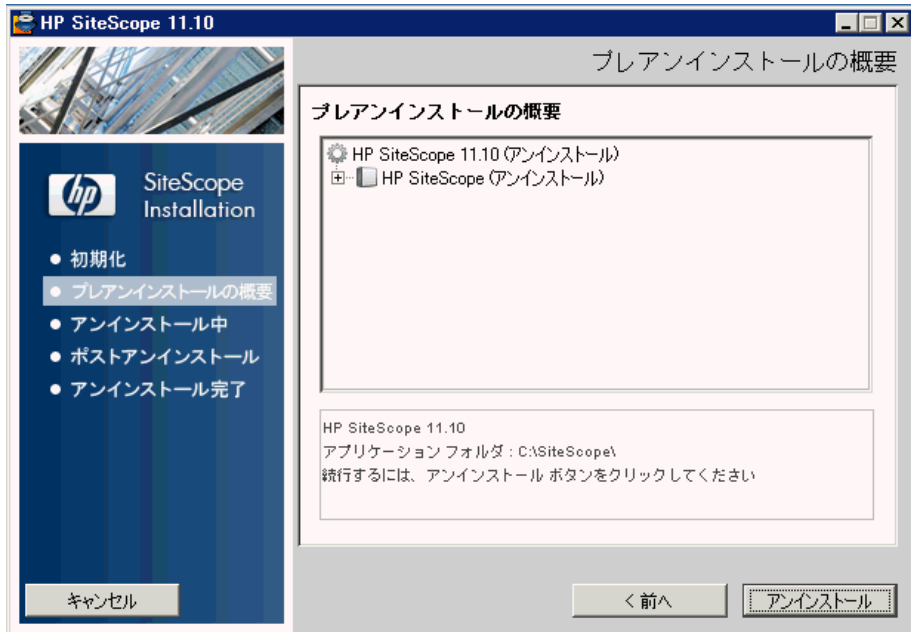


- 3 [スタート] > [すべてのプログラム] > [HP SiteScope] > [HP SiteScope のアンインストール] をクリックして、HP ソフトウェア・インストーラを起動します。



[アンインストール] を選択し、[次へ] をクリックします。

- 4 [プレアンインストールの概要] 画面で、[アンインストール] をクリックします。



インストーラによって SiteScope ソフトウェア・コンポーネントが選択され、アンインストールが行われます。アンインストール処理中は、各ソフトウェア・コンポーネントとそのアンインストールの進捗状況が画面に表示されます。

アンインストール・プロセスが完了した時点で [アンインストールの完了] ウィンドウが開かれ、アンインストール・プロセスの概要が表示されます。

- 5 [アンインストール完了] ウィンドウで **[完了]** をクリックし、アンインストール・プログラムを閉じます。



[ログ ファイルを表示します] リンクからアンインストール・ログ・ファイルにアクセスし、Web ブラウザで開くことができます。削除されたパッケージの詳細については、[詳細] タブをクリックしてください。

- 6 システムを再起動し、変更をシステムに反映させます。再起動しないと、ほかのアプリケーションで予期しない問題が発生することがあります。

## Solaris または Linux プラットフォームの SiteScope のアンインストール

Solaris または Linux プラットフォーム上で稼動している SiteScope の場合、SiteScope には、コンピュータから SiteScope ソフトウェアをアンインストールするためのスクリプトが含まれています。スクリプトを実行できない場合は、SiteScope ファイルおよびディレクトリを手作業で削除します。

**Solaris または Linux プラットフォームの SiteScope をアンインストールするには、次の手順で行います。**

- 1 SiteScope ディレクトリでスクリプトを実行することが許可されているアカウントを使用して、SiteScope が稼動しているマシンにログインします。通常は、SiteScope を実行しているアカウントを使用します。
- 2 **<インストール・パス> /SiteScope** ディレクトリに含まれている `stop` シェル・スクリプトを実行して、SiteScope を停止します。このスクリプトを実行するコマンド・ラインの例を次に示します。

SiteScope/stop

SiteScope が停止したことを示すメッセージが表示されます。

```
$ ./stop
Stopped SiteScope process (6252)
Stopped SiteScope monitoring process (6285)
$
```

- 3 アンインストール・コマンドを実行します。
  - ▶ X Windows モードで作業している場合は、次のコマンドを実行します。  
`/opt/HP/SiteScope/installation/bin/uninstall.sh`
  - ▶ コンソール・モードで作業している場合は、次のコマンドを実行します。  
`/opt/HP/SiteScope/installation/bin/uninstall.sh -i console`

---

**注:** サイレント・モードでアンインストールするには、アンインストール・コマンドを実行します。

`/opt/HP/SiteScope/installation/bin/uninstall.sh -i silent`

---

- 4 HP ソフトウェア・インストーラが起動します。[**アンインストール**] を選択して [**次へ**] をクリックし、すべての SiteScope をアンインストールすることを確認します。
- 5 171 ページ「Windows プラットフォームの SiteScope のアンインストール」の 4 から 6 の手順を完了します。



# 第 IV 部

---

## SiteScope の安全な稼動



# 13

---

## SiteScope プラットフォームのセキュリティ強化

### 本章の内容

- ▶ SiteScope プラットフォームのセキュリティ強化 (ページ 179)
- ▶ SiteScope ユーザ設定の設定 (ページ 180)
- ▶ パスワードの暗号化 (ページ 180)
- ▶ SSL (Secure Socket Layer) を使用した SiteScope へのアクセス (ページ 180)
- ▶ Run-time Service Model にバルク・データを送信するための SiteScope の設定 (ページ 181)

### SiteScope プラットフォームのセキュリティ強化

本章では、SiteScope プラットフォームのセキュリティを強化するために使用できる、いくつかの設定オプションについて説明します。

ネットワークおよびシステムのセキュリティは、ますます重要になっています。SiteScope は、システムの可用性を監視するツールとして、セキュリティで保護する処置が取られていない場合に使用するとシステム・セキュリティを危険にさらす可能性のあるシステム情報にアクセスすることになります。本項に示す設定とセットアップ・オプションを使用して、SiteScope プラットフォームを保護する必要があります。

---

**注意:** 2 種類の SiteScope 製品インタフェースを提供するアクティブな Web サーバが 2 つあります。SiteScope へのすべてのアクセスを制限するには、SiteScope が提供する SiteScope Web サーバおよび Apache Tomcat サーバの両方に適切な設定を適用する必要があります。

---

## SiteScope ユーザ設定の設定

SiteScope ユーザ・プロファイルは、SiteScope インタフェースにアクセスするためにユーザ名およびパスワードが要求された際に使用します。インストール後、SiteScope が稼動しているサーバに HTTP アクセスできるユーザは通常、SiteScope にアクセス可能になります。

標準設定では、SiteScope は 1 つのユーザ・アカウントとともにインストールされ、このアカウントには、標準設定のユーザ名またはパスワードは定義されません。これが管理者アカウントです。製品のインストールおよびアクセス後、このアカウントにユーザ名とパスワードを定義する必要があります。また、ほかのユーザが製品へどのようにアクセスでき、どのアクションを実行できるかを制御するために、ほかのユーザのアカウント・プロファイルを作成することもできます。ユーザ・アカウントの作成の詳細については、SiteScope ヘルプの「ユーザ管理プリファレンス」を参照してください。

## パスワードの暗号化

すべての SiteScope パスワードは、TDES (Triple Data Encryption Standard) と呼ばれる方法を使用して暗号化されます。TDES は、2 つまたは 3 つの異なる鍵を使用して、64 ビットのテキスト・ブロックごとに Data Encryption Algorithm を 3 重に適用します。結果として、現実的に妥当な時間内には、未承認のユーザは元のパスワードを復元できなくなります。

## SSL (Secure Socket Layer) を使用した SiteScope へのアクセス

SiteScope は、製品インタフェースへのアクセスを制御するために SSL を使用するように設定できます。このオプションを有効にすると、証明書を使用してユーザを認証することが必要となります。詳細については、205 ページ「SSL を使用するための SiteScope の設定」を参照してください。

## Run-time Service Model にバルク・データを送信するための SiteScope の設定

SiteScope の結果を zip ファイルに圧縮して、または圧縮しないで BSM の Run-time Service Model (RTSM) に送信することができます。この要求には、送信される結果が圧縮された形式であるか圧縮されていない形式であるかを RTSM に指示するパラメータが含まれています。

SiteScope の結果を圧縮された形式で送信するには、次の操作を実行します。

- 1 次のファイルを開きます。<SiteScope ルート・ディレクトリ>  
¥discovery¥discovery\_agent.properties。
- 2 appilog.agent.probe.send.results.zipped で始まる行を見つけます。この行がない場合は、ファイルに追加します。
- 3 この値を =true に変更します。
- 4 SiteScope を再起動します。SiteScope の結果は圧縮されてから RTSM に送信されます。



# 14

## 権限と資格情報

本章では SiteScope モニタの表を示します。各モニタは、対応するプロトコル、モニタへのアクセスに必要なユーザ権限と資格情報、およびその他の注意事項とともに一覧します。

この章の目的は、SiteScope モニタを保護するために必要な権限に関する基本的な情報を提供することです。

モニタ名	プロトコル	ユーザ権限と資格情報	注意事項
Amazon Web サービス	HTTPS	AWS AccessKey ID, AWS SecretKey	このモニタでは、Amazon から提供された秘密のアクセス・キーを使用します。これらのキーは、Amazon のオフィシャル・サイトのユーザ・プロフィールで入手できます。HTTP 接続は保護されています。
Apache サーバ	HTTP HTTPS	サーバ統計情報ページへのアクセスに必要な限り、必要ありません。	
BroadVision	独自開発		

モニタ名	プロトコル	ユーザ権限と資格情報	注意事項
CheckPoint Firewall-1	SNMP	コミュニティ文字列。	このモニタは SNMP V3 をサポートしないため、コミュニティ文字列はネットワーク経由でプレーン・テキストとして渡されます。対象の SNMP エージェントは、コミュニティ文字列が MIB のサブセットの読み取りのみに使用できるように設定されます。そのような設定を行うと、未承認の人物がコミュニティ文字列を取得した場合、その人物が行えるのはエージェントの OID を読み取ることだけになります（設定はできません）。



モニタ名	プロトコル	ユーザ権限と資格情報	注意事項
Cisco Works	SNMP	SNMP のバージョンに応じて、コミュニティ文字列またはユーザ名とパスワード。	<p>このモニタに対する最も安全な設定は、認証 (SHA または MD5) と DES の非公開暗号を使う、SNMP V3 の使用が設定されているエージェントに対して実行することです。この設定では、暗号化されていない SNMP データはネットワーク経由では渡されません。これにより、悪意のあるユーザが監視対象のデバイスを危険にさらす可能性を大きく低減します。監視対象デバイスの SNMP エージェントの実装バグによるセキュリティ上の脆弱性は考慮されていません。</p> <p>このモニタに対する最も危険な設定は、監視対象デバイスのエージェントによって実装された MIB 全体に対する読み取りおよび書き込みの両方のアクセス権を持つコミュニティ文字列を使う SNMP V1 を使用することです。この設定では、悪意のあるユーザがネットワーク上で盗聴することによってコミュニティ文字列を取得し、それを使用してデバイスを再設定することができます。</p>
Citrix サーバ	PDH/Perfex	Microsoft ASP サーバ・モニタと同じ。	
ColdFusion	Perfex	Microsoft ASP サーバ・モニタと同じ。	

モニタ名	プロトコル	ユーザ権限と資格情報	注意事項
COM+	HTTP/ HTTPS		
CPU (Windows)	Perfex	Microsoft ASP サーバ・モニタと同じ。	<p>SiteScope が動作するサーバを Active Directory の Domain Admin グループに追加します (Windows 2000 以降の場合)。このオプションでは、SiteScope サービスは、ローカル・システム・アカウントとしてログインするように設定されますが、SiteScope が実行されているマシンは、ドメイン管理権限のあるグループに追加されます。</p> <p>非管理者アクセスを許可するように、ドメイン内のすべてのマシンのレジストリ・アクセス権を編集します。非管理者ユーザが perfmon を使用してリモートでマシンを監視できるようにする方法については、Microsoft サポート技術情報の記事 <a href="http://support.microsoft.com/kb/164018/ja-jp">http://support.microsoft.com/kb/164018/ja-jp</a> を参照してください。このオプションを使用するには、監視する各リモート・マシンでレジストリを変更する必要があります。したがって、ドメインのサーバ・リストにドメインのすべてのマシンが含まれていても、接続プロファイルなしで監視できるのは、レジストリが変更されたリモート・マシンのみです。</p>

モニタ名	プロトコル	ユーザ権限と資格情報	注意事項
CPU (Solaris/ Linux)	UNIX/ Linux シェル	リモート・サーバにはシェル・アクセスが必要です。サポートされているアクセス・プロトコルは、telnet, SSH, および rlogin です。また、ログイン・ユーザには、特定の実行ファイル・プログラムを実行する権限も必要です。	SiteScope が実行するコマンドに UNIX グループ権限を使用することにより、ログイン・ユーザのアクセスを制限できます。個々のオペレーティング・システムに関連するコマンドの一覧は、 <b>templates.os</b> ファイルにあります。
データベース・カウンタ	JDBC	特定のデータベースへのアクセスを認証するためにユーザの資格情報が必要です。各データベースには、アクセスが必要な個々のテーブルへのアクセス制御を提供するための特定の方法があります。	ユーザには、指定されたあらゆる SQL ステートメントを実行できる権限が必要です。
ディレクトリ	シェル /Perfex	リモート・サーバにはシェル・アクセスが必要です。サポートされているアクセス・プロトコルは、telnet, SSH, および rlogin です。また、ログイン・ユーザには、特定の実行ファイル・プログラムを実行する権限も必要です。	SiteScope が実行するコマンドに UNIX グループ権限を使用することにより、ログイン・ユーザのアクセスを制限できます。個々のオペレーティング・システムに関連するコマンドの一覧は、 <b>templates.os</b> ファイルにあります。
ディレクトリ (Windows)	Netbios	読み取り専用ファイル・システム・アクセス。	特定のファイルに対する権限は、オペレーティング・システム・レベルで制御できます。
ディレクトリ (Solaris/ Linux)	ファイル・システム・アクセス	個々のファイルに対する読み取り専用ファイル・システム・アクセス。	特定のファイルに対する権限は、オペレーティング・システム・レベルで制御できます。

第 14 章 • 権限と資格情報

モニタ名	プロトコル	ユーザ権限と資格情報	注意事項
ディスク領域 (Windows)	Perfex	Microsoft ASP サーバ・モニタと同じ。	Windows 2000 の場合、ディスク・カウンタは <b>perfex</b> で有効になっている必要があります。
ディスク領域 (Solaris/ Linux)	Shell	リモート・サーバにはシェル・アクセスが必要です。サポートされているアクセス・プロトコルは、 <b>telnet</b> , <b>SSH</b> , および <b>rlogin</b> です。また、ログイン・ユーザには、特定の実行ファイル・プログラムを実行する権限も必要です。	<b>SiteScope</b> が実行するコマンドに UNIX グループ権限を使用することにより、ログイン・ユーザのアクセスを制限できません。個々のオペレーティング・システムに関連するコマンドの一覧は、 <b>templates.os</b> ファイルにあります。

モニタ名	プロトコル	ユーザ権限と資格情報	注意事項
F5 Big-IP	SNMP	SNMP のバージョンに応じて、コミュニティ文字列またはユーザ名とパスワード。	<p>このモニタに対する最も安全な設定は、認証 (SHA または MD5) と DES の非公開暗号を使う、SNMP V3 の使用が設定されているエージェントに対して実行することです。この設定では、暗号化されていない SNMP データはネットワーク経由では渡されません。これにより、悪意のあるユーザが監視対象のデバイスを危険にさらす可能性を大きく低減します。監視対象デバイスの SNMP エージェントの実装バグによるセキュリティ上の脆弱性は考慮されていません。</p> <p>このモニタに対する最も危険な設定は、監視対象デバイスのエージェントによって実装された MIB 全体に対する読み取りおよび書き込みの両方のアクセス権を持つコミュニティ文字列を使う SNMP V1 を使用することです。この設定では、悪意のあるユーザがネットワーク上で盗聴することによってコミュニティ文字列を取得し、それを使用してデバイスを再設定することができます。</p>

第 14 章 • 権限と資格情報

モニタ名	プロトコル	ユーザ権限と資格情報	注意事項
ファイル (Windows)	Netbios	ログ・ファイルへの読み取り専用アクセスのための Windows 権限。	
ファイル (Solaris/ Linux)	ファイル・システム・アクセス	対象のファイル・システムに対するファイルの読み取り専用権限。	
FTP	FTP	ユーザ固有のファイルをコピーするための読み取り専用権限を持つ、FTP サイト用の有効なユーザ名とパスワード。カスタマー・サイトは匿名ログインを許可します。	
HP iLO (Integrated Lights-Out)	SSH	HP iLO システム管理者が設定する必要があります。	リモート・サーバを設定する場合は、[詳細設定] 表示枠で <b>[SSH バージョン 2 のみを使用]</b> を選択します (リモート・サーバを高速化)。
LDAP	LDAP	単純な認証を行う LDAP サーバでの有効なユーザ名とパスワード。クエリまたは検索操作には適切な権限が必要です。バージョン 7.9 では、匿名認証もサポートされています。	
リンク・チェック	HTTP/ HTTPS	HTTP/HTTPS サイトでユーザ名とパスワードが必要ない限り、必要ありません。	ユーザにはリンクをクリックできる権限が必要です。
ログ・ファイル (Windows)	Netbios	ログ・ファイルへの読み取り専用アクセスのための Windows 権限。	

モニタ名	プロトコル	ユーザ権限と資格情報	注意事項
ログ・ファイル (Solaris/Linux)	Shell	リモート・サーバにはシェル・アクセスが必要です。サポートされているアクセス・プロトコルは、telnet, SSH, および rlogin です。また、ログイン・ユーザには、特定の実行ファイル・プログラムを実行する権限も必要です。対象のファイル・システムに対するファイルの読み取り専用権限。	SiteScope が実行するコマンドに UNIX グループ権限を使用することにより、ログイン・ユーザのアクセスを制限できます。個々のオペレーティング・システムに関連するコマンドの一覧は、 <b>templates.os</b> ファイルにあります。
メール	SMTP	有効な電子メール・アカウントとパスワード。	
MAPI	MAPI	テスト電子メールを送受信するための 1 つまたは 2 つの電子メール・アカウントのユーザ名とパスワード。	SiteScope は SiteScope サーバ上で Local Administrator として実行する必要があります。テスト電子メールアカウントには、SiteScope サーバでの Local Administrator 権限が必要です。
メモリ (Windows)	Perfex	Microsoft ASP サーバ・モニタと同じ。	
メモリ (Solaris Linux)	Shell	リモート・サーバにはシェル・アクセスが必要です。サポートされているアクセス・プロトコルは、telnet, SSH, および rlogin です。また、ログイン・ユーザには、特定の実行ファイル・プログラムを実行する権限も必要です。	SiteScope が実行するコマンドに UNIX グループ権限を使用することにより、ログイン・ユーザのアクセスを制限できます。個々のオペレーティング・システムに関連するコマンドの一覧は、 <b>templates.os</b> ファイルにあります。
Microsoft アーカイブ・サーバ	Perfex	Microsoft ASP サーバ・モニタと同じ。	

モニタ名	プロトコル	ユーザ権限と資格情報	注意事項
Microsoft A/V 会議サーバ	Perfex	Microsoft ASP サーバ・モニタと同じ。	
Microsoft ASP サーバ	Perfex	<p>Windows 上でパフォーマンス・オブジェクトを監視するために、ユーザには特定のアクセス権限が必要です。Microsoft サポート技術情報の記事 <a href="http://support.microsoft.com/kb/300702/ja-jp">http://support.microsoft.com/kb/300702/ja-jp</a> および記事 <a href="http://support.microsoft.com/kb/164018/ja-jp">http://support.microsoft.com/kb/164018/ja-jp</a> を参照してください。</p> <p>これらの記事には、監視対象サーバ上のユーザに許可する必要がある権限とセキュリティ・ポリシーが記述されています。</p>	<p><b>Perfmon User:</b> Windows サーバ上でパフォーマンス・オブジェクトを監視するために必要な権限が与えられたユーザです。</p> <p><b>注:</b> Windows サーバの <b>Performance Monitor Users</b> (Windows 2000 および Windows 2003), <b>Power Users</b>, および <b>Administrators</b> グループは、Perfmon User に必要な権限とセキュリティ・ポリシーのセットにすでに関連付けられています。言い換えると、これらのグループに属するすべてのユーザは、パフォーマンス・オブジェクトの監視に必要な権限をすべて持っており、自動的に Perfmon User となります。</p> <p><b>Performance Monitor Users</b> グループには正確な権限セットがありますが、<b>Power Users</b> と <b>Administrators</b> グループには、パフォーマンスの監視に必要な追加の権限がいくつか関連付けられています。</p>



モニタ名	プロトコル	ユーザ権限と資格情報	注意事項
Microsoft ASP サーバ (つづき)	Perfex (つづき)		<p><b>SiteScope ユーザ</b> : SiteScope サービスにログオンするユーザです。</p> <p>SiteScope モニタがリモート・サーバから perfmon データを収集できるようにするために、Perfmon User として定義されたユーザの資格情報を使用して、リモート・サーバへの接続を確立する必要があります。これらの接続は次のオプションを使用して確立できます。</p> <p>SiteScope ユーザを、リモート・マシン上のユーザでもあるドメイン・ユーザとして設定します。</p> <p>リモート・マシン上で SiteScope ユーザが Perfmon User として定義されていない場合、リモート・マシン上で Perfmon User として定義されているユーザの資格情報を使用して、SiteScope でリモート NT オブジェクトを設定する必要があります。その後、モニタはリモート NT オブジェクトを使用するように設定されます。</p>
Microsoft Director サーバ	Perfex	Microsoft ASP サーバ・モニタと同じ。	
Microsoft エッジ・サーバ	Perfex	Microsoft ASP サーバ・モニタと同じ。	
Microsoft フロント・エンド・サーバ	Perfex	Microsoft ASP サーバ・モニタと同じ。	

第 14 章 • 権限と資格情報

モニタ名	プロトコル	ユーザ権限と資格情報	注意事項
Microsoft IIS サーバ	Perfex	Microsoft ASP サーバ・モニ タと同じ。	
Microsoft 仲 介サーバ	Perfex	Microsoft ASP サーバ・モニ タと同じ。	
Microsoft 監 視および CDR サーバ	Perfex	Microsoft ASP サーバ・モニ タと同じ。	
Microsoft Registrar サーバ	Perfex	Microsoft ASP サーバ・モニ タと同じ。	
Microsoft SQL Server	Perfex	Microsoft ASP サーバ・モニ タと同じ。	
Microsoft Windows Dialup	MODEM	接続されている ISP アカウ ントに対するユーザ名とパ スワード。アカウントには、 指定されたテスト・モニタを 実行できる権限が必要です。	
Microsoft Windows Event Log	Perfex	Microsoft ASP サーバ・モニ タと同じ。	
Microsoft Windows Media Player	ファイル・ システム・ アクセス	対象のファイル・システム に対するファイルの読み取 り専用権限。	
Microsoft Windows Media Server	Perfex	Microsoft ASP サーバ・モニ タと同じ。	
Microsoft Windows Performance Counter	Perfex	Microsoft ASP サーバ・モニ タと同じ。	

モニタ名	プロトコル	ユーザ権限と資格情報	注意事項
Microsoft Windows Resources	PDH	Microsoft ASP サーバ・モニタと同じ。	
ネットワーク帯域幅	SNMP	SNMP のバージョンに応じて、コミュニティ文字列またはユーザ名とパスワード。	<p>このモニタに対する最も安全な設定は、認証 (SHA または MD5) と DES の非公開暗号を使う、SNMP V3 の使用が設定されているエージェントに対して実行することです。この設定では、暗号化されていない SNMP データはネットワーク経由では渡されません。これにより、悪意のあるユーザが監視対象のデバイスを危険にさらす可能性を大きく低減します。監視対象デバイスの SNMP エージェントの実装バグによるセキュリティ上の脆弱性は考慮されていません。</p> <p>このモニタに対する最も危険な設定は、監視対象デバイスのエージェントによって実装された MIB 全体に対する読み取りおよび書き込みの両方のアクセス権を持つコミュニティ文字列を使う SNMP V1 を使用することです。この設定では、悪意のあるユーザがネットワーク上で盗聴することによってコミュニティ文字列を取得し、それを使用してデバイスを再設定することができます。</p>

第 14 章 • 権限と資格情報

モニタ名	プロトコル	ユーザ権限と資格情報	注意事項
ニュース	NNTP	ニュース・サーバに必要な場合、ニュース・グループ内のメッセージの総数をクエリする読み取り専用の権限を持つ、有効なユーザ名とパスワード。	
Oracle 9i アプリケーション・サーバ	HTTP/ HTTPS		
Oracle データベース	JDBC	Oracle ユーザは、 <SiteScope ルート・ディレクトリ>¥ <b>templates.applications¥</b> <b>commands.oraclejdbc</b> にあるすべての SQL ステートメントを実行できる権限を持ってログインします。	
Ping	ICMP	N/A	
ポート	TCP	N/A	
Radius	Radius	Radius サーバでの有効なユーザ名とパスワード。ほかの権限は必要ありません。	SiteScope の IP を Radius サーバと通信可能なサーバのリストに追加する必要があります。また、PAP 認証を行うように設定する必要があります。
Real Media Player	ファイル・システム・アクセス	対象のファイル・システムでのファイルの読み取り専用権限。	
Real Media Server	Perfex	Microsoft ASP サーバ・モニタと同じ。	
SAP CCMS	独自開発	XMI 認証。	XMI 認証を持つプロファイルは、S_A.SYSTEM, PD_CHICAGO, S_WF_RWTEST, および SAP_ALL です。

モニタ名	プロトコル	ユーザ権限と資格情報	注意事項
SAP CCMS 警告	独自開発		
SAP Performance または SAP Work Processes	独自開発	現在調査中です。	
スクリプト (Windows)	Remote Shell	Microsoft ASP サーバ・モ ニタと同じ。	
スクリプト (Solaris/ Linux)	Shell	リモート・サーバにはシェ ル・アクセスが必要です。 サポートされているアクセ ス・プロトコルは、telnet, SSH, および rlogin です。 また、ログイン・ユーザに は、特定の実行ファイル・ プログラムを実行する権限 も必要です。	SiteScope が実行するコマンド に UNIX グループ権限を使用 することにより、ログイン・ ユーザのアクセスを制限できま す。個々のオペレーティング・ システムに関連するコマンドの 一覧は、 <b>templates.os</b> ファイ ルにあります。
ローカル・マ シン上のスク リプト (Solaris, Linux, およ び Windows)	ファイル・ システム・ アクセス/ Perfex	対象のファイル・システム に対するファイルの読み取 り専用権限。	
サービス (Windows)	Perfex	Microsoft ASP サーバ・モニ タと同じ。	

第 14 章 • 権限と資格情報

モニタ名	プロトコル	ユーザ権限と資格情報	注意事項
サービス (Solaris Linux)	Shell	リモート・サーバにはシェル・アクセスが必要です。サポートされているアクセス・プロトコルは、 <b>telnet</b> , <b>SSH</b> , および <b>rlogin</b> です。また、ログイン・ユーザには、特定の実行ファイル・プログラムを実行する権限も必要です。	<b>SiteScope</b> が実行するコマンドに UNIX グループ権限を使用することにより、ログイン・ユーザのアクセスを制限できます。個々のオペレーティング・システムに関連するコマンドの一覧は、 <b>templates.os</b> ファイルにあります。
Siebel アプリケーション・サーバ (以前の Siebel サーバ・マネージャ)	CmdLine	ユーザ・アカウントには、 <b>Siebel</b> サーバ・マネージャ ( <b>svrvmgr</b> )・コマンドを発行する <b>Siebel</b> 管理者権限が必要です。	<b>svrvmgr</b> クライアントがリモートの場合、リモート <b>svrvmgr</b> コマンドを実行するための適切なユーザ名およびパスワードの資格情報を使用して、リモート <b>Windows</b> またはリモート <b>UNIX</b> をセットアップする必要があります。
Siebel ログ	ファイル・システム・アクセス	対象の <b>Siebel</b> サーバ・ファイル・システムに対するファイルの読み取り専用権限。	
Siebel Web サーバ	HTTP/ HTTPS	対象の <b>Siebel Extensions</b> ページがサードパーティー製の <b>HTML</b> フォーム・ベースの認証ソフトウェアの背後にある場合、ユーザ名とパスワードが必要です。	ユーザには、 <b>Siebel SWE</b> ページを取得する権限が必要です。

モニタ名	プロトコル	ユーザ権限と資格情報	注意事項
SNMP	SNMP	SNMP のバージョンに応じて、コミュニティ文字列またはユーザ名とパスワード。	<p>このモニタに対する最も安全な設定は、認証 (SHA または MD5) と DES の非公開暗号を使う、SNMP V3 の使用が設定されているエージェントに対して実行することです。この設定では、暗号化されていない SNMP データはネットワーク経由では渡されません。これにより、悪意のあるユーザが監視対象のデバイスを危険にさらす可能性を大きく低減します。監視対象デバイスの SNMP エージェントの実装バグによるセキュリティ上の脆弱性は考慮されていません。</p> <p>このモニタに対する最も危険な設定は、監視対象デバイスのエージェントによって実装された MIB 全体に対する読み取りおよび書き込みの両方のアクセス権を持つコミュニティ文字列を使う SNMP V1 を使用することです。この設定では、悪意のあるユーザがネットワーク上で盗聴することによってコミュニティ文字列を取得し、それを使用してデバイスを再設定することができます。</p>

モニタ名	プロトコル	ユーザ権限と資格情報	注意事項
MIB による SNMP	SNMP	SNMP のバージョンに応じて、コミュニティ文字列またはユーザ名とパスワード。	<p>このモニタに対する最も安全な設定は、認証 (SHA または MD5) と DES の非公開暗号を使う、SNMP V3 の使用が設定されているエージェントに対して実行することです。この設定では、暗号化されていない SNMP データはネットワーク経由では渡されません。これにより、悪意のあるユーザが監視対象のデバイスを危険にさらす可能性を大きく低減します。監視対象デバイスの SNMP エージェントの実装バグによるセキュリティ上の脆弱性は考慮されていません。</p> <p>このモニタに対する最も危険な設定は、監視対象デバイスのエージェントによって実装された MIB 全体に対する読み取りおよび書き込みの両方のアクセス権を持つコミュニティ文字列を使う SNMP V1 を使用することです。この設定では、悪意のあるユーザがネットワーク上で盗聴することによってコミュニティ文字列を取得し、それを使用してデバイスを再設定することができます。</p>



モニタ名	プロトコル	ユーザ権限と資格情報	注意事項
SNMP トラップ	SNMP	不要ですが、SiteScope にトラップを送信するためにネットワーク上でエージェントを設定する権限は必要です。予約済みのポートであるポート 162 にバインドできるように、SiteScope は権限を持つユーザとして実行する必要があります。	SNMP V1 および V2 トラップに関するセキュリティ・リスクとして、悪意のあるユーザがトラップで渡されたデータを盗聴する可能性があります。認証と非公開暗号を使用する V3 トラップを使用することにより、盗聴者によってデータが悪用される可能性が大幅に削減されます。
SunONE	HTTP/ HTTPS	認証を必要とするプロキシを使用しない限り、不要。	
Tuxedo	独自開発	PeopleSoft Tuxedo には、あらかじめ設定されている 2 つのユーザ、PS および VP が含まれています。これらは監視専用アカウントです。SiteScope の監視では、ほかのユーザの作成や使用を行うことはできません。	
URL	HTTP/ HTTPS	SiteScope には何も必要ありません。サーバには有効なユーザ名とパスワードが必要です。	
URL 内容	HTTP/ HTTPS	SiteScope には何も必要ありません。サーバには有効なユーザ名とパスワードが必要です。	
URL リスト	HTTP/ HTTPS	SiteScope には何も必要ありません。サーバには有効なユーザ名とパスワードが必要です。	

第 14 章 • 権限と資格情報

モニタ名	プロトコル	ユーザ権限と資格情報	注意事項
URL シー ケンス	HTTP/ HTTPS	SiteScope には何も必要ありません。 サーバには有効なユーザ名とパスワードが必要です。	
VMware ホスト CPU / メモリ / ネット ワーク / 状態 / ストレージ	HTTPS	vCenter/Host の有効なユーザ名とパスワード。	ホストおよび VM を表示するにはユーザは適切な権限が必要です。これらのモニタでは、vCenter/Host からサーバ証明書をインポートする必要もあります。この作業は、SiteScope で手動または証明書管理を使用して実行できます ([証明書のインポート] オプションを使用して、モニタ設定の前またはモニタ設定の間どちらでも可能)。
Web サーバ	Perfex	Microsoft ASP サーバ・モニタと同じ。	
Web サーバ (Solaris, Linux, およ び Windows)	ファイル・ システム・ アクセス	対象のファイル・システムに対するファイルの読み取り専用権限。	
Web サービス	HTTP/ HTTPS	対象の Web サービスが必要とする場合、基本認証、ダイジェスト認証、および NTLM 認証をサポートします。	
WebLogic ア プリケー ション・ サーバ 5.x	SNMP	コミュニティ文字列の資格情報が SNMP エージェントの文字列と一致する必要があります。	
WebLogic ア プリケー ション・サ ーバ 6.x 以降	RMI	少なくともモニタ・ロールの権限を持つグループに属するユーザが必要です。	

モニタ名	プロトコル	ユーザ権限と資格情報	注意事項
WebSphere アプリケーション・ サーバ 3.5x	RMI		
WebSphere アプリケーション・ サーバ 4.5	RMI	少なくともモニタ・ロール の権限を持つグループに属 するユーザが必要です。	
WebSphere アプリケーション・サー バ 5.x (HTTP 経由の SOAP)	HTTP/ HTTPS	少なくともモニタ・ロール の権限を持つグループに属 するユーザが必要です。	
WebSphere MQ の状態	独自開発	SiteScope アカウントは、 MQ Windows サーバ内の mqm グループのメンバー である必要があります。  MQ UNIX では、使用され るサーバ接続チャネルは SSL 認証を要求できません。	
WebSphere パフォーマンス・サブ レット	HTTP/ HTTPS	サブレットの URL の ユーザ名およびパスワード による HTTP 認証。ユーザ は資格情報をカスタマイズ できます。	



# 15

---

## SSL を使用するための SiteScope の設定

### 本章の内容

- ▶ SiteScope での SSL の使用について (ページ 205)
- ▶ SSL を使用するための SiteScope の準備 (ページ 206)
- ▶ SSL 用の SiteScope の設定 (ページ 210)
- ▶ クライアント証明書を要求する BSM サーバに接続するための SiteScope の設定 (ページ 212)
- ▶ BSM サーバがクライアント証明書を必要とする時 SiteScope でトポロジ・ディスカバリ・エージェントの設定方法 (ページ 216)

### SiteScope での SSL の使用について

SiteScope は、SiteScope インタフェースへのアクセスを制限するために SSL (Secure Sockets Layer) を使用するように設定できます。SiteScope サーバで SSL をサポートするには、SiteScope インタフェースを提供する Web サーバを SSL に対応するように設定します。このためには、デジタル証明書をキー・ストア・ファイルにインポートし、SiteScope が HTTPS 要求にのみ応答するようにサーバの設定を変更します。クライアント証明書を付けてまたは付けずに SSL 必要とする BSM サーバに接続するように、SiteScope を設定することもできます。

---

**注意 :** SiteScope へのすべてのアクセスを HTTPS クライアント接続に制限するには、本項の手順に従って、SiteScope が提供する SiteScope Web サーバおよび Tomcat サーバの両方で SSL を使用するように設定する必要があります。

---

## SSL を使用するための SiteScope の準備

SiteScope には **Keytool.exe** が付属しています。Keytool は、鍵および証明書管理ユーティリティです。Keytool により、ユーザは、デジタル署名を使用した認証のための自分の公開鍵/秘密鍵ペアおよび関連する証明書を管理できます。また、通信するほかのユーザおよび組織の公開鍵をキャッシュすることもできます。Keytool は、**<SiteScope インストール・パス>%SiteScope%java%bin** ディレクトリにインストールされています。

---

**注意：**デジタル証明書を作成、要求、およびインストールする場合には、各手順で使用するパラメータおよびコマンド・ライン引数は非常に重要であり、繰り返し使用するものなので、必ずメモを取っておいてください。

---

Keytool の詳細については、  
<http://java.sun.com/j2se/1.3/docs/tooldocs/win32/keytool.html> (英語サイト) を参照してください。

本項の内容

- ▶ 206 ページ「認証局からの証明書の使用」
- ▶ 209 ページ「自己署名証明書の使用」

### 認証局からの証明書の使用

認証局が発行するデジタル証明書を使用できます。このオプションを使用するには、Keytool で使用されるキー・ストア・ファイルにインポート可能なデジタル証明書が必要です。自分の組織がこれに該当するデジタル証明書を持っていない場合は、認証局に証明書の発行を要求する必要があります。

キー・ストア・ファイルおよびデジタル証明書要求を作成するには、次の手順を使用します。

認証局に対する証明書要求ファイルを作成するには、次の手順で行います。

- 1 <SiteScope のルート・ディレクトリ>%groups ディレクトリにある **serverKeystore** ファイルを削除します。このファイルは削除しても、単にほかのディレクトリに移動してもかまいません。
- 2 <SiteScope のルート・ディレクトリ>%java%bin ディレクトリから次のコマンド・ラインを実行して、鍵ペアを作成します。

**注：**このコマンドおよびその他のコマンドはすべて、1 行で入力する必要があります。ここでは、ページに収まるようにコマンド・ラインを分割しています。

```
keytool -genkey -dname "CN=www.yourDomain.com, OU=yourDepartment,
O=yourCompanyName, L=yourLocation, S=yourState, C=yourCountryCode" -
alias yourAlias -keypass keypass -keystore ../%groups%serverKeystore -
storepass passphrase -keyalg "RSA" -validity valdays
```

このコマンドにより、< SiteScope のルート・ディレクトリ >%groups ディレクトリに「**serverKeystore**」というファイルが作成されます。SiteScope は、このファイルを使用して、セキュア・セッションで使用される証明書を格納します。このファイルのバックアップ・コピーを別の場所に保存しておいてください。

## ガイドラインと制限事項

- ▶ **-dname** オプションの値は、ここに示す順に指定する必要があります。イタリック体で示されている部分には、各自の環境に合わせた値を指定します。キーワードは、次に示す項目の略語です。

**CN = commonName** : 人名 (例 : Warren Pease)

**OU = organizationUnit** : 組織の小区分 (例 : NetAdmin)

**O = organizationName** : 組織の大区分 (例 : ACMe-Systems, Inc.)

**L = localityName** : 地域 (都市) 名 (例 : Palo Alto)

**S = stateName** : 州名 (例 : California)

**C = country** : 2 文字の国コード (例 : US)

- ▶ **-dname** (識別名文字列) 変数内のサブコンポーネントの大文字/小文字は区別されませんが、その順序は意味を持ちます (ただし、すべてのサブコンポーネントを指定する必要はありません)。**-dname** 変数は会社を表し、**CN** は SiteScope がインストールされている Web サーバのドメイン名です。
- ▶ **-storepass** には、キー・ストア・ファイルを保護するためのパスワードを指定します。パスワードは 6 文字以上で指定しなければなりません。キー・ストア・ファイルとの間で証明書のインポートや削除を行うには、このパスワードを使用する必要があります。
- ▶ **-alias** 変数は、キー・ストア内のエントリを識別するためのエイリアスまたはニックネームです。

認証局から証明書を受け取ったら (応答メッセージに **cert.cer** という名前のファイルが含まれています)、前述の手順で作成したキー・ストア・ファイルにこの証明書をインポートする必要があります。キー・ストア・ファイルの名前は **serverKeystore** になっています。証明書を SiteScope で使用するためにインポートするには、次の手順を使用します。

**認証局からの証明書をインポートするには、次の手順で行います。**

- 1 <SiteScope のルート・ディレクトリ>%java%bin ディレクトリで次のコマンドを実行して、証明書データをキー・ストア・ファイルにインポートします。  

```
keytool -import -trustcacerts -alias yourAlias -file cert.cer -keystore  
..%..%groups%serverKeystore
```
- 2 安全な接続を使用するように SiteScope を変更するには、SiteScope の特定の設定または設定ファイルを追加あるいは変更する必要があります。詳細については、210 ページ「SSL 用の SiteScope の設定」を参照してください。



## 自己署名証明書の使用

SiteScope で使用するための自己署名証明書を生成することもできます。このためには、次の手順に従って、Keytool ユーティリティで `-selfcert` オプションを使用して自己署名証明書を生成します。

自己署名証明書を使用するには、次の手順で行います。

- 1 <SiteScope のルート・ディレクトリ>%groups ディレクトリにある `serverKeystore` ファイルを削除します。このファイルは削除しても、単にほかのディレクトリに移動してもかまいません。
- 2 <SiteScope のルート・ディレクトリ>%java%bin ディレクトリで次のコマンドを実行します。変数には、自分の組織に固有な情報を指定します。

---

**注：**このコマンドおよびその他のコマンドはすべて、1 行で入力する必要があります。ここでは、ページに収まるようにコマンド・ラインを分割しています。

---

```
keytool -genkey -dname "CN=www.yourDomain.com, OU=yourDepartment,
O=yourCompanyName, L=yourLocation, S=yourState, C=yourCountryCode" -
alias yourAlias -keypass keypass -keystore ..%..%groups%serverKeystore -
storepass passphrase -keyalg "RSA" -validity valdays
```

- 3 <SiteScope のルート・ディレクトリ>%java%bin ディレクトリで次のコマンドを実行します。

```
keytool -selfcert -alias yourAlias -sigalg "MD5withRSA" -keypass password -
dname "CN=www.yourDomain.com, OU=yourDepartment,
O=yourCompanyName, L=yourLocation, S=yourState, C=yourCountryCode" -
keystore ..%..%groups%serverKeystore
```

- 4 安全な接続を使用するように SiteScope を変更するには、SiteScope の特定の設定または設定ファイルを追加あるいは変更する必要があります。詳細については、210 ページ「SSL 用の SiteScope の設定」を参照してください。

## SSL 用の SiteScope の設定

Tomcat で SSL を有効にするには、Tomcat サーバが使用する設定ファイルを変更する必要があります。

- 1 < SiteScope のルート・ディレクトリ > ¥Tomcat¥conf ディレクトリにある **server.xml** ファイルを開きます。
- 2 設定ファイルの次のようなセクションを探します。

```
<!-- Define a SSL Coyote HTTP/1.1 Connector on port 8443 -->
<!--
<Connector port="8443"
maxThreads="150" minSpareThreads="25" maxSpareThreads="75"
enableLookups="false" disableUploadTimeout="true"
acceptCount="100" debug="0" scheme="https" secure="true"
clientAuth="false" sslProtocol="TLS" />
-->
```

- 3 このセクションを次のように変更します。

```
<!-- Define a SSL Coyote HTTP/1.1 Connector on port 8443 -->

<Connector port="8443"
maxThreads="150" minSpareThreads="25" maxSpareThreads="75"
enableLookups="false" disableUploadTimeout="true"
acceptCount="100" debug="0" scheme="https" secure="true"
clientAuth="false" sslProtocol="TLS"
keystoreFile=" < SiteScope インストール・パス >
¥SiteScope¥groups¥serverKeystore"
keystorePass="testing"
/>
```

< SiteScope インストール・パス > は、SiteScope のインストール先のパスです。

**注：**

- ▶ SiteScope と同じサーバにほかの HP 製品がインストールされている場合は、競合を回避するために、ポート 8443 を別のポートに変更しなければならない場合があります。
  - ▶ Tomcat ログ出力は、**<SiteScope のルート・ディレクトリ>**  
**¥logs¥tomcat.log** ファイルに書き込まれます。ログ・ファイルの設定は、**<SiteScope のルート・ディレクトリ>**  
**¥Tomcat¥common¥classes¥log4j.properties** ファイルで実行できます。
- 

標準設定では、Tomcat は SiteScope ユーザのホーム・ディレクトリにある **.keystore** ファイルを探します。

Tomcat サーバ用に SSL を有効にする方法については、  
<http://tomcat.apache.org/tomcat-5.5-doc/ssl-howto.html> (英語サイト) を参照してください。

この例を使用して Tomcat で SSL を有効にしたら、次の URL で、SiteScope インタフェースを利用できるようになります。

`https://<sitescope サーバ>:8443/sitescope`

## クライアント証明書を要求する BSM サーバに接続するための SiteScope の設定

クライアント証明書を要求する BSM サーバに SiteScope を接続するには、次の手順で行います。

- 1 SiteScope サーバに接続します。
- 2 SiteScope のユーザ・インタフェースで [証明書管理] を使用して CA または BSM サーバ証明書を SiteScope にインポートします。詳細については、『SiteScope の使用』の「証明書管理の概要」を参照してください。
- 3 JKS 形式でクライアント証明書を取得した場合には、**<SiteScope のルート・ディレクトリ> %template.certificates** フォルダにコピーして、ステップ 11 から続行します。

---

### 注：

- ▶ プライベート・キー・パスワードが少なくとも 6 文字であること、またプライベート・キーとキーストア・パスワードが同一であることを確認します。
- ▶ さらに、上記のキーストアにキーストアを発行した CA 証明書が含まれていることを確認します。

---

そうでない場合には、以下のステップを実行します (JKS 形式でクライアント証明書を取得しなかった場合)。

- 4** <SiteScope のルート・ディレクトリ>%java%bin ディレクトリで次のコマンドを実行して、<SiteScope のルート・ディレクトリ>/templates.certificates にキーストアを作成します。

```
keytool -genkey -keyalg RSA -alias sis -keystore
<SiteScope のルート・ディレクトリ>%templates.certificates%.ks -storepass
<your_keystore_password>
```

次に例を示します。

```
keytool -genkey -keyalg RSA -alias sis -keystore
C:%SiteScope%templates.certificates%.ks -storepass changeit
What is your first and last name?
[Unknown]: domain.name
What is the name of your organizational unit?
[Unknown]: dept
What is the name of your organization?
[Unknown]: XYZ Ltd
What is the name of your City or Locality?
[Unknown]: New York
What is the name of your State or Province?
[Unknown]: USA
What is the two-letter country code for this unit?
[Unknown]: US
Is CN=domain.name, OU=dept, O=XYZ Ltd, L=New York, ST=USA, C=US correct?
[no]: yes

Enter key password for <SiteScope>
```

ENTER を押して、キーストア・パスワードと同じパスワードを使用します。

- 5** <SiteScope のルート・ディレクトリ>%java%bin ディレクトリで次のコマンドを実行して、このキーストアに対する証明書要求を作成します。

```
keytool -certreq -alias sis -file c:%sis.csr -keystore
<SiteScope のルート・ディレクトリ>%templates.certificates%.ks -storepass
<your_keystore_password>
```

次に例を示します。

```
keytool -certreq -alias sis -file c:%sis.csr -keystore
C:%SiteScope%templates.certificates%.ks -storepass changeit
```

- 6 証明局から証明書要求に対する署名を受けます。 `.csr` ファイルの内容をコピーして、証明局の Web フォームに貼り付けます。
- 7 署名付きのクライアント証明書を BASE-64 形式で `< SiteScope のルート・ディレクトリ>%templates.certificates%clientcert.cer` にダウンロードします。
- 8 認証局の証明書を BASE-64 形式で `c:%` にダウンロードします。
- 9 次のコマンドを実行して、認証局の証明書を JKS キーストアにインポートします。

```
keytool -import -alias ca -file c:%ca.cer -keystore  
<SiteScope のルート・ディレクトリ>%templates.certificates%.ks -storepass  
<your_keystore_password>
```

次に例を示します。

```
keytool -import -alias ca -file c:%ca.cer -keystore  
C:%SiteScope%templates.certificates%.ks -storepass changeit  
Owner: CN=dept-CA, DC=domain.name  
Issuer: CN=dept-CA, DC=domain.name  
Serial number: 2c2721eb293d60b4424fe82e37794d2c  
Valid from: Tue Jun 17 11:49:31 IDT 2008 until: Mon Jun 17 11:57:06 IDT 2013  
Certificate fingerprints:  
    MD5: 14:59:8F:47:00:E8:10:93:23:1C:C6:22:6F:A6:6C:5B  
    SHA1: 17:2F:4E:76:83:5F:03:BB:A4:B9:96:D4:80:E3:08:94:8C:D5:4A:D5  
Trust this certificate?[no]: yes  
Certificate was added to keystore
```

- 10 次のコマンドを実行して、クライアント証明書をキーストアにインポートします。

```
keytool -import -alias sis -file  
<SiteScope のルート・ディレクトリ>%templates.certificates%certnew.cer -  
keystore  
<SiteScope のルート・ディレクトリ>%templates.certificates%.ks -storepass  
<your_keystore_password>
```

次に例を示します。

```
keytool -import -alias sis -file c:%SiteScope%templates.certificates%certnew.cer -  
keystore C:%SiteScope%templates.certificates%.ks -storepass changeit
```

`<SiteScope のルート・ディレクトリ>%java%bin` ディレクトリのキーストアに証明書の応答がインストールされます。

- 11** <SiteScope のルート・ディレクトリ>%java%bin ディレクトリで次のコマンドを実行して、キーストアの内容を確認し、キーストアのパスワードを入力します。

```
keytool -list -keystore <SiteScope のルート・ディレクトリ>
%templates.certificates%.ks
```

次に例を示します。

```
keytool -list -keystore C:%SiteScope%templates.certificates%.ks
Enter keystore password:changeit

Keystore type: jks
Keystore provider: SUN

Your keystore contains 2 entries

ca, Mar 8, 2009, trustedCertEntry,
Certificate fingerprint (MD5): 14:59:8F:47:00:E8:10:93:23:1C:C6:22:6F:A6:6C:5B
sis, Mar 8, 2009, keyEntry,
Certificate fingerprint (MD5): C7:70:8B:3C:2D:A9:48:EB:24:8A:46:77:B0:A3:42:E1

C:%SiteScope%java%bin>
```

- 12** クライアント証明書にこのキーストアを使用するには、< SiteScope のルート・ディレクトリ>%groups%master.config ファイルに次の行を追加します。

```
_urlClientCert=<keystoreName>
_urlClientCertPassword=<keystorePassword>
```

次に例を示します。

```
_urlClientCert=.ks
_urlClientCertPassword=changeit
```

- 13** SiteScope で、[プリファレンス] > [統合プリファレンス] > [BSM プリファレンス利用可能操作] を選択し、[リセット] をクリックして、SiteScope サーバからすべての BSM 関連設定を削除し、BSM からすべての SiteScope 設定を削除します。

- 14 BSM で、[管理] > [システム可用性管理] を選択し、[新規 SiteScope] ボタンをクリックして、SiteScope インスタンスを追加します。

---

注 : SiteScope と BSM 間の接続に失敗した場合は、<SiteScope のルート・ディレクトリ>%log%bac\_integration.log にエラーがないか調べます。

---

## BSM サーバがクライアント証明書を必要とする時 SiteScope でトポロジ・ディスカバリ・エージェントの設定方法

クライアント証明書を使用して BSM ゲートウェイ・サーバに接続するように SiteScope を設定した後で (212 ページ「クライアント証明書を要求する BSM サーバに接続するための SiteScope の設定」を参照)、ディスカバリが BSM サーバにトポロジをレポートするように次のステップを実行する必要があります。

- 1 <SiteScope のルート・ディレクトリ>%WEB-INF%classes で security という名前のフォルダを作成します (存在しない場合)。
- 2 MAMTrustStoreExp.jks と ssl.properties を < SiteScope のルート・ディレクトリ> %WEB-INF%classes から < SiteScope のルート・ディレクトリ> %WEB-INF%classes%security フォルダに移動します。
- 3 CA 証明書 (または BSM サーバ証明書) を ) ディスカバリ・トラストストア (MAMTrustStoreExp.jks) にパスワードと共にインポートします (ディスカバリのデフォルトのパスワードは logomania で、次のように暗号化されます : [22,-8,116,-119,-107,64,49,93,-69,57,-13,-123,-32,-114,-88,-61]):

```
keytool -import -alias <your_CA> -keystore <SiteScope root directory>%WEB-INF%classes%security%MAMTrustStoreExp.jks -storepass <your_keystore_password>
```

次に例を示します。

```
keytool -import -alias AMQA_CA -file c:%ca.cer -keystore C:%SiteScope%WEB-INF%classes%security%MAMTrustStoreExp.jks -storepass logomania
```



---

**注:** プライベート・キー・パスワードは少なくとも 6 文字でなければなりません。またプライベート・キーとキーストアのパスワードは同一でなければなりません。

---

- 4 次のコマンドを使用してトラストストアのコンテンツを確認します。

```
<SiteScope root directory>%java%bin>keytool -list -keystore
<SiteScope root directory>%WEB-INF%classes%security%MAMTrustStoreExp.jks
-storepass <your_keystore_password>
Keystore type:<Keystore_type>
Keystore provider:<Keystore_provider>
Your keystore contains 2 entries
mam, Nov 4, 2004, trustedCertEntry, Certificate fingerprint (MD5):
<Certificate_fingerprint>
amqa_ca, Dec 30, 2010, trustedCertEntry, Certificate fingerprint (MD5):
<Certificate_fingerprint>
```

次に例を示します。

```
C:%SiteScope%java%bin>keytool -list -keystore C:%SiteScope%WEB-
INF%classes%security%MAMTrustStoreExp.jks -storepass logomania

Keystore type: JKS
Keystore provider: SUN

Your keystore contains 2 entries

mam, Nov 4, 2004, trustedCertEntry,
Certificate fingerprint (MD5): C6:78:0F:58:32:04:DF:87:5C:8C:60:BC:58:75:6E:F7
amqa_ca, Dec 30, 2010, trustedCertEntry,
Certificate fingerprint (MD5): 5D:47:4B:52:14:66:9A:6A:0A:90:8F:6D:7A:94:76:AB
```

- 5 SiteScope クライアント・キーストア (.ks) を  
＜SiteScope のルート・ディレクトリ＞%templates.certificates から  
＜SiteScope のルート・ディレクトリ＞SiteScope%WEB-INF%classes%security%  
にコピーします。
- 6 `ssl.properties` ファイルで、`javax.net.ssl.keyStore` プロパティをキーストア  
名に更新します。たとえば、`javax.net.ssl.keyStore=.ks` です。

- 7 キーストアのディスカバリ・パスワード（デフォルトは **logomania**）を一致させるために SiteScope クライアント・キーストア・パスワードを変更します。

```
keytool -storepasswd -new <Discovery_keystore_password> -keystore  
<SiteScope root directory>%WEB-INF%classes%security%.ks -storepass  
<your_keystore_password>
```

次に例を示します。

```
keytool -storepasswd -new logomania -keystore C:%SiteScope%WEB-  
INF%classes%security%.ks -storepass changeit
```

- 8 キーストアのディスカバリ・パスワードを一致させるためにプライベート・キー・パスワードを変更します。

```
keytool -keypasswd -alias sis -keypass <your_keystore_password> -new  
<Discovery_keystore_password> -keystore <SiteScope root directory>%WEB-  
INF%classes%security%.ks -storepass <your_keystore_password>
```

次に例を示します。

```
keytool -keypasswd -alias sis -keypass changeit -new logomania -keystore  
C:%SiteScope%WEB-INF%classes%security%.ks -storepass logomania
```

- 9 新しいパスワードを使用してキーストアを確認します。

```
keytool -list -v -keystore <SiteScope root directory>%WEB-  
INF%classes%security%.ks -storepass <your_keystore_password>
```

次に例を示します。

```
keytool -list -v -keystore C:%SiteScope%WEB-INF%classes%security%.ks -  
storepass logomania
```

- 10 SiteScope サーバを再起動します。
- 11 BSM で、**[管理]** > **[システム可用性管理]** を選択し、**[新規 SiteScope]** ボタンをクリックして、SiteScope インスタンスを追加します。**[プロファイル設定]** ウィンドウで、**[Web サーバで SSL を使用する]** チェック・ボックスを必ず選択します。
- 12 **[BSM]** > **[管理]** > **[RTSM 管理]** > **[IT ユニバース マネージャ]** > **[システム モニタ]** ビューにトポロジが表示していることをチェックします。

## トラブルシューティング

- ▶ 次のエラーについては、<SiteScope のルート・ディレクトリ>  
¥logs¥bac\_integration¥ に配置されている **bac-integration.log** を確認します。

```
2010-12-30 11:03:06,399 [TopologyReporterSender]
(TopologyReporterSender.java:364) ERROR - failed to run main topology agent.
topologyCommand=TopologyCommand{commandType=RUN_SCRIPT,
java.lang.IllegalArgumentException: cannot find script with name=create_monitor.py
at
com.mercury.sitescope.integrations.bac.topology.dependencies.DependenciesCrawler.findDependencies(DependenciesCrawler.java:60)
at
com.mercury.sitescope.integrations.bac.topology.dependencies.ScriptDependenciesFinder.find(ScriptDependenciesFinder.java:80)
at
com.mercury.sitescope.integrations.bac.topology.TopologyReporterSender.getDependencies(TopologyReporterSender.java:552)
at
com.mercury.sitescope.integrations.bac.topology.TopologyReporterSender.send(TopologyReporterSender.java:347)
at
com.mercury.sitescope.integrations.bac.topology.TopologyReporterSender.run(TopologyReporterSender.java:304)
at java.lang.Thread.run(Thread.java:619)
```

- ▶ 証明書およびキーストアのパスワードが同一であることを確認します。



# 第 V 部

---

作業の開始と **SiteScope** へのアクセス



# 16

## インストール後の管理

### 本章の内容

- ▶ インストール後の管理チェックリスト (ページ 223)

### インストール後の管理チェックリスト

このセクションでは、SiteScope のインストール後に実行する推奨手順を説明します。

✓	ステップ
	SiteScope サポートの登録。詳細については、19 ページ「スタートアップ・ロードマップ」を参照してください。
	Web ブラウザを使用して、SiteScope Web インタフェースにログオンします。詳細については、229 ページ「SiteScope への接続」を参照してください。
	SiteScope の以前のバージョンから SiteScope 11.10 にアップグレードする場合は、設定ツールを使用して、モニタおよびグループの設定データを以前の SiteScope から新しい SiteScope に転送します。設定ツールの使用方法の詳細については、135 ページ「SiteScope 設定ツールの使用」を参照してください。
	インストール時に SiteScope のライセンス情報を入力しなかった場合、SiteScope ヘルプ の "General Preferences" に従って、[一般プリファレンス] ページに入力します。新しい SiteScope は 評価ライセンスで 60 日間操作できます。ライセンスの詳細については、35 ページ「SiteScope のライセンス」を参照してください。

✓	ステップ
	<p>SiteScope 管理者アカウント用のユーザ名およびパスワードを作成します。これは標準のアカウントで、製品がインストールされると有効になります。このアカウントは SiteScope を管理するすべての権限を持ち、アカウントを制限しなければ、製品にアクセスするすべてのユーザが使用します。組織の要件に基づいて、その他のユーザ・アカウントを作成して設定します。詳細については、SiteScope ヘルプの「ユーザ管理プリファレンス」を参照してください。管理者ユーザにユーザ名とパスワードが定義されていない場合は、SiteScope はログイン・ページをスキップして自動的にログインします。</p>
	<p>SiteScope 電子メールのプリファレンスの電子メール・サーバに管理者の電子メール・アドレスを設定し、SiteScope が使用できるメール・サーバを指定して、電子メール・メッセージや警告をユーザに転送します。詳細については、SiteScope ヘルプの「電子メール・プリファレンス」を参照してください。</p>
	<p>監視を可能にするリモート・サーバの接続プロファイルを設定します。セキュリティ要件に応じて、使用する接続方法を指定します。詳細については、SiteScope ヘルプの「リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法」および「リモート UNIX サーバを管理するための SiteScope の設定方法」を参照してください。</p>
	<p>必要に応じて、ログのプリファレンスを調整して、監視データを SiteScope サーバ上に保持する日数を設定します。標準では、SiteScope は 40 日以上経過したログを削除します。監視データを外部データベースにエクスポートする場合は、データベースと必要なドライブを準備し、ログのプリファレンスを適切に設定します。詳細については、SiteScope ヘルプの「ログ・プリファレンス」を参照してください。</p>
	<p>リモート・データベースとの接続用のミドルウェア・ドライバと、ドライバを必要とするモニタ用のアプリケーションをインストールします。</p>
	<p>SiteScope を Business Service Management (BSM) のデータ・コレクタとして使用する場合は、BSM 統合を設定します。詳細については、SiteScope ヘルプの「接続の設定」を参照してください。</p>
	<p>SiteScope を使用して BSM で HP Operations Manager (HPOM) またはオペレーション管理 で使用するためにイベントを送信、またはメトリックをレポートするとき、HP Operations Manager 統合を設定します。詳細については、SiteScope ヘルプの「SiteScope と HPOM および BSM Operations Management の通信方法について」を参照してください。</p>



✓	ステップ
	ビジネス・システム・インフラストラクチャを評価して特定した要件と制約に基づき、グループおよびモニタ構成の枠組みを設定します。
	テンプレートを作成します。これによりグループ構造、命名規則、設定が標準化され、迅速にモニタをデプロイできるようになります。詳細については、SiteScope ヘルプの「SiteScope テンプレート」を参照してください。
	グループと主要なモニタの依存関係を作成し、過剰な警告を制御できるようにします。詳細については、SiteScope ヘルプの「グループの管理方法」を参照してください。
	SiteScope をビジネスの関係者およびシステム管理者に公開します。

SiteScope のユーザが定義され、監視データの受信が可能な状態で運用が開始されたら、ビジネス・ユーザおよびシステム・ユーザに対して、SiteScope のレポート機能および警告機能にアクセスして利用する方法を説明するプロセスを開始します。



# 17

---

## SiteScope を使った作業の開始

### 本章の内容

- ▶ SiteScope サービスの開始 (ページ 227)
- ▶ Windows プラットフォームでの SiteScope サービスの開始と 停止 (ページ 228)
- ▶ Solaris および Linux プラットフォームでの SiteScope プロセスの開始と停止 (ページ 229)
- ▶ SiteScope への接続 (ページ 229)
- ▶ SiteScope クラシック・インタフェース (ページ 231)
- ▶ 注意事項と制限事項 (ページ 231)

### SiteScope サービスの開始

SiteScope のプロセスは、インストール中にすべてのプラットフォームで起動されます。

- ▶ Windows プラットフォームでは、SiteScope は、サーバが再起動された場合に自動的に再起動するよう設定されたサービスとして追加されます。
- ▶ Solaris および Linux プラットフォームでは、SiteScope がインストールされたサーバを再起動する場合は常に、SiteScope のプロセスを再起動する必要があります。

本項で説明するステップを使用して、必要に応じて SiteScope のプロセスの開始と停止を手動で行うことができます。

## Windows プラットフォームでの SiteScope サービスの開始と停止

SiteScope は、Microsoft Windows プラットフォーム上のサービスとしてインストールされます。標準設定では、サーバが再起動されるときには常に、SiteScope サービスが自動的に再起動されるよう設定されています。[サービス] コントロール・パネルを使用して、SiteScope サービスの開始と停止を手動で行うことができます。

[サービス] コントロール・パネルを使用して SiteScope サービスの開始または停止を行うには、次の手順で行います。

- 1 [スタート] > [設定] > [コントロール パネル] > [管理ツール] > [サービス] を選択し、[サービス] コントロール・パネルを開きます。
- 2 サービスのリストで [SiteScope] を選択し、右クリックしてショートカット・メニューを表示します。
- 3 ショートカット・メニューから必要に応じて [開始] または [停止] を選択します。

### net start コマンドおよび net stop コマンド

net start コマンドおよび net stop コマンドを使用して SiteScope サービスの開始と停止を行うこともできます。

net start コマンドを使用して SiteScope サービスを開始するには、次の手順で行います。

- 1 SiteScope がインストールされているサーバのコマンド・ライン・ウィンドウを開きます。
- 2 次の構文を使用して netstart ユーティリティを実行します。

```
net startSiteScope
```

net stop コマンドを使用して SiteScope サービスを停止するには、次の手順で行います。

- 1 SiteScope を実行しているサーバのコマンド・ライン・ウィンドウを開きます。
- 2 次の構文を使用して netstop ユーティリティを実行します。

```
net stopSiteScope
```

## Solaris および Linux プラットフォームでの SiteScope プロセスの開始と停止

製品に付属するシェル・スクリプトを使用して、SiteScope 開始と停止を手動で行うことができます。init.d スクリプトを使用して、サーバが再起動されるときに SiteScope を自動的に再起動することもできます。

**Solaris および Linux 上で SiteScope のプロセスを開始するには、次の手順で行います。**

- 1 SiteScope がインストールされているサーバのターミナル・ウィンドウを開きます。
- 2 次の構文を使用して、start コマンド・シェル・スクリプトを実行します。  
＜インストール・パス＞/SiteScope/start

**Solaris および Linux 上で SiteScope のプロセスを停止するには、次の手順で行います。**

- 1 SiteScope を実行しているサーバのターミナル・ウィンドウを開きます。
- 2 次の構文を使用して、stop コマンド・シェル・スクリプトを実行します。  
＜インストール・パス＞/SiteScope/stop

前述のコマンドの＜インストール・パス＞を SiteScope がインストールされている場所のパスに置き換えます。たとえば、SiteScope が /usr ディレクトリにインストールされている場合には、SiteScope の stop コマンドは次のようになります。

```
/usr/SiteScope/stop
```

## SiteScope への接続

SiteScope は、Web アプリケーションとして設計されています。このため、SiteScope の参照と管理には、SiteScope サーバにアクセスできる Web ブラウザを使用します。

SiteScope は、2つのポート（8080 および 8888）で応答するようにインストールされます。このポートを使用するように設定されているサービスがほかにある場合は、インストール・プロセスによって別のポートで SiteScope が応答するように設定されます。

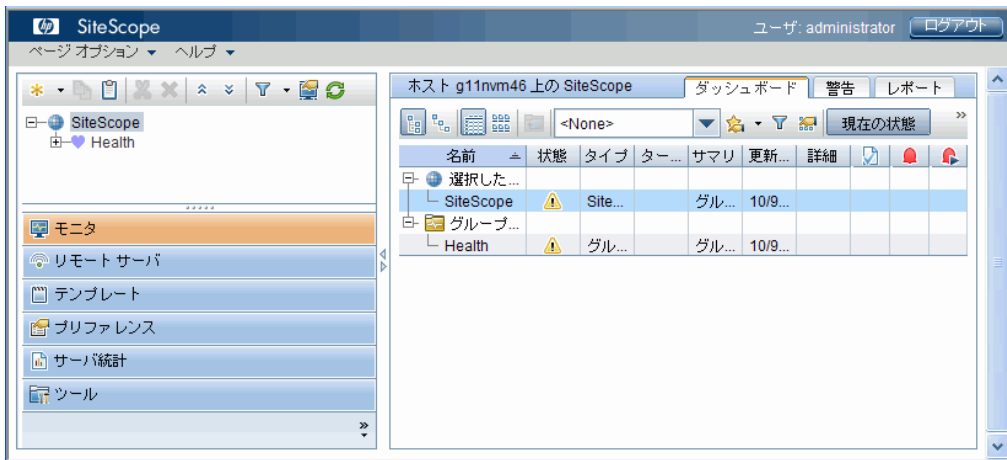
Windows プラットフォームでは、インストール・プロセスによって、[スタート] > [すべてのプログラム] の SiteScope 用にメニューに SiteScope へのリンクが追加されます。[スタート] メニュー・フォルダはインストール時に選択します。

## SiteScope へのアクセス

SiteScope にアクセスするには、Web ブラウザで SiteScope のアドレスを入力します。標準アドレスは、`http://localhost:8080/SiteScope` です。

Windows プラットフォームでは、[スタート] メニューから SiteScope にアクセスすることもできます。[スタート] > [すべてのプログラム] > [HP SiteScope] > [HP SiteScope を開く] をクリックします。SiteScope ポートを SiteScope のインストール後に変更した場合、ポートは「HP SiteScope を開く」リンクで更新されます。

SiteScope が初めてデプロイされた場合は、インタフェース要素の初期化のために遅延が生じます。次に示すように、SiteScope が [ダッシュボード] ビューで開きます。



### 注：

- ▶ このアカウントとその権限の使用を制限するには、管理者アカウント・プロファイルを編集して、ユーザ名とログイン・パスワードを含める必要があります。これにより、SiteScope にアクセスする前に SiteScope によってログイン・ダイアログが表示されます。管理者アカウント・プロファイルの編集方法の詳細については、SiteScope ヘルプの「ユーザ管理プリファレンス」を参照してください。
- ▶ SiteScope を別のマシンから表示する場合は、JRE (Java Runtime Environment) 1.6.0\_14 以降がインストールされているマシンを使用することをお勧めします。

## SiteScope クラシック・インタフェース

SiteScope の以前のバージョンで利用できた SiteScope クラシック・インタフェース (URL は `http://<sitescope ホスト>:8888`) は、SiteScope の管理には使用できなくなりました。

**master.config** ファイルの **\_serverFilter** プロパティにクラシック・インタフェースの特定のページが一覧表示されている場合は、引き続きこれらのページにアクセスできます。標準設定で一覧表示されているページには、[Monitor Summary] ページと [Alert Report] ページがあります。

---

**注：**標準設定で有効になっている SiteScope クラシック・インタフェースのページは削除しないでください。何らかの機能に影響を及ぼす可能性があります。

---

## 注意事項と制限事項

この項では、SiteScope へのログオン時の次の問題に対する注意事項と制限事項について説明します。

- ▶ 232 ページ「SiteScope が起動せず、エラー・メッセージが表示される」
- ▶ 232 ページ「SiteScope アプレットの読み込みが失敗して「NoClassDefFound」例外が表示される」
- ▶ 233 ページ「64 ビットのコンピュータからアプレットをロードする場合の問題」
- ▶ 233 ページ「Solaris にインストールされている SiteScope の場合：停止および起動コマンドを使用すると、「SiteScope failed to start as a background process」というエラーが表示されます。」
- ▶ 234 ページ「ブラウザ・ウィンドウの複数のタブで同じ SiteScope サーバを開くと、SiteScope がハングする」
- ▶ 234 ページ「SiteScope メニュー・バーが開くが、アプレットの起動に失敗し、空の画面、エラー、または「x」の画像が表示される」
- ▶ 235 ページ「SiteScope を起動できない場合に SiteScope インストールのバックアップとリカバリを行う」

## SiteScope が起動せず、エラー・メッセージが表示される

SiteScope アプレットの起動時に「Java Runtime Environmentがロードできません」というエラー・メッセージや、ほかの未知のエラーが発生した場合は、次の手順で行います。

各手順の後で、SiteScope を再度開いてみてください。それでもエラーが発生する場合は、次の手順に進んでください。

- 1 すべてのブラウザ・ウィンドウを閉じます。
- 2 Windows タスク・マネージャを使用して、実行中のブラウザ・プロセスがあればすべて終了します。
- 3 ローカルの Java アプレット・キャッシュを消去します。[スタート] > [コントロール パネル] > [Java] を選択します。[基本] タブで、[設定] > [ファイルの削除] をクリックし、[OK] をクリックします。
- 4 次のフォルダの内容を削除して、ローカルの Java アプレット・キャッシュを消去します。C:\Documents and Settings\<ユーザ名>\Application Data\Sun\Java\Deployment\cache

## SiteScope アプレットの読み込みが失敗して「NoClassDefFound」例外が表示される

アプレットの読み込みが失敗して「NoClassDefFound」例外が表示される場合は、クライアント Java 設定（[コントロール パネル] > [Java] > [基本] タブ > [インターネット一時ファイル] > [設定]）で [コンピュータに一時ファイルを保持します] を選択します。

セキュリティ上必要な場合は、SiteScope アプレットの使用が完了した時点でこれらの一時ファイルを手動で削除してください。

- 1 SiteScope アプレットを終了します。
- 2 [スタート] > [コントロール パネル] > [Java] > [基本] タブを選択します。
- 3 [インターネット一時ファイル] セクションで、[設定] > [ファイルの削除] をクリックします。



## 64 ビットのコンピュータからアプレットをロードする場合の問題

64 ビットのコンピュータで SiteScope を実行している場合、JRE ビットに一致するブラウザのバージョンを使用してください。

JRE	[ブラウザ]
64 ビット JRE	<ul style="list-style-type: none"> <li>▶ Internet Explorer (64 ビット)</li> <li>▶ FireFox (64 ビット)</li> </ul>
32 ビット JRE	<ul style="list-style-type: none"> <li>▶ Internet Explorer (32 ビット)</li> <li>▶ FireFox (32 ビット)</li> </ul>

### Solaris にインストールされている SiteScope の場合：停止および起動コマンドを使用すると、「SiteScope failed to start as a background process」というエラーが表示されます。

この問題は、再度起動を試みる前に SiteScope が正しくシャットダウンされなかったことにより発生する可能性があります。一部の環境では、SiteScope を起動して、その直後に停止すると、SiteScope が正しく停止されない場合があります。

この問題には次の 2 つの解決策があります。

#### 解決策 1 (SiteScope を起動する前に問題を回避する場合)：

- 1 SiteScope プロセスを手動で強制終了します。
- 2 `ps -e | grep SiteScop` を実行して、SiteScope プロセス ID を取得します。
- 3 `kill -9 <SiteScope のプロセス ID>` を実行します。

#### 解決策 2 (SiteScope を起動して、直ちに停止する場合)：

- 1 SiteScope を停止する前に、`<SiteScope のルート・ディレクトリ>%groups` フォルダに移動し、`monpid` というファイルがそのフォルダに表示されていることを確認します。
- 2 表示されていない場合は、作成されるまで数分間待機します。
- 3 SiteScope を停止します。

## ブラウザ・ウィンドウの複数のタブで同じ SiteScope サーバを開くと、SiteScope がハングする

ブラウザ・ウィンドウの複数のタブで同じ SiteScope サーバ・ユーザ・インタフェースを開いた場合、SiteScope サーバ・タブ間で移動を試みると SiteScope がハングします。

### 考えられる解決策：

- ▶ 重複しているタブを閉じ、同一の SiteScope サーバ・ユーザ・インタフェースに対してタブが 1 つだけ開かれた状態にします。
- ▶ または、新しいブラウザ・ウィンドウを開きます。

## SiteScope メニュー・バーが開くが、アプレットの起動に失敗し、空の画面、エラー、または「x」の画像が表示される

これは、Java コントロール・パネルが Web ブラウザを使用するように設定されていないために発生します。

### 考えられる解決策：

- 1 [スタート] > [コントロール パネル] > [Java] をクリックします。[基本] タブで [ネットワーク設定] をクリックし、[直接接続] オプションを選択し、[OK] をクリックします。
- 2 [詳細] タブで、[ブラウザのデフォルトの Java] フォルダ (または Java 5 を使用している場合は[<APPLET> タグのサポート)を展開します。[Microsoft Internet Explorer] と [Mozilla ファミリ] が選択されていることを確認します。[適用] をクリックしてから [OK] をクリックします。
- 3 ブラウザを再起動します。

## SiteScope を起動できない場合に SiteScope インストールのバックアップとリカバリを行う

SiteScope が停止し、再起動ができなくなったために SiteScope 設定データをリカバリするには、現在の SiteScope インストール・ディレクトリとこのディレクトリ内に含まれるすべてのサブディレクトリのバックアップを作成し、その後で新しいバージョンの SiteScope をインストールします。現在の SiteScope インストールをバックアップするには、設定ツールを使用して SiteScope データを ZIP ファイルにエクスポートするか、あるいは必要なファイルを手動でバックアップします。

SiteScope の再インストールが完了した時点で、モニタ設定データを SiteScope にコピーできます。設定ツールを使用してインストール・ディレクトリのバックアップを作成した場合は、設定ツールを使用してこのコピー作業が行えます。設定ツールを使用しなかった場合は、バックアップしたすべてのフォルダとファイルを新しいインストール・ディレクトリから削除してから、バックアップしたフォルダとファイルをこのインストール・ディレクトリにコピーします。

**SiteScope インストールをバックアップするには、次の手順で行います。**

**1** SiteScope を停止します。

---

**注:** 必ずしも必要ではありませんが、バックアップを作成する前に SiteScope を停止することをお勧めします。

---

**2** 次のいずれかの方法で、現在の SiteScope インストールのバックアップを作成します。

- ▶ 設定ツールを使用して、設定を zip ファイルにエクスポートする。詳細については、135 ページ「SiteScope 設定ツールの使用」を参照してください。
- ▶ 次のフォルダとファイルを、SiteScope インストールからバックアップ先にコピーします。

ディレクトリ	説明
¥cache	Business Service Management が停止していた場合に Business Service Management に報告されなかったデータ・サンプルが含まれています。
¥conf¥ems	統合モニタ・タイプとともに使用される重要な設定ファイルおよび制御ファイルが含まれています。これは、別の Business Service Management アプリケーションに報告するエージェントとして SiteScope を使用する場合にのみ適用されます。
¥conf¥integration	Business Service Management との統合に使用されるトポロジ・ファイルが含まれています。
¥discovery¥scripts¥custom	カスタム・ディスカバリ・スクリプトが含まれています。
¥groups	SiteScope の運用に必要な、モニタ、警告、レポート、およびその他の重要な設定データが含まれています。

ディレクトリ	説明
¥htdocs	定期レポートとユーザがカスタマイズした SiteScope インタフェースのスタイル・シートが含まれています。レポート・ページの損傷を防ぎ、古いレポートを表示するためには、このディレクトリをバックアップして SiteScope ディレクトリ (同じ SiteScope バージョンにあるディレクトリ) にコピーします。このフォルダは、設定を新しい SiteScope バージョンにインポートする際にバックアップできません。
¥logs	日付が記述された監視データのログなど、多くのログが含まれています。最新の監視データのログ・ファイルと、このディレクトリに含まれるほかのタイプのログを選択的にバックアップしてください。また、履歴の継続性を保つために、 <b>error.log</b> , <b>RunMonitor.log</b> , <b>access.log</b> , <b>alert.log</b> , <b>monitorCount.log</b> ログをバックアップすることもできます。
¥persistence	これは、この製品の中心的な永続ディレクトリです。このディレクトリには、モニタ、グループ、警告、テンプレートなど、定義されているすべての SiteScope エントリが含まれています。
¥scripts	スクリプト・モニタが使用するスクリプトが含まれています。
¥scripts.remote	スクリプト・モニタがリモート・サーバ上のほかのスクリプトをトリガするために使用するコマンド・スクリプトが含まれています。
¥templates.*	モニタの機能、アラートの内容、その他の機能をカスタマイズするために使用されるデータとテンプレートが含まれています。すべて <b>templates</b> という名前が始まるサブディレクトリのグループです。 <b>例</b> : templates.mail, templates.os, templates.webscripts
¥WEB-INF¥lib¥peregrine.jar	HP Service Manager 統合を設定した際に変更 (再生成) された可能性があるファイルです。

**SiteScope インストールをリカバリするには、次の手順で行います。**

- 1** SiteScope の新規インストールを実行します。詳細については、93 ページ「SiteScope のインストール」を参照してください。
- 2** SiteScope のインストールが完了した後で、次の処理を行います。
  - ▶ 現在の SiteScope インストール・ディレクトリのバックアップを作成するために設定ツールを使用した場合は、作成済みの zip ファイルを設定ツールを使用してインポートします。詳細については、135 ページ「SiteScope 設定ツールの使用」を参照してください。
  - ▶ バックアップを手動で作成した場合は、前述のフォルダとファイルをすべて新しいインストール・ディレクトリから削除してから、バックアップしたフォルダとファイルをこのインストール・ディレクトリにコピーします。

# 第 VI 部

---

付録





# A

---

## IIS と SiteScope の Tomcat サーバとの統合

Internet Information Server (IIS) を SiteScope に付属の Apache Tomcat サーバと統合するには、Apache Tomcat サーバが使用する設定ファイルに変更を行い、IIS 設定の対応する Web サイト・オブジェクトに仮想ディレクトリを作成します。

### 本章の内容

- ▶ Apache Tomcat サーバ・ファイルの設定 (ページ 241)
- ▶ IIS の設定 (ページ 245)

## Apache Tomcat サーバ・ファイルの設定

IIS を Apache Tomcat サーバと統合できるようにするには、SiteScope に付属の Apache Tomcat サーバの設定ファイルを編集しなければなりません。

**Apache Tomcat サーバ・ファイルの設定を設定するには、次の手順で行います。**

- 1 Apache のコネクタ・ファイルのダウンロード・サイトから最新の Java Connector jk をダウンロードします  
(<http://tomcat.apache.org/download-connectors.cgi> (英語サイト))。
- 2 `isapi_redirect.dll` ファイルを <Tomcat インストール・ディレクトリ>  
`¥bin¥win32` ディレクトリにコピーします。標準設定では、Tomcat サーバは SiteScope のインストール時に `C:¥SiteScope¥Tomcat` にインストールされます。このディレクトリが存在しなければ、`win32` ディレクトリを作成します。

3 次のいずれかを実行します。

- ▶ **isapi\_redirect.dll** ファイルと同じディレクトリに設定ファイルを作成し、**isapi\_redirect.properties** という名前を付けます。以下にこのファイルの例を示します。

```
# Configuration file for the Jakarta ISAPI Redirector

# The path to the ISAPI Redirector Extension, relative to the website
# This must be in a virtual directory with execute privileges
extension_uri=/jakarta/isapi_redirect.dll

# Full path to the log file for the ISAPI Redirector
log_file=C:¥SiteScope¥Tomcat¥logs¥isapi.log

# Log level (debug, info, warn, error or trace)
log_level=info

# Full path to the workers.properties file
worker_file=C:¥SiteScope¥Tomcat¥conf¥workers.properties.minimal

# Full path to the uriworkermap.properties file
worker_mount_file=C:¥SiteScope¥Tomcat¥conf¥uriworkermap.properties
```

この設定はログ・ファイル（<SiteScope ルート・ディレクトリ>  
¥Tomcat¥logs ディレクトリに含めることをお勧めします）と ワーカー・  
ファイルおよびワーカーのマウント・ファイル（<SiteScope ルート・ディ  
レクトリ>¥Tomcat¥conf ディレクトリに格納しなければなりません）を  
指します。

- ▶ 同じ設定エントリ（上記を参照）を次のパスのレジストリに追加します。  
HKEY\_LOCAL\_MACHINE¥SOFTWARE¥Apache Software  
Foundation¥Jakarta Isapi Redirector¥1.0

- 4 <SiteScope のルート・ディレクトリ>%Tomcat%conf ディレクトリに **workers.properties.minimal** という名前の SiteScope ワーカー・ファイルを作成します。以下に SiteScope ワーカー・ファイルの例を示します。

```
# workers.properties.minimal -
#
# This file provides minimal jk configuration
# properties needed to
# connect to Tomcat.
#
# Defining a worker named ajp13w and of type ajp13
# Note that the name and the type do not have to
# match.
worker.list=ajp13w
worker.ajp13w.type=ajp13
worker.ajp13w.host=localhost
worker.ajp13w.port=8009
#END
```

---

**注** : IIS と Tomcat が同じマシン上にない場合は、**workers.properties.minimal** のホスト属性をほかのマシンを指すよう変更します。

---

- 5 <SiteScope のルート・ディレクトリ>%Tomcat%conf ディレクトリに SiteScope ワーカーのマウント・ファイルを作成します。次に、前述の設定例と同じように、**uriworkermap.properties** という名前の SiteScope ワーカーのマウント・ファイルの例を示します。

```
# uriworkermap.properties - IIS
#
# This file provides sample mappings for example:
# ajp13w worker defined in workermap.properties.minimal
# The general syntax for this file is:
# [URL]=[Worker name]
/SiteScope=ajp13w
/SiteScope/*=ajp13w
#END
```

次の新しい構文は、SiteScope の 2 つのルールを 1 つに結合します。  
/SiteScope/\*=ajp13w

---

**注 :** Tomcat ログ出力は、**<SiteScope のルート・ディレクトリ>**  
**¥logs¥tomcat.log** ファイルに書き込まれます。ログ・ファイルの設定は、  
**<SiteScope のルート・ディレクトリ>**  
**¥Tomcat¥common¥classes¥log4j.properties** ファイルで実行できます。

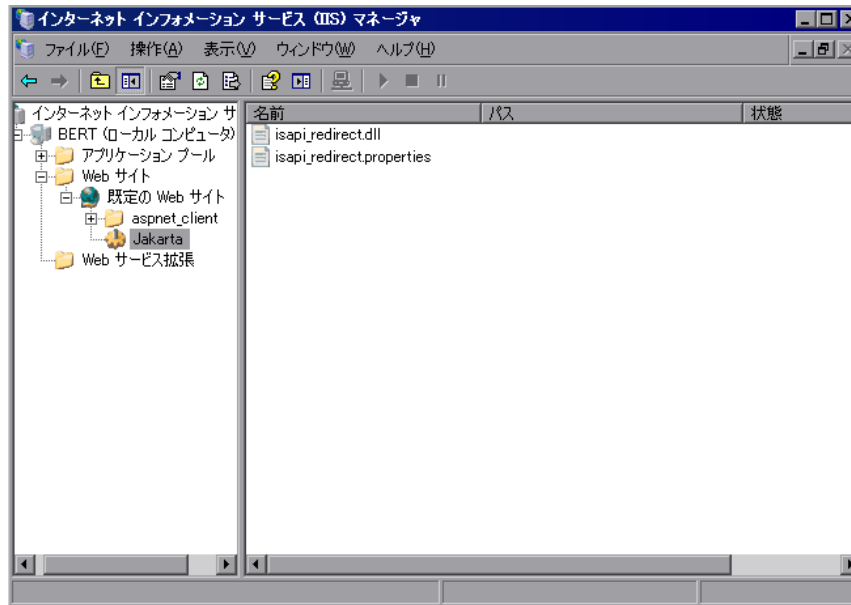
---

## IIS の設定

Tomcat サーバが使用する設定ファイルに変更を行ったら、IIS 設定の対応する Web サイト・オブジェクトに仮想ディレクトリを作成する必要があります。

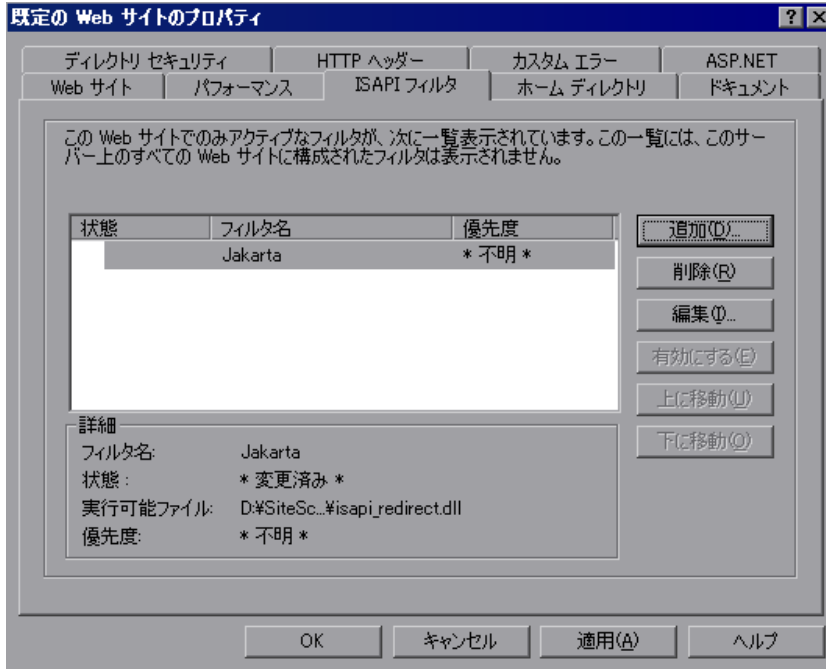
IIS を設定するには、次の手順で行います。

- 1 Windows で、[スタート] > [設定] > [コントロール パネル] > [管理ツール] > [インターネット インフォメーション サービス (IIS) マネージャ] をクリックします。
- 2 右側の表示枠で、「<ローカル・コンピュータ名>%Web Sites%<Web サイト名>」を右クリックし、[新規作成] > [仮想ディレクトリ] をクリックします。この名前を **Jakarta** に変更し、**isapi\_redirect.dll** が含まれるディレクトリに **ローカル・パス** を設定します。



- 3 <Web サイト名>を右クリックし、[プロパティ] をクリックします。

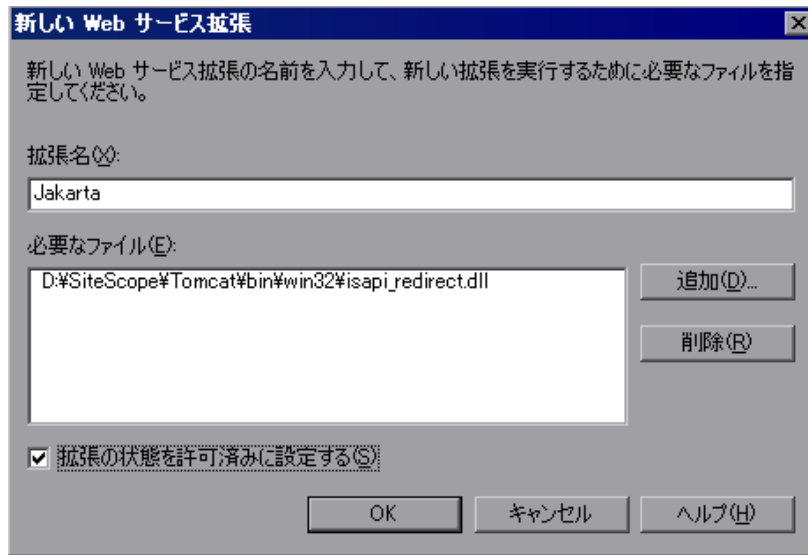
- 4 [ISAPI フィルタ] タブをクリックしてから、[追加] をクリックします。[フィルタ名] カラムで、「Jakarta」を選択し、isapi\_redirect.dll を参照します。フィルタが追加されますが、この段階ではまだアクティブではありません。



[適用] をクリックします。

- 5 [<ローカル・マシン名>] > [¥Web サービス拡張] を右クリックし、[新しい Web サービス拡張を追加] をクリックします。[新しい Web サービス拡張] ダイアログ・ボックスが開きます。

- 6 [拡張名] ボックスに「Jakarta」という名前を入力し、[必要なファイル] で isapi\_redirect.dll ファイルを参照します。[拡張の状態を許可済みに設定する] を選択します。



[OK] をクリックします。

- 7 IIS Web サーバを再起動し、Web サービス経由でアプリケーションにアクセスしてみてください。





# B

---

## SiteScope と SiteMinder との統合

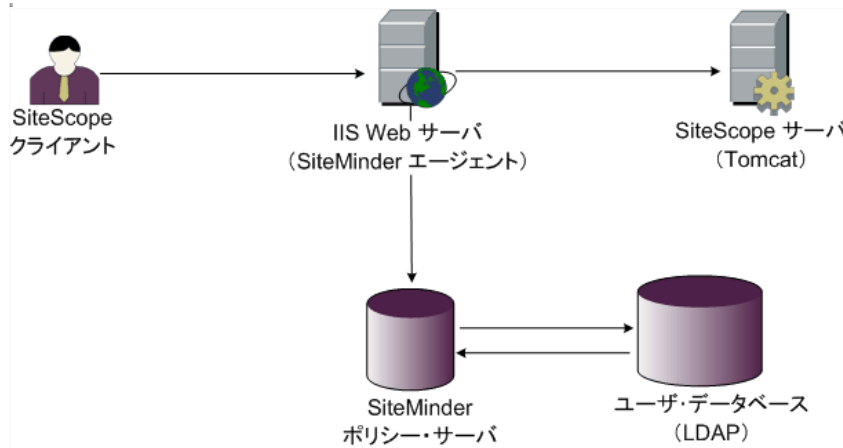
SiteScope は、セキュリティ・アクセス管理ソリューションである SiteMinder と統合でき、顧客のユーザとアクセス管理設定を活用できます。

### 本章の内容

- ▶ SiteMinder との統合について (ページ 250)
- ▶ 統合の要件 (ページ 251)
- ▶ 統合のプロセス (ページ 251)
- ▶ SiteMinder ポリシー・サーバの設定 (ページ 252)
- ▶ SiteMinder を使用するための SiteScope の設定 (ページ 254)
- ▶ IIS の設定 (ページ 254)
- ▶ さまざまな SiteScope ロールの権限の定義 (ページ 255)
- ▶ SiteScope へのログオン (ページ 255)
- ▶ 注意事項とガイドライン (ページ 256)

## SiteMinder との統合について

次の図で、SiteScope を SiteMinder と統合して、SiteScope ユーザを認証して権限を与える方法について説明します。



このアーキテクチャでは、SiteMinder エージェントは、SiteScope の Tomcat アプリケーション・サーバの前に配置された IIS Web サーバ上に構成されています。SiteMinder エージェントは Web サーバ上になければなりません。IIS Web サーバは、すべての SiteScope ユーザを (LDAP 上または任意のほかの同様のリポジトリ上で) 管理する SiteMinder ポリシー・サーバに接続されます。

SiteMinder エージェントはすべての SiteScope の関連トラフィックを傍受し、ユーザの資格情報を確認します。ユーザの資格情報は、認証と権限付与のため SiteMinder ポリシー・サーバに送信されます。SiteMinder はユーザを認証すると、ログインして SiteMinder の認証を渡そうとした正確なユーザを示すトークンを (特別な HTTP ヘッダを付けて) SiteScope に送ります。

---

**注:** SiteScope クライアント、IIS Web サーバ、および SiteScope Tomcat アプリケーション・サーバは同じマシンで構成することを推奨します。

---

## 統合の要件

この節では、SiteScope と SiteMinder を統合するためのシステム要件について説明します。

オペレーティング・システム	Windows 2000, Windows 2003 Standard/Enterprise SP1
Web サーバ	IIS 5.0, IIS 6.0
アプリケーション・サーバ	Tomcat 5.0.x
Java コネクタ	Java Connector jk-1.2.21 以降

## 統合のプロセス

この節では、SiteMinder との統合のプロセスについて説明します。

**SiteScope を SiteMinder と統合するには、次の手順で行います。**

### 1 SiteMinder ポリシー・サーバを準備して設定します。

SiteMinder 管理者は、Web エージェントのインストール、IIS Web サーバへの Web エージェントのインストール、および Web エージェントの設定のために、SiteMinder ポリシー・サーバを準備する必要があります。

さらに、SiteMinder 管理者は SiteMinder ポリシー・サーバを設定する必要があります。SiteMinder の推奨設定の詳細については、252 ページ「SiteMinder ポリシー・サーバの設定」を参照してください。

### 2 SiteMinder を使用するために SiteScope を設定します。

SiteScope を SiteMinder と統合できるようにするには、Tomcat サーバが使用する設定ファイルを変更する必要があります。詳細については、241 ページ「Apache Tomcat サーバ・ファイルの設定」を参照してください。

### 3 IIS を設定します。

IIS 設定の対応する Web サイト・オブジェクトに仮想ディレクトリを作成する必要があります。詳細については、245 ページ「IIS の設定」を参照してください。

#### 4 SiteScope のロールごとに権限を定義します。

SiteMinder との統合が有効になったら、SiteScope のロールごとに権限を定義しなければなりません。詳細については、255 ページ「さまざまな SiteScope ロールの権限の定義」を参照してください。

## SiteMinder ポリシー・サーバの設定

SiteScope 領域オブジェクト、認証用と追加属性を持つクッキーの送信用の 2 つの SiteScope ルール・オブジェクト、追加の LDAP 属性を SiteScope に転送する SiteScope 応答オブジェクトを生成することによって、また SiteScope ルールと応答をセキュリティ・ポリシー・オブジェクトに追加することによって SiteMinder ポリシー・サーバを設定します。

ポリシー・サーバで SiteScope 領域オブジェクトを作成する前に、次のことを確認します。

- ▶ ドメイン上に特別な管理者（1 つ以上のユーザ・ディレクトリ）が設定されていること。
- ▶ 1 つ以上のユーザ・ディレクトリ・オブジェクトが設定されていること。これらのオブジェクトは、LDAP ディレクトリまたはほかの任意のリポジトリに含まれるユーザを表します。
- ▶ 認証スキームを定義していること。

ドメインが 1 つ以上のユーザ・ディレクトリ・オブジェクトに接続されていること。領域用に特別なドメインを作成する必要はありません。既存のドメインを使用できます。

**SiteMinder ポリシー・サーバを設定するには、次の手順で行います。**

- 1 SiteMinder 管理にログインします。
- 2 領域を作成し、次の情報を入力します。
  - ▶ **名前** : 領域に名前を入力します。例 : **SiteScope realm**
  - ▶ **リソース・フィルタ** : **/SiteScope** と入力します。SiteScope 次のすべてが領域に含まれます。

- 3 新規領域を右クリックして、[**Create rule under realm**] をクリックします。
  - ▶ 認証用に新しいルールを作成します。ルールに分かりやすい名前を入力します (例 : **SiteScope rule**)。[**Action**] セクションで、[**Web Agent Action**] オプションを選択し、すべての HTTP 要求スキーム (**Get**, **Post**, および **Put**) を選択します。
  - ▶ クッキーおよびその他の属性の **SiteScope** への転送用に 2 番目のルールを作成します。ルールに分かりやすい名前を入力します (例 : **Users role**)。[**Action**] セクションで [**Authentication events**] オプションを選択し、ドロップダウン・リストから [**OnAuthAccept**] を選択します。
- 4 **SiteScope** 応答オブジェクトを作成して、追加の LDAP 属性を関連する認証情報とともに **SiteScope** に転送します。
  - a [**Responses**] を右クリックして、[**Response Properties**] ウィンドウを開きます。
  - b 応答に分かりやすい名前を入力します。例 : **SiteScope Role**
  - c [**Attribute List**] セクションで [**Create**] ボタンをクリックして、属性リストを設定するための新規ウィンドウを開きます。
  - d [**Attribute Kind**] セクションで、[**User Attribute**] オプションを選択します。
  - e [**Attribute Fields**] セクションで、変数名として **SITESCOPE\_ROLE** を選択し、**SiteScope** へのヘッダで送信されるあらかじめ設定されていたユーザ・ディレクトリから選択されたフィールドに属性名を選択します。これは認証用に送信されるユーザ・ディレクトリ属性です。

---

**注 :** LDAP グループ・オブジェクトまたはネストされたグループ・オブジェクトを使用して **SiteScope** のルールを定義している場合は、[**変数名**] フィールドに特別な **SiteMinder** 変数が使用されます。ネストされたグループの情報を **SITESCOPE\_ROLE** HTTP ヘッダに含める場合は、通常のグループには **SM\_USERGROUPS** 変数を使用しなければなりません。

---

- 5 SiteScope ルールと応答をセキュリティ・ポリシー・オブジェクトへ追加します。
  - a [Policies] オプションをクリックして、新規セキュリティ・ポリシーを作成します。
  - b ポリシーに分かりやすい名前を入力します。例 : **SiteScope Policy**
  - c [Users] タブをクリックして、ポリシーを適用するエンティティを追加または削除します (領域の同じドメインの一部であるユーザ・ディレクトリからのみエンティティを選択できます)。
  - d [Rules] タブをクリックして、手順 3 で説明した 2 つのルール、**Users Role** と **SiteScope Rule** を選択します。さらに、手順 4 のユーザ・ロールの応答として以前に定義された **SiteScope Role** 応答を追加します。

## SiteMinder を使用するための SiteScope の設定

SiteScope を SiteMinder と統合できるようにするには、Tomcat サーバが使用する設定ファイルを変更する必要があります。Tomcat サーバ・ファイルの設定の詳細については、241 ページ「Apache Tomcat サーバ・ファイルの設定」を参照してください。

## IIS の設定

Tomcat サーバが使用する設定ファイルに変更を行ったら、IIS を設定する必要があります。IIS 設定の詳細については、245 ページ「IIS の設定」を参照してください。

## さまざまな SiteScope ロールの権限の定義

SiteMinder との統合が有効になったら、(SiteScope の通常ユーザの権限モデルを使用して) SiteScope のロールごとに権限を定義しなければなりません。このロールへのユーザの関連付けは、LDAP グループ内など、SiteScope 外で行われます。新規 SiteScope ユーザが追加されたら、これは SiteMinder でのみ定義されなければなりません。ユーザは自動的に関連する SiteScope ロールから権限を継承するためです。

---

**注:** SiteMinder が使用する SiteScope ユーザ・アカウントにはパスワードが必要ないことを確認してください。パスワードがあると SiteMinder はログオンできなくなります。ユーザ・アカウントの作成の詳細については、SiteScope ヘルプの「ユーザ管理プリファレンス」を参照してください。

---

## SiteScope へのログオン

ユーザが SiteScope にログオンを試みると、SiteMinder が要求を傍受します。SiteMinder がユーザの資格情報を認証すると、SiteScope ユーザ名とロール(グループ)が SiteScope に割り当てられます(例: ユーザ「Fred」、ロール「Accounting」)。ユーザ名が有効なユーザ名として認識されなくてもロールが認識されれば、そのロールで SiteScope にログインできます(先の例では、ユーザ「Accounting」)。

**SiteScope にログオンするには、次の手順で行います。**

Web ブラウザを開き、次の URL を入力します。

`http://<IIS マシン名>/SiteScope`

---

**注:** IIS と SiteScope が同じマシンにある場合は、ポート 8080 ではなく標準設定のポート 80 に接続しなければなりません。

---

SiteMinder がユーザの認証に成功し、SiteScope にログオンすると、直接 SiteScope がダッシュボード・ビューを開きます。

## 注意事項とガイドライン

- ▶ SiteScope にログインしたすべてのユーザ名は監査ログに一覧表示されます。監査ログは、<SiteScope のルート・ディレクトリ>%logs ディレクトリにあります。これは、ユーザがロール名でログインした場合も同様です。たとえば、Fred というユーザが、SiteScope によって有効なユーザとしては認識されないけれどもロールは認識されたためにロールでログインした場合でも、すべての操作は監査ログでユーザ名 Fred で一覧表示されます。
- ▶ SiteMinder 環境からログアウトした後でブラウザがリダイレクトされるページを指定できます（これは、SiteScope で [ログアウト] ボタンをクリックすると開くページです）。ログアウト・ページを有効にするには、<SiteScope のルート・ディレクトリ> %groups にある master.config ファイルを開いて次の行を追加します。  

```
_siteMinderRedirectPageLogout=<url_to_go_to_after_logout>
```
- ▶ SiteMinder が SiteScope にログオンするときに使用するユーザ・アカウントにはパスワードを設定してはなりません。さもないと SiteMinder がログオンできなくなります。SiteScope でのユーザ・アカウントの設定の詳細については、SiteScope ヘルプの「ユーザ管理プリファレンス」を参照してください。
- ▶ ユーザが SiteScope URL を使用して SiteScope に直接アクセスするのを防ぐため、SiteScope のインストール時に Tomcat サーバで HTTP ポート 8080 および 8888 を無効にすることを検討してください。



---

# 索引

## 数字

64 ビット

64 ビットのインストール準備 96

## E

End Of Life Monitor Viewer 80

## H

HP ソフトウェア Web サイト 13

HP ソフトウェア・サポート Web サイト 12

## I

IIS

SiteScope との統合 241

設定 245

## L

Linux

SiteScope インストールの準備 95

SiteScope の要件 70

SiteScope プロセスの停止 229

## S

SiteScope

IIS との統合 241

Solaris および Linux プラットフォーム  
上でのサイズ設定 164

SSL の使用 205

SSL 用の設定 210

UNIX 環境での考慮事項 27

UNIX のスレッドの計算 164

Windows NT または 2000 環境での考  
慮事項 26

Windows 上でのサイズ設定 160

アップグレードの準備 79

アンインストール 171

インストール後の管理作業 223

インストールのための認定サーバ  
構成 74

インストール, 始める前に 65, 77

エージェントレス監視, 概要 29

エンタープライズの監視方法 21

管理者アカウントへのアクセス 224  
強化 179

クライアント証明書を要求する BSM  
サーバに接続するための設定 212

サーバの状態の監視 30

システム要件 68

使用されるポート 34

その他のサーバの監視 32

SiteScope サービス

実行 227

停止 227

SiteScope 設定ツール 135

SiteScope 設定ツール, Solaris, Linux 143

SiteScope 設定ツール, Windows 135

SiteScope のアップグレード 79

SiteScope のアンインストール 171

Solaris または Linux 176

Windows 171

SiteScope のインストール

コンソール・モードの使用 121, 150

SiteScope の設定 135

SiteScope へのアクセス 230

SiteScope への接続, 標準設定のイン  
タフェース 229

SiteSeer

SiteScope との統合 249

Solaris

SiteScope インストールの準備 95

## 索引

- SiteScope の要件 69
- SiteScope プロセスの開始 229
- SSL
  - CA 証明書のインポート 208
  - CA 証明書の使用 206
  - Keytool ユーティリティ 206
  - SiteScope の設定 205
  - SiteScope へのアクセス 180
  - 自己署名証明書の使用 209
  - 使用するための SiteScope の設定 210
- U**
- UNIX
  - SiteScope 使用考慮事項 27
  - JVM のサイズ設定 166
  - SiteScope のサイズ設定 164
  - スレッド・スタック・サイズのサイズ設定 166
  - ヒープ領域のサイズ設定 166
- UNIX/Linux
  - SiteScope 監視に適したシェル 27
  - SiteScope のアンインストール 176
  - 一般的なサイズ設定についての推奨事項 167
- V**
- VMware, サポート対象環境 70
- W**
- Web の監視
  - SiteScope のインストール 30
  - 使用されるライセンス・ポイントの見積もり 58
- Windows
  - SiteScope でのセキュア・シェル接続の使用 33
  - SiteScope の要件 69
  - 一般的なサイズ設定についての推奨事項 163
- Windows 2000
  - NT パフォーマンス・カウンタ・ライブラリ 31
  - SiteScope 使用考慮事項 26
  - SP2 でのメモリ・リーク 26
- Windows 上での SiteScope のチューニング 162
- Windows プラットフォーム
  - SiteScope サービスの開始 228
  - SiteScope サービスの停止 228
- あ**
- アカウント
  - root として SiteScope を実行 27
- アカウント権限, セキュリティ 27
- アプリケーション・パフォーマンスの監視, SiteScope のインストール 30
- アプリケーション・モニタ, 使用されるライセンス・ポイントの見積もり 58
- 暗号化, パスワードの暗号化 180
- い**
- 印刷ドキュメント 12
- インストール
  - Solaris または Linux での準備 95
  - 64 ビットのインストール準備 96
  - root として SiteScope を実行しない 95
  - Solaris または Linux プラットフォームのアカウント権限 120, 128
  - Windows, Solaris または Linux 93
  - Windows に関するユーザ・アカウント 26
  - 後の管理作業 223
  - インフラストラクチャの評価 23
  - 完全インストールの実行 97
  - サーバのサイズ設定 24
  - 手順の概要 66
  - デプロイメント計画 21
  - ネットワークの要素 25
- え**
- エージェントレス監視, SiteScope 29
- お**
- オンライン・ドキュメント 11
- オンライン・リソース 12

## か

## 監視

- ライセンス・タイプ 36
- ライセンス・タイプの概要 36
- AIX プラットフォーム 32
- HP/UX プラットフォーム 32
- NT パフォーマンス・カウンタ 31
- SCO プラットフォーム 33
- SiteScope でサポートされるプラットフォーム 32
- SiteScope でのセキュア・シェルの使用 33
- エンタープライズ・システムの方法 21
- ファイアウォール経由 34
- 管理者, ログイン・アカウント 224

## き

## 技術情報 12

## け

## 権限と資格情報

- ASP サーバ 192, 193
- COM+ 186
- F5 Big-IP 189
- FTP 190
- LDAP 190
- MAPI 191
- MIB による SNMP 200
- Oracle JDBC 196
- Ping 196
- Radius 196
- SAP CCMS 196
- SNMP 199
- Tuxedo 201
- URL 201
- Web サーバ 202
- WebSphere MQ 203
- Apache サーバ 183
- BroadVision 183
- CheckPoint Firewall-1 184
- CiscoWorks 185
- Citrix サーバ 185
- ColdFusion 185
- CPU (Solaris/Linux) 187

- CPU (Windows) 186
- HTTP 経由の SOAP 203
- IIS 194
- NT Dialup 194
- NT Perf カウンタ 194
- NT イベント・ログ 194
- Oracle 9iAS 196
- Real Media Player 196
- Real Media Server 196
- SAP GUI 197
- Siebel Web サーバ 198
- Siebel サーバ・マネージャ 198
- Siebel ログ 198
- SNMP トラップ 201
- SQL サーバ 194
- SunOne 201
- URL シーケンス 202
- URL 内容 201
- URL リスト 201
- WebLogic 5.x 202
- WebLogic 6.x 以降 202
- WebSphere 3.5x 203
- WebSphere 4.5 203
- WebSphere 5.x 203
- WebSphere パフォーマンス・サーブレット 203
- Web サーバ (Solaris, Linux, Windows) 202
- Web サービス 202
- Windows Resource 191, 195
- Windows Media Player 194
- Windows Media Server 194
- サービス (Solaris/Linux) 198
- サービス (Windows) 197
- スクリプト (Solaris/Linux) 197
- スクリプト (Windows) 197
- ディスク領域 (Solaris/Linux) 188
- ディスク領域 (Windows) 188
- ディレクトリ (Solaris/Linux) 187
- ディレクトリ (Windows) 187
- ニュース 196
- ネットワーク帯域幅 195
- ファイル (Solaris/Linux) 190
- ファイル (Windows) 190
- メモリ (Solaris/Linux) 191
- メモリ (Windows) 191

## 索引

リンク・チェック 190  
ローカル・マシン上のスクリプト  
(Solaris, Linux, Windows) 197  
ログ・ファイル (Solaris/Linux) 191  
ログ・ファイル (Windows) 190  
ディレクトリ 187  
データベース 187  
ポート 196  
メール 191

## さ

サーバの監視, リモート UNIX 上の適した  
シェル 27  
サーバの状態の監視, SiteScope のイン  
ストール 30  
サイズ設定  
Solaris および Linux プラットフォーム  
上の SiteScope 164  
UNIX 上のスレッド・スタック 166  
UNIX 上のヒープ領域 166  
サイレント・インストール 133  
サイレント・モードでの SiteScope のインス  
トール 133

## し

システム要件  
Linux 上の SiteScope 70  
SiteScope のインストール 68  
SiteScope の認定サーバ構成 74  
Solaris 上の SiteScope 69  
Windows 上の SiteScope 69

## せ

セキュリティ  
SiteScope アカウント権限 95  
SiteScope のセキュリティ強化 179  
SSL の使用 205  
標準のログイン・アカウント 224  
設定ツール, Solaris, Linux 143  
設定ツール, Windows 135

## そ

ソリューション・テンプレート

ライセンス 54

## て

デプロイメント  
SiteScope サーバのサイズ設定 24  
インフラストラクチャの評価 23  
計画の概要 21  
ネットワークについての考慮事項 25  
電子メール, 使用するための SiteScope の  
設定 224

## と

ドキュメント, オンライン 11  
トラブルシューティングと技術情報 12

## ね

ネットワークの監視, SiteScope のイン  
ストール 30

## ひ

評価期間 60

## ふ

ファイアウォール, 経由した SiteScope の  
監視 34

## へ

ヘルプ 11

## ほ

ポート  
監視に使用 34

## も

モニタ  
タイプごとに使用されるライセンス・  
ポイント 43

## ら

## ライセンス

- SiteScope での要求 61

- SiteScope モニタ 35

- ソリューション・テンプレート 54

- 無料の評価版 60

## ライセンス・ポイント

- Web の監視の見積もり 58

- 数の見積もり 57

## ライセンス・タイプ 36

- SiteScope の概要 36

## ライセンス・ポイント

- アプリケーションの監視の見積もり 58

## り

- リリース・ノート 11

## ろ

## ログ・ファイル

- データの保存量を設定 224

